

つた。秋を思はする風が断えず窓のガラス戸を鳴らして、獨り居るには静か過ぎる程の部屋であつた。この友を初めて知つたのはまだ私が早稻田大學の豫科に居る頃であつた。何課目かの試験の前でその日は特にそのための質問日とされてあつた。私はその頃夢中になつて讀んでゐた北村透谷の『透谷全集』を教師の眼の届かぬ室の隅の机に載せて一心になつて讀み耽つてゐた。その時、私の背後の机にゐるのが彼で、少し伸び上つて覗きこみながらコツ／＼と私の肩をつゝいた。

『そんな物を讀んどつちア落第しますぞ。』

顔の中で最も眼立つ大きな鋭い眼に微笑を見せて彼は言つた。聞けば彼も同書の愛讀者であつたのだ。そしてお互が九州生れであるといふやうな所から餘り親しくはしなかつたが何だか外ならぬ思ひがしてゐた。彼は肥前の名高い金満家の二男か三男かである事をあとから私は聞き知つた。

その後一年ほど経つと突然彼の姿が教場に見えなくなつた。彼と同じく哲學科に出てるた彼の同郷生に様子を聞くと、その男は笑ひながら斯う言つた。何か急に思ひついて郷里に歸つて二萬圓とか財産を分けて貰つて五島沖の小さな島を全部買ひしめて牛を飼つたり鶏を放したり桑や茶を植ゑてすっかり百姓を氣取つてゐる、が、あの變人の事だからいつまでそれが續くか解らないと。私もその島の名など聞いて葉書を出したが、返事は來なかつた。

その後四五年経つてから私が或る新聞社に勤めてゐた頃、或日突然彼は例の通りニヤ／＼しながら私の下宿を訪ねて來た。背廣の黒い帽子を被つて古汚い脊廣を著てゐた。亞米利加から昨日横濱に著いたのだといふのだ。

その島の百姓仕事は一年餘りで嫌になつて、島全體を二束三文に賣り拂つた金で暫く博多や長崎で馬鹿遊びをしてゐるが、それが盡きるとその頃重野安釋博士などの兄事してゐた老儒者が種々島に居るのを訪ねて行つてその學僕になつた。

『初めて行つた時、老先生自身玄關に出て御座つた、入門の事を頼むと黙つてその儘奥へ引き込まれたが、やがてちやんと袴を著けてまた出て御座つた。』

と、思ひ出した様に敬虔な眼をして彼は言つた。

其處ではかなり満足して仕へてゐたらしいが不幸にも其後間もなくその儒者は長逝した。彼はそれから亞米利加へ渡つた。以前財産を分けて貰ふ時から郷里の家とは義絶同様であつたらしいが、渡米の時汽船賃を貰つていよく家族親族から絶縁を申し渡されたのであつたのだ相だ。果樹園の雇、皿洗ひ、鐘詰工場の職工、さうした事をしながら其處此處と流れ歩いたが終に健康を害して昨日横濱まで歸つて來た。歸る時も一二の日本人と一緒に半ば下級の船員同様の仕事をやりながら太平洋を渡つて來たのだといふ。

『まだ船で取つた金の残りが幾らかある、これから何處かで一杯飲み直さう、矢つ張り生れた國の酒

が美味いね。』

と自分で注文して取り寄せた下宿の酒に舌鼓を打ちながら彼は言った。昔ながらの鋭い大きな眼にはもう以前の澄んだ所は失くなつて、いかにも落ち著かぬイラ／＼した光を宿してゐた。

彼はそれから暫く私の下宿にゴロ／＼してゐた。繪が好きで、よく繪具箱を擔いで郊外の雑木林などを寫生して歩いてゐたが、どうして傳手を求めたか、深川あたりのペンキ屋の職工に入り込んだ。酒の癖がよくないので、間もなく其店の主人を擲つて飛び出して、今度は電車の運轉手になつた。

東京にも立派な彼の親族や友人などがあつたのに、どうして従来手紙すら往復しなかつた私の所を選んで突然彼が訪ねて来たか不思議であつた。私も丁度その頃彼と同じ様に焦燥した、落ち著かぬ朝夕をのみ送つてゐたのであつた。一面非常に明るい静かな生活境を頭に描いて居りながら、眼前の一切にすべて深い興味や執着を持ち得ず、自分から求めた自暴自棄に走りながら、身體を捻ぢ曲げ／＼して暗い所へ這入つて行く様な日を重ねてゐた。其處へ同じ型ではあるが自身よりずつと大仕掛の放浪者の入り込んで来たといふことは一面迷惑ではあるが私にとつて非常に心丈夫な事であつたのだ。斯うして新米の電車運轉手と下級の新聞記者とは十錢二十錢の金を出し合ひながら、その日／＼を一杯二杯の酒に代へてゐたのである。
すると間もなく豫期してゐた不健康が其うちに私の身體へやつて来た。いよいよ東京の生活に耐へ

られなくなつた時、父の病死など起つて止むなく私は郷里へ引き込んだ。そして其處に二年近く我慢して、終に再び東京へ出て来た時は、彼は思ひもよらぬ燈臺守となつてこの神子元島へ渡つてゐたのであつた。

東京では似て非なる舊時通りの生活が私の身に始つた。健康や年齢の加減も加はつて到底舊時そつくりの状態に在ることには耐へ得なかつた。人生とか社會とかいふものを唯チラ／＼と横目に見ながら自分の性質の赴くまゝにズルズルと思はぬ方へ赴いてしまふことは當時の私にとつて餘りに無意味であつた。そして斷えず頭に描いて憧憬れてゐる自分の眞實の生活と、常にそれに裏切つてゐる放浪的な放浪的な性質とを私は先づそのいづれもが共有してゐるらしく見ゆる事業熱によつて調和しようと企てた。

そして、その企てはその何れもを互に混濁させ疲勞させたに留まつて——私全體の生命生活を空しく混濁させ疲勞させたに過ぎないことになつてしまつた。いよく／＼さうした状態のどん底に沈んで、手も足も出なくなつたと自分でも思はる、昨日今日になつて私は端なくこの洋上の一孤島に静まり返つてゐる舊友を思ひ起したのであつた。

海面から斷崖の絶頂まで十六丈、絶頂から其處に建てられた燈臺の最高部である燈室まで十二丈の

高さがあつた。その燈室は周圍も屋根も圓くなつて居り、そして總てが厚いガラスから出來てゐた。其處に登れば伊豆の天城山が最も眼近に北の方に見え、その蔭に駿河相模の山々が續いて、その反對には伊豆の七島がとび／＼に海上に散つてゐた。望遠鏡を取ると恐しい勢ひで流れてゐる黒潮の姿をもあり／＼と見ることが出來た。ツイ眼を落すと三十丈の眞下に激浪が白々と岩を噛んでゐた。どうかすると薄い雲がさつ／＼と風と共に音をたてて、その燈室を掠め飛ぶ事もあつた。霧の立つた夜など、其處に登つてゐると種々の山の鳥がその輝いた一部の空に沿うて怪しい聲で啼きながら飛び巡つてゐる事もあり、または暮地にその壁に飛びついて嘴を碎いて死ぬるものもゐた。多く天城の山から來るのだ相な。

けれども私のやうな神經衰弱症の者にはその燈室は餘りに明るくて、忘れて崖下の浪打際でも見やうものなら今にも其處へ飛び込まねばならぬやうな恐怖に襲はれがちで、到底落ち著いてぢつとしてゐる事など出來なかつた。そして私はその燈室とたゞガラス張の床一枚を隔てた階下の夜間宿直室といふのが好きであつた。燈臺の礎から其室に到るまでは厚さ四尺の花崗石の外壁のなかに螺旋形の暗い狭い階段が廻り／＼登つて來てゐるのだ。が、その室だけは面積にして疊二枚敷位ゐるの廣さを持つた圓い室となつて居り、小さいながら二個の窓がついてゐた。中には机と椅子とが一つづつ、それに油入れの罐や、燈室掃除用の拭巾などが置いてあつて、夜は宿直員一人づつが毎晩此室に詰めて頭上

の燈火を監視してゐねばならぬ筈なのだが、朝の大掃除と夕方の點火とのほかは殆んど其處に登つて來る人は一人もなかつた。

高い／＼階上の室内に居るといふ意識と晝間でもほんの黄昏がた位ゐるの明るさしかない静けさと、餘程荒れた日でもなくては眼下の怒濤の響すら聞えて來ぬ厚い四方の石の壁とは流石の神經質の私をしてもすつかり身心を解きほぐして全く自由に自分の魂を遊ばせることが出來た。岩の頭で友だちと共に釣を垂るる時のほかは、私は殆んど多くの時間を此處で過した。はては友も笑ひながら私のこの樂しみを妨げようとしなくなつた。

元來この島は周圍十五六町位の岩礁で、固い枝葉の一種の磯草が僅かに岩蔭に生えてゐるほか磯馴松一本をすら見ることが出來なかつた。水も無論無い。洗濯や入浴のためには天水を溜めるやうに鄭重な仕掛がしてあり、飲料水その他の食物及び日用品等をば一週間に一度つつ數哩を距てた對岸の下田港から燈臺附屬の便船で運んで來ることになつてゐた。岩石のほか柔い土といふものが少しも無いので、をり／＼交替で下田へ渡つて土を踏んで來ないと一種奇妙な病氣に罹りがちである相だ。

私がこの島に渡つてからいつの間にかその一週間が過ぎ行いて、明日は下田からの便船の來る日となつた。友から誘はれた魚釣を斷つて私はまた獨りでその好きな室へ登つて行つた。

椅子に凭つてゐると、眼の前の壁に懸つてゐる唯だ一つの小形の八角時計がチク／＼と動いてゐる

ほか、全く世界は死んだやうな静寂に閉されてゐる。とちた暎の次第に熱くなつて來るのを感じながら、私はまたこの二三日來頭の中に纏はり著いてゐる問題に就いて考へ始めた。

或日二人とも大きな岩の蔭に黙り込んで釣り入つてゐた時に突然友が私を見返つて問ひかけた。

『いま君は一體どんな暮しをしてゐるのだ。』

その聲にはいつもと違つて重々しい力が入つてゐた。二年あまり續けてゐた出版業には悉く失敗して借金ばかりが残つてゐるし、それ以來何處に勤めてゐるといふでもないといふことをば彼はよく知つてゐる筈だ。そして唯だ僅かに無名の青年文學者として立つてゐるといふだけのことです。親子三人の一家がどうして東京の真中で保たれてゐるのか、さうした状態についても大抵彼には消息が飲み込めてゐるに相違ない。

で、私もその質問には狼狽した。で、苦笑しながら何といふことなく釣竿を持つてゐる手首の垢づき切つて磨れ破れてゐる衣服の袖口を撮み上げた。

『これさ、どうも斯うも言ふことはないよ。』

友は笑ひもせずにそれにぢいつと眼を留めながら、

『實をいふと僕も君がそんなのを著て來たので初め臺長などに紹介する時、氣が引けて仕方が無かつ

たのだよ。あの變人の臺長が船着場まで人を出迎へたといふことも殆んど無いことなのに、その日はまた曾て見たこともない羽織袴まで著けて行つたらう。そんなにして出迎へられた君のそのさまと云つたら無かつたのだからねえ、僕は實際泣いたよ。』

さう言はれてみると、私にも言ひ難い羞恥の念が燃えた。

黙つてゐる私を尙ほ見守りながら彼は語調を轉じて言ひ續けた。

『どうだ、いつそ僕と同じ商賣を始めんか。』

『え？』

『燈臺に來んか、僕は色々考へたんだが、これは屹度君にも適すると思ふ。』

彼は竿を上げておいて専心に私の方に向いた。

『横濱にその學校みたいなのがあるのだ、それに六ヶ月入つてゐて、出さへすれば直ぐ二十二圓取れる、學校に居る時も七分通り官費でやつて呉れるから月々五圓か三圓もあれば足りるのだ。燈臺といへば大抵何處でも斯んな處だからネ、生活費なんか幾らも入りアせん、此處なんか月給の外に難場手當といふのを呉れるので僕なんかいま二十六圓ばかりになるのだが、つましくさへすれば十五圓か二十圓丸きり残るわけだよ、僕にだつてもう幾らかの貯金が出来てるのだから察しがつくだらう……、何も強ひて残さないでもいゝ、がさうして生活の根柢を固めておいて一方で君の創作を熱心にやればいゝ、

ぢアないか。毎日の仕事と云つた所で、朝の掃除と夕方の點火と、二三行の日記を書けば済むわけだ、それも交替だよ、故障なんか殆んどあるもんぢアないよ。暴風雨の日なんかにア一寸困るがその位のことア我慢せんぢア、」

いつ知らず私が耳を傾けてゐるので、彼は一層熱心になつた。

『満三十歳まではその學校に入られるから君には丁度一年まだ餘裕があるわけだ、……、なアに入學試験はあるが小學卒業程度でいゝし、それに若し君が入るとなれば此處の臺長から學校の方に一寸手紙を出させれば身體検査なんか如何にでもなるよ。學校を出て義務年限が二年あるが、それさへ経てば嫌になつたらいつでも止せるぢアないか。』

その日の談話は尙ほ細々と續いて行つた。そして兎に角僕にも少し考へさせて呉れと云つてその日はそれで終つたのであつたが、その時以來その問題はしつとりと私の頭にこびり著いてしまつたのである。

要するに自分如きは自ら社會の表面に出でずん／＼と押し進んで行くべき柄で無い。寧ろ物蔭に控へながら靜かに社會といふものを望み見てしみ／＼とそれを味ひつゝ、轉じてまた自分自身を味ひ養つて行く、さうした生活が最も身に叶つた自分の路では無いだらうか、若しさうとすれば友の言ふやうにこの燈臺に籠るのなどが最も適當してゐるかも知れない、——私は先づ斯う思つた。

自分は餘りに今まで自分といふものに期待し過ぎた。そしてそのため取り返しのつかぬ自分の生命を刻々に目に見えずして減して行きつゝあるではないか。その哀しむべき生命のためにもこの厚い石壁の室と眞青な大海とに抱かれて三年五年の休養をとる方がよくはないか——斯うも思つた。そして私はまだ餘りに何も知らない、知つてゐるのはほんの自分一個の眼前を通り過ぎる泡沫のやうな快樂や苦痛に過ぎない、あらゆる人類の底に通じて横はつてゐる深刻な、微妙な根本的の事實に就いては殆んど與り知る所がない。そのための讀書、思索、さうした事に要する金と時間のためにもこの燈臺生活は今までにない便宜を與へて呉れるだらう——斯うも思つた。

が、繰り返し／＼さう思ひ確かめようとするごとにあとから／＼と不思議なほどの力強い寂しさが身體の何處からか浸んで來て、自分ながら如何とも爲し得なかつた。それはもう理由もない、取り返しもつかぬ絶望的な、冷たいものであつた。

澄んだ、足速な壁の時計のセコンドの響が室内に満ち渡つて居る。とりわけても風のない日で高く聳えたこの燈臺自身も死んだ様な靜けさの裡に立つて居る。

矢張り自分は思ひ切つて友の親切な勸告をも斷らう、と終に私は悲しい氣持で決心した。そして、

『三年五年!』

呟きながら離るゝともなく椅子を離れた。實際口でこそ三年五年といふものの、一切先きの知れぬ自分にとつては假初にも油断のならぬ大切な時間である。その間をさうした休養とか云つてゐる餘裕などは如何にもありさうに思はれない。後は後、今は今、更にまた他ひとは他、自分は自分、矢つ張り現在あるがまゝに従つて揉まれてゐる方が、どれだけ自ら慰められるか解らない。

『それにこの燈臺の人たちの生活の單調さは如何だらう！』

飲み物、食物、見るもの、聞くもの、此頃見馴れてゐる斯うしたものがまざくゝと眼の前に並んで來た。そして、あの事務室の戸棚の隅にしよんぼりと入つてゐる埃だらけの藥品と醫療器械とを思ひ起すと、舊もとの健康を失つてゐるだけに、急に身體がぞつとした。

この風ならば明日は早く船が來るであらうと、今にもその船の見える様な氣持で、そゞろに小さな梯子から上の燈室へ登つて行つた。

海は誠によくはれて、大島の三原山の頂きには煙か雲か眞白に纏はり著いてゐる。それでもよく見れば流石にもう十月の末だ、吹くともなく西風が吹いてゐるらしく、島に近い海面には光つた波が先きから先きへ一齊に白けだつて續いて居る。

不圖眼を落すと燈臺の下の磯で釣つてゐる一人の男が居る。一本だな、と思ひながら見てゐると側の岩かげからその細君も表はれた。魚の餌にする小さな蟹を取るのはいつても彼女の役目であつた。

ちいつとそれを眺めながら、明日はこの友とも別れるのだと私は今更の様に思ひ當つた。

狐か人か (少年小説)

一

日本歴史のずつと初めの方によく出て来る日向國、其處が私の郷里である。地圖を開いて見ると日向國に耳川といふ河が流れてゐるだらう。餘り大きい川ではないが、それでも高瀬舟（激流を上下する細長い川舟を私の國では高瀬舟と呼んでゐる）が三十里近くの間通つてゐる。その河の河口の美々津港から今から二千五百年の昔に神武天皇が小さな船に帆をあげて東征の途に上られたのであつた。その耳川のずつと上流の山々の間の村で私は生れた。

それこそ西を向いても東を向いても高い高い山ばかりで、明けても暮れても青い大きな山ばかりを眺めて私は育つた。そんな處だから私の村には尋常小學校があるきりで、その尋常科を卒業すると、私は私の村から十五六里も離れた或る城下町に出て、高等科と中學校とを修業せねばならなかつた。丁度中學の二年級の頃であつたと思ふ。私は春の試験休みで一週間ばかり其町から私の村に歸つて

ゐた。そして或日のこと、隣村の叔母のところへ遊びに行つた。隣村と言つても五本松峠といふ上り下りで五里餘りもある大きな山を越さなくては行けないのだ。幼い時から山には馴れてゐるので、別にそんなに恐いとも思はず、私は一人で其山を越えて叔母の家へ行き、二晩程泊つてまた其路を自分の家へ歸りかけた。山の中に生れた故か、私は幼い時から獵が好きであつた。重くてよく持てもせぬ癖に父の獵銃を擔ぎ出して小鳥を打つ眞似などをしてゐた。で、父も母もそれを危ながつて、そんなに好きならといふので、或時父が大阪に行つた土産に小さな杖銃を買つて來て呉れた。御承知の通り杖銃は長さが三尺ばかりで、軽くはあるし、子供の私が弄んでもそんなに危険でなかつた。そしてかなり大きな鳥などでも打つことが出來た。自慢ではないが、其頃から私は銃を打つことが上手であつた。叔母を訪ねて行く時にも其杖銃を持つて行つた。行く路には餘り打てなかつたが、歸りには澤山な鳥を打つた。その五本松峠の頂上に登りつく頃には、鴨や、椋鳥などを十二三羽も打つて腰に吊してゐた。それが段々重くはなるし、路は嶮岨だし、山國ではまだ肌寒い四月の初めなのに、全身に汗をかい、私は漸くその峠の頂上に辿り着いた。流石に山が高いだけ、其頂上の眺望はまた素敵であつた。山といふ山の峰々が深い霞の中に浮き出てゐて、其間を縫ふやうにして細く白く光つてゐるのは谷や川である。遠くの山はただ薄紫に霞んでゐてよく解らないが、近くの峰々には時を得顔に山櫻が風もない靜かな眞晝に麗かに咲き盛つてゐる。現に私の佇んでゐる附近にも其木の太やかなのが一二本あ

つて、薄紅の花びらが、頻りにほろほろと散つてゐる。子供心にも私は此景色を美しく思ひ乍ら、よく四方の見渡されるやうな場所を選んで其處に腰を下した。つい周圍には早蕨の可愛らしいのが幾つも萌え出してゐる。身體を落着けて、身も心も靜かになると、四邊の木にいろいろの鳥の啼いてゐるのもよく聞えて來た。今は景色に見惚れてゐるので其聲を聞きつけて、直ぐ杖銃をとり直す心もなかつたが、それでも腰から十二三羽の見事な獲物を取り外して、あれこれと手に取つて見る樂しみをば忘れなかつた。少し息も休まつてから、私は辨當を食へ初めた。正午には少し早かつたが、お腹が充分に空いてゐた。一口二口食べてゐると、その美味は眞實骨身に響くやうであつた。

二

わざとゆつくり食べてゐると、不圖奇妙な物音が耳に通つて來た。最初は自分の耳鳴でもあるだらうと氣にも留めなかつたが、何となく氣に懸るので聴くともなく耳を澄すと、どうもそれは耳鳴ではない。微かながらもドンドンと響くのは太鼓で、ガンガンと鳴つてゐるのは鐘か何かの音である。私は思はずぎよつとした。自分の居るのは山の中である。しかも高山の頂である。其處等附近二三里が間には人家らしいものもないこともよく知つてゐる。犬とか牛とかの啼聲でももあるならばまだしものこと、鐘や太鼓の聞えて來る理由はどう考へてもあるべき筈がないのだ。早や轟き初めた胸の動悸を

強ひて押し靜めて私は更に耳を傾けたが、今は早や疑ひもない鐘太鼓の音である。その間に混つて人間の叫んでゐる聲もする。何時の間にか私は握飯を擲んだまま立ち上つてゐた。

殆んど無意識に私は小さな鐵砲を引き寄せた。そして既につめてゐたケースを引出して、代りにそれよりやや大きな散彈を詰め込んだ。それから獲物の小鳥をも身近に引寄せた。遠くに聞えてゐる鐘太鼓の音を私は、つきり狐か狸の仕業であると思つたからだ。私の持つてゐる獲物に眼をつけ、かういふ怪異を示して私を誑かしながら、それを盗まうとするに相違ないと信じたのだ。さういふ事は現に今日でも私の郷里には度々行はれてゐることである。で、もう眼前に狐か狸の群が迫つて來たやうに思ひ込んで、私はしつかりと身構へた。

これも山國の習慣で、山に入る時には何か刃物を身に帶びる事になつてゐるので、私も其時短刀を腰にしてゐたが、それにも心を配つた。ともすれば齒の根がたがたするのだが、今はもう恐いの怖ろしいのと言つてゐる時でない。逃げるにしても此深山をどう逃げられるものではない。力の限り防戦するより外はないのである。これも土地の習慣で、狐狸に誑されたと思ふた時には決して一步も動くな、動けば危険いと言はれてあるので、幸ひ其處にあつた松の根がたに學校で教はつた「折敷きの構へ」で、鐵砲を持つたまま無理に沈着を装うて、今にも迫つて來る危難に對して待ち設けた。もう其時は身體中が耳ばかりになつたやうで、例の怪しい物音は益々明かに、人聲も次第に近づいて來る。

随分長い間同じ姿勢で私はその物音のする方向に向つて待ち構へてゐた。幾らか近づいては來るが、中々遅い。ぢいつと見張つてゐる私の兩眼からはほろりほろりと涙が浸み出はじめた。いつそのこと、此方から聲を掛けてやらうかと思つたが、聲がどうしても出ない。咽喉が引きつけるやうで、呼吸すら苦しくなつた。咽喉ばかりでなく、力を張り切つてゐる全身まで石のやうに固くなり、且つ痛くなつて來た。たうとう耐り兼ねて、私の指先は鐵砲の曳金に觸れた。ど、んといふ響は山から山、谷から谷へ長い尾を引いて響き渡つた。と同時に、不思議なるかな、鐘太鼓の音がハタと止んだ。思はず私も立上ると、今度は今迄よりも統一した明かな人間の聲で、オーイと叫ぶのが聞えた。今の一發の鐵砲で、いつか身體に餘裕が出來たものと見え、思はず知らず私の咽喉からも、オーイといふ聲が出た。

オーイと呼び、オーイと應ふる。どうもそれが眞實の人間の聲らしくてならなかつた。しかも幾らか聞き覚えのある聲のやうにまで思はれて來た。かうまで巧たくみに化けられるものかとは思ひ乍ら、私はまた聲をかけた。

『オーイ、誰かッ。』

『おつどむぢア、わりやアだりか（俺達だ。お前は誰だとの意味。）』
とすぐ斯う答へた。まがひもない人間の聲である。

『俺だよ、俺だよ。』

と私は我知らず續け様に本音を出してかう答へた。

すると何かがやがや騒いでゐるが、急にこちらを指して登つて來るらしい様子だ。もう太鼓の音などはしなくなつた。私は直ぐ鐵砲の彈を新に込め代へたが、もう今迄の様な姿勢をしてゐなかつた。提げたまま松の根方に立つてゐた。

三

がさがさと下の木立の中から登つて來るのを見てみると、眞先まつきさきに出て來たのが私と同じ村の若者で仁三にきといふ男、その次が同じく徳といふ元氣者、あとから續いて來る四五人の者も皆見知り合ひの村の者どもだ。見れば各自めいめいに石油罐あびきの空や金盃かねの古や太鼓やを提げてゐる。

向ふでも私を見て驚いた。如何してこんなところ來てゐるのか、同伴どうはんの者は誰かなどと尋ねる。私は叔母の許に行つた歸り路のことを答へて、お前達は何故そんなものを持つてこんな山の中を騒ぎ廻つてゐるかと訊いた。すると徳は笑ひ出した。

『坊まへなよつほづおづかつたどハハハハハ（坊ちゃんは無恐しかつたでせうといふ意）……………』

私もつい笑ひ出したが、それでも不審は晴れなかつた。なほよく訊けばかういふ譯なのださうだ。

矢張り私どもの村に松藏といふ大工がゐた。この男はこれまでも一二度神隠しに會つたことのある男だが、今度もまた神隠しに合つた。以前の事もあるので、一二日もすれば歸つて來るだらうと捨てて置いたところ、今度は中々歸つて來ぬ。もう今日で四日目にもなつてゐるので、村の者もそれぞれ手分けして山から山を鐘太鼓で捜してゐるのだといふのだ。なアンだ、そんな事かと私にも理由が解つて、今度は心から大笑ひをしたのであつた。神隠しといふのは矢張りこんな山深い所にはよくある話で、何といふ理由もなく不意に人が居なくなることがある。一日か二日でその人はまたほんやりと村に歸つて來ることもあり、終には行衛不明になつてしまふこともある。歸つて來た者の話を聞くと、何だか大變立派な御殿の様な所に行つてゐたと答へる者もあり、どんな所を如何して來たか、一向に解らないと言ふ者もあつた。眞實に山にそんな悪戯好きの神様があつてする仕事か、それとも狐狸の仕業か、理由は確と解らなかつたが、兎に角度々そんな事が行はれてゐた。だから松藏大工がそれに會つたと聞いてもそれ程驚きもしなかつた。いづれ茫然して二三日うちに歸つて來ることと子供乍らにも思つてゐるが、二三日は愚か、一月経つても一年経つても歸つて來なかつた。……………

麥の秋

ふと眼を覺すと、隣の部屋ではもう人聲がしてゐた。いつものやうに彼はそれを聞くと寢返りをして雨戸の方を見たが、其處の節穴にはまだ何の明るみも無かつた。

澄ますともなく耳を澄ますと、隣室の物音が平常と違つてゐるのに直ぐ氣がついた。いかにも何かを憚つたやうな、ひそ／＼した調子である。そして聞き馴れぬ聲すら混つてゐる。

『は、ア、始つたな！』

と彼は思つた。

果して産婦の忍び兼ねたらしい唸聲が聞えて來た。

聞き馴れぬ聲は隣家の女房らしい。低いながら力をこめて、今一度産婆さん所まで迎へに行つて來いと宿の娘に言ひつけて居る。

『獨りぢアおつかねえなア！』

『ぢア、辰ちやんを連れて行きな』

『いやだア、おらア』

夙くから起されてゐたのだらう、弟の辰ちゃんの聲もいつもの寢惚聲^{ねぼせこゑ}ではなかつた。お婆さんがゐないので皆困つてゐるのだと彼はまた寢返りをしながら、一昨日の夕方あたふたと横濱へ出かけて行つた宿の婆さんのことを思ひ起した。

彼が部屋を借りてゐる家には平常はその婆さんと二人の孫としかゐるのであつた。家を繼いでる一人きりの息子は半農半漁の家業を嫌つて、海軍を志願して出てゐたが、それから歸つても東京や横濱に出て種々な仕事に手を出してゐたが、數年前から横濱で小さな運送業を始め、達磨船の一二艘も作つて、今度はや、おちついてその仕事を續けてゐた。その達磨船はいつの間にか失くして行つた田畑のあとに辛うじて婆さんが引留めて置いた家や宅地や家のめぐりのほんの食扶持^{くひがち}の田畑などを全部抵當にして借りた金で作つたものであつた。此頃ではその金の催促が随分烈しくなつてゐるのを彼は知つてゐた。どうせあれの代^{たがひ}でこの家も壊れるのでせうよ、とさうした用件の手紙の代筆を彼に頼みながら婆さんはその時々^{とき}に愚痴をこぼして泣いてゐた。

臨月だといつていつもの様に子を産みに嫁が横濱から歸つて來たのは先月の初めであつた。もう四十歳を越した女で、初産の時よりも恥しいと逢ふ人ごとに言譯しながら、わけても目に立つ大きな腹を抱へて不安さうにその日の來るのを待つてゐた。矢張り齡^いが齡だからだらう、どうも月が遅れるや

うだとも婆さんと話し合つてゐた。

其處へ突然息子から病氣危篤の電報が來たので、産婦と子供とを残しながら婆さんは取るものも取りあへず横濱へ出かけて行つたのであつた。妾^{めかけ}の來る頃から脚氣の氣味だつたが、大方それがひどくなつたのだらう、一昨年もそのために命を取られかけて五ヶ月も寢てゐたこともありましたが、それに今年はまた丁度四十二の厄年にも當つてゐますから、といよゝゝ心細げに産婦はその後で彼に語つた。

何か小言を言ひゝ幼い姉弟は隣家の女房に叱られて家を出て行つた。眼はすつかり覺めて、もう起きやうかとも考へて見るのだが彼の枕許の節穴はまだはつきりとは明るまなない。何とはなく胸がときめいて手足には微かな汗を覺えながら、彼は聞くともなく不快な唸り聲を床の中で聞き續けてゐた。産婆らしいのが子供に連れられてやつて來た。模範村とかいふのにしたいため貧乏役場なのにも係らず年二百圓で村長が東京から雇ひ入れたといふ産婆だナ、と思ひながらまだねつから、年若さうな東京辯の女の聲に耳を傾けてゐたが、間もなく石炭酸の臭氣が襖を漏れて來るやうになつて彼は終に跳ね起きた。

思つたより戸外^{そと}は明るかつた。そこゝに顔を洗ひ、濡手拭をさげたまま濱の方へ歩いて行つた。

風いだ海向うの山脈は濃い藍色にうち續いて、その中腹から麓にかけていかにも夏らしい靄がうつすらと柵引いて居る。今日も晴れるナ、と思ひながら浪に近い濡砂の上に躑躅しやがんで彼は燐寸に火をつけた。

一時間あまりも濱にゐて宿に歸つたが、まだ子供は生れてゐなかつた。直ぐ温いのが出來ますからと加勢に來てゐる近所の女房達の言ふのを聞き流して、昨夜ゆうべの食ひ残りの飯を掻き込むと直ぐ彼は釣竿を取り出してまた家を出た。石炭酸の臭氣は今家いつばいに流れて、さも事ありげにひそ／＼と喋舌り合つてゐる漁師の女房どもはいつの間にか三四人にも増してゐた。それに隨いた鼻垂らしの子供たちも大勢庭さきや土間の中に集つてゐた。

氣が向かぬせるか、その日はいつもほど釣れなかつた。小さな半島の岡から岡の田畑の間を縫ひながら流れ出てゐる薄濁りの小川で沙魚しゃぎや小鮒が釣れた。土地の者は子供たちですらそれを釣ることを面倒臭がつてゐるが、彼は浪の荒い磯に出て黒鯛や鱸を釣るよりその藪蔭の濁つた淀みに人にかくれて糸を垂れることを好んでゐた。半日も坐つてゐると少くとも三四十疋は釣れるのが當であつた。

彼の行きつけの場所は對岸が暗く茂つた孟宗竹の林で、一方は木や竹の浅い藪となつて居り、その藪蔭に腰を下すと彼自身にも淵の上にも殆んど日光の射さぬやうな所であつた。斑らな木洩日は何か

の生物のやうにくつきりと水や岩の上に影を投げ、風でも立つと鉤かりを下す場所もないほど孟宗の枯葉が水の上に散り布いた。直ぐ川下の瀬の響や、孟宗竹のあちらで鳴く鶏のほか、投げ出した彼の足のめぐりを這ひ廻る無數の小蟹の足音などが僅かに耳についた。

釣り飽いた彼は竿をそのまゝにしておいて藪蔭のや、乾いた所を選び、用意して來た新聞紙を幾枚か重ねて敷いて其上に仰向けに寝轉んだ。白と淡紅たんこうと斑かになつた蔓草の花が棕の稚木の枝からツイ彼の顔の上に垂れ懸つて咲いて居る。そしていかにも初夏らしい強い匂ひがその花から滴つて來た。靜かな日で彼さへ動かねば附近おたひの竹の葉ひとつ動かうとしない。をり／＼吹き出す彼の煙草の煙がその蔓草に纏りついてはやがてかすかに消えて行つた。

睡眠不足の氣味か、彼は朝から妙に頭が暗かつた。何か不吉の事の起り來る前兆のやうな、いらいらした落ちつかぬ氣持が胸いつばいになつてゐた。まだ耳に残つてゐる産婦の唸聲、横濱に行つて耳の遠い婆さんの顔、戦争以來損失續きで唯一の商賣道具である達磨船すら今にも借金の抵當かたに取られかけてゐるといふその息子の病氣のこと、それらが斷れ／＼に頭の中に浮んでは消えた。さうかと思ふと、この二三ヶ月米味噌の拂すら滞りがちで今は取りつけの店への出入すら苦しくなつてゐる自分自身の現在が思ひ出されて、はてはまた此儘にしてゐて一體自分等はどうなるのだらうといふ此頃ともすれば起りがちの不安までだ／＼と起きて來た。

よく／＼費用も盡きて醫師とも相談の上、永い間の妻の病氣を全治さすため彼がこの半島の漁村に移り住んでからいつのまにか一年半あまり経つてゐる。移つてからも随分執拗であつた病氣も土地のいゝためか知らず／＼恢復して丁度今から一月ほど前、それまで看護に來てゐた彼女の妹を送りかた／＼二人の子供を連れて妻は其處から五六十里距てた山國の實家の方へ歸つたまゝ、まだ彼の許に歸つて來ないでゐた。初め妻のために思ひ立つた事ではあつたが、この海岸へ移つたことは彼自身にとつても寧ろ偶然に永い間の希望が果された形であつた。彼は夙うから東京の亂雑な朝夕を嫌つてゐた。そして自分の營んで行かうとする眞實の生活から知らず／＼離れて行くやうな不安と焦燥とを常に感じてゐた。彼は自身の性質が人なかに立つて派出な暮しをして行くことより、常に蔭に／＼とかくれて、靜かに他を見自己を眺めて暮して行くことを好んでゐるのを知つてゐたのである。それかと云つて東京を離れてしまふことは第一職業——定収入から離れることであり、且つは彼の日頃から抱いてゐる和歌の研究創作の上にも不便を生じはせぬかと氣づかはれ、またその和歌を作ることによつて僅かに得てゐる文壇上の地位を危くする惧もあり、なかく／＼斷行し得なかつたのである。それが今度止むを得ぬ事情から斯うして田舎に移つて來て、次第におちついて來てみると、定収入を失つた苦痛のほかは總てが杞憂に過ぎなかつたことが解つた。研究には兎に角、單に創作する方から云へば東京で忙しい中にやつて居るより遙かに自由に胸一杯に作ることが出来るし、同僚の間で最も忌み嫌つて居

る「都落ち」といふことなどてんで頭に上らない位ゐるの強い創作慾を感じるやうになつてゐたのである。そして自分はいま初めて自分の眞實來ようと思つてゐた所へ來てゐるのだと思ひ出した。

で、妻の恢復したのを認めても彼はまた東京へ引返すことを欲しなかつた。そして、不自由な寂しい漁村の生活では月二十圓餘もあれば、如何にか一家四人が暮して行けるので、その費用をば彼はその好む道の歌を詠むことによつて得ようと企てたがそれはなかく／＼思ふやうに行かなかつた。

歌を詠む、といふことに就いては彼は相當に了解と自信とを持つてゐた。そしてその事を考へ始めると前後の區別もなく自分の思ふだけのことをやつて見たくて仕様がなかつた。今度海岸へ移つた事が端なくその希望の一端に觸れると共に、彼はもう是が非でもその境地から動くまじと思つた。それと同時に浪の音ばかり聞いてゐるこの靜かな朝夕は、今まで餘り考へもしなかつた自分の身のなりゆき、これからを如何して暮して行かうか、といふやうなことを續いて考へさせ始めた。今まではたゞどうにかその日その日を過してさへ行けば他は何かに紛れて氣にもならなかつたが、その日／＼の事さへ覺束ない今の身になつてみると、眼前にはつきりとしてその不安が横はつて見えるのであつた。いつのまにか三十を越してゐる自分の年齢、何の不安も無げに従順に自分に従つてゐる妻、めき／＼大きくなつてゆく二人の子供、さうした背景がその不安の影をいよ／＼濃くして現はれるのも此頃の習慣である。

さくく、さくくといふ鎌の音がする。

彼の寝てゐる藪のあちら側はすぐなだらかな登り傾斜の畑となつてゐて、黄色く實つた麥を一人の男が刈つて居るのである。向うでは彼の寝てゐるのに少しも氣づかぬらしく、ただ専念に刈り入つて居る。藪ごしに見る外光はきら／＼と砂地の畑に照り輝いて、その男の顔や五體の輪廓がくつきりと浮き出てゐる。

彼はその男を驚かすのを厭つて、ずつと遠くへ刈つてゆくまで我慢して寝てゐたが、やがて起き上つた。もとのまゝになつてゐる釣竿を上げてみると、思ひがけずも一疋の大きな沙魚が鉤に懸つてゐた。微笑しながら彼はそれを魚籠に投げ入れたが、魚籠にはほんの十疋たらずしか入つてゐないのに氣がつくと直ぐそれを逆さにして全部水の中へ放してやつた。中には既に眞白な腹を上にして水の上に浮ぶのもゐた。

藪を潜つて麥畑の畔に沿ひながら二三丁も川下の方へ下ると、眞白に立つ濱邊の浪が見えた。彼は日中の道路を行くのを嫌つてその濱邊へ出ようと道を横切つて松原の小徑へ歩み入つたが、すぐその松原の中の二軒の小料理屋の前を通りかゝつた。すると、その一軒の店さきから一人の女が飛び出していきなり彼の提げてゐた魚籠を引き取つて中を覗きながら頓狂な聲で笑ひ出した。それを聞いて奥からもまた一人同じやうのが出て來た。いづれも二三度顔馴染のあるその店の酌婦である。

喫驚してその光景を眺めてゐた彼は、不圖何か思ひついた。

『オイ、晝飯があるか』

『あるわ、自宅にだつて！』

それでも魚籠と釣竿とをば忘れずに彼が宿に歸つた時には、もうものも言へない位に酔つてゐた。縁側から上ると直ぐ、砂だらけの脚を洗ひもせず其儘倒れて睡てしまつた。そして、眼の覺めた時はもう室内が薄暗くなつてゐた。悪酒のあとの頭がつく／＼痛んで居るのを我慢して起き上ると、彼は先づその足許に近く机や本箱などが亂雑に投げ散らされてあるのを見た。

彼は二間借りてゐた。八疊の一間を妻や子供の居室に宛て、奥の暗い六疊をば自分の書齋としてゐた。

自分にとつては大事な机や本箱が無斷でこの八疊に運ばれてゐるのを見て酔後の頭に發作的に不快を感じたが、ふらく／＼立ち上つて六疊との間の襖を開いてみた。すると、其處の眞中に棄てられたもの、やうに赤ん坊が寝せられてあつた。まだ何處かに石炭酸の臭ひが残つてゐた。

板の間になつてゐる臺所を通つて平常宿の人たちの居る茶の間へ行かうと重い木の戸を勢ひよく開けると其處には小さな屏風を立て、産婦が寝てゐた。彼は今まで、茶の間に寝てゐるものとのみ思つ

てゐたのである。

彼は黙つて爪先立て、直ぐ引返した。そしてもとの八疊を通つて縁側づたひに茶の間に入った。其處にはまだ灯もつけないで、婆さんが一人長火鉢の側につくねんと坐つてゐた。

『オ、いつ歸りました、お婆さん！』

實際意外でもあつたので、尙ほいつもより大きな聲で彼は呼びかけた。七十八歳だといふが、耳の遠いだけでまだなかくしつかりした、きかぬ氣の老婆である。

『エ、エ、先刻歸りましたよ、また留守中にとんでもねえお世話様で……』

『イエナニ、それでも案外に輕かつたやうですね、男ですか女ですか、赤さんは？』

『男でしたよ、丁度私が留守にしたもんだで旦那にも……』

『それで横濱は如何でした、何でも無かつたのでせう』

『それがネ、永いことこつちに隠してゐたもんですからネ、嫁が來ると直ぐ病みついて、もう今ぢア大變なことになつてゐて……ほんとに、魂消てしまひましたよ』

いかにも頼りなげな、殆んど聞き取り兼ねるやうな口吻である。彼も何とはなしに驚いた。

『一體何です、病氣は？』

『胃脚氣だつてますがネ、一昨年もそれで命を取られかけたことがあるもんですからネ、……』

脚氣には生れた土地に歸るのが一番だつて云ひますからネ、一刻も早くと思つて明日こちらに歸つて來ることになりましたよ、横須賀まで蒸汽で來て、横濱の親類が二三人付き添つてネ、あれから俾ぢアよくねえつて云ひますからネ、村の人から駕籠で迎ひに行つて貰つて……』

そんなことになつてゐるのかといよ／＼彼も驚いた。自分の言ふことだけ、ねち／＼と言つてゐる俯向いた婆さんを見てゐると、何とも慰めやうもない氣がしてそ／＼に自分の部屋に逃げ歸つた。

ランプををつけると、机と本箱、積みくづされた書籍や雑誌がいよ／＼眼に立つ。何しろ弱つた、今のうちは兎に角、子供たちでも歸つて來たらこの一間だけで如何しやうと、彼は四邊を見廻した。

そして、三四日のうちに實家を立つてこちらへ歸つて來ることになつてゐる彼等のことを思ひ起した。立つたまゝ、ぢいつとしてゐると、襖越しに赤ん坊の泣く聲が起つた。案外にも大きな、烈しい泣聲であつた。

妻の居ぬ間、飯だけ婆さんから焚いて貰つて副食物は自分で造へることになつてゐた。で、その翌朝彼はまだ顔も洗はず齒楊子を口にしたまゝ、裏の井戸端で馬鈴薯の皮を剥いてゐた。井戸を圍んだ深い椿の木立にはまだ朝日も流れてゐず、しつとりした曉の静けさが今日も快晴をほのめかしてゐた。

『ようござんすよ、私が剥いてあげますよ』

婆さんが土間から出て来た。一二日のうちにめつきり力が無くなつたやうに見受けられる。強ひて彼から庖丁を取つて蹲踞んで剥きかけた。彼も同じくその策を中にして蹲踞んでゐた。

『奥さんがお留守ぢア、なか／＼たいていぢアありませんネ、何時ごろ歸られます』

『三四日のうちだらうと思ひますがネ、子供が二人とも麻疹はしかに罹つたとかで、すつかりのび／＼になりました。そして、如何です赤さんの阿母さんは？』

『難有うございます、お蔭にネ、今々のとこ何ともありませんが、何しろ、また病人も歸つて來ますし……』

手もとの馬鈴薯の皮が長く地に垂れて、俯向いたきりの婆さんは何やらまだ言ひ足し度い様子であつた。彼はただ黙つてその後を待つた。

『それでネ、斯んなこたア氣の毒で言ひ出せねんですけれど、産婦は寢てるし、その上また病人が歸つて來ると……、病人の居る宅うちつてものはねえ、何だかイヤなもんで、それに見舞人だとかお醫者だとか、出たり入つたりも多おほなりですから、どうか旦那に座敷を明けて貰ひてえつてネ、昨日からも皆で話したんで御座いますよ』

彼ははつと思つて齒を磨く手を止めた。婆さんは、尙ほ俯向いたきりで先を續けた。

『旦那もネ、急ぢアお困りなさろと思ひますけれどもネ、何しろ今日病人も歸つて來るもんですから

……、またあとはあと、して入用なものだけでも持つて、何處か他を探して貰ひてえんで御座いますよ……、昨夜ネ、申し上げようと思つたんですけれどもネ、旦那があんなに酔つて歸つて來なかつたもんだから……』

婆さんは初めて軽い笑ひ聲になつて何だか狡ずるさうな瞳を上げた。

ひとの氣も知らないで、といふ反感からかとも彼は一寸考へた。昨夜あれから飯を食ふのもいやで茫然まんげんとしてゐる所へ二三週間前彼の近所へ東京から移り住んでゐる友人がぶらりとやつて來た。妙に淋しくひと可懐しくなつてゐた所だつたので、強ひて引き留めておいて酒などを取り寄せながら、二人して遅くまで飲み合つたのであつた。そしていつもの癖で心づかひはしながらもツイ高話もしたらうし、馬鹿笑ひも出たかも知れぬと思ひ起した。

何しろ彼に取つては非常な迷惑であつた。今日といつて今日引越せるもんぢアない、第一近所にそんな宿が無いと彼は先づそれを思つた。昨夜の友人が突然東京から一家族して彼の許へやつて來て、僕もこれから君の様にこちらに移つて夙ふうからの希望の小説を専心に書いて見たいと思ふから何卒ひとつ適當な宿を探してくれと言ひ込まれた時、三四日もかゝつて探したのだが、適當な空間も空家も無かつた。ど、のつまり詮方盡きて街路沿ひの煎餅屋の古汚い座敷を無理に借り受けて移り住んだことを目の前に見てゐるのである。終日砂埃を吹き込まれてこの暑いのに障子すら自由に開けること

出来ないやうなその陰氣な部屋の光景が彼の頭を掠めた。

急に彼はいら／＼して来て楊子を手に移しながら立ち上つた。

『それアお婆さん亂暴だ、そんな馬鹿な話があるもんぢアない、困るから今日出て行けつて、それアお婆さんも困るだらうが僕の方ぢア猶ほ困りますよ、第一昨日無斷で六疊の方の書物をあゝ亂暴に投り出されたのすら僕は、氣持はしなかつた、幾ら場合が場合だつて一應何とか斷つてからにしたらいゝぢアないか』

性來直ぐかつとなる彼の癖は此頃ことにひどくなつてゐた。そしてわれ知らず聲高になつたことに氣がつくと、彼は自分の身にまだ昨日の酒氣の残つてゐるのにも氣がついた。そして、急いで調子を落した。

『然し、今の場合そんなことを言つてた所で仕方ありませんから、如何でせう、いま二三日あの八疊だけあのまゝにして置いて頂けないでせうか、その間に何處か探します、實際僕も弱りますよ、僕獨りならまだ方法のつけやうもありますが、二三日うちには子供たちもやつて来るものですから……』
婆さんも立ち上つてゐた。小作りの、にや／＼しながら黙つて俯向いてゐる姿を見ると、平常は極く善良な老人ながら一度何かに怒つて拗ねたとなると、一切あとさきの見えなくなるこの人の性質を知つてゐるので、そのにや／＼した顔を見ると、思はず彼もにやりとして語を切つた。

婆さんの孫が二人、近所で評判の意地悪なお喋舌な漁師の唄が一人、ツイ其處の土間の入口に立つて眼を張つて此事を見てゐた。

綺麗に剥かれた馬鈴薯は笊の中に眞白に満たされてあつたが、それを煮る氣もしなかつた。彼はそこそと朝飯を掻き込んでまだ奥齒に物を噛みながら戶外へ飛び出した。そして、取り敢へず富士屋へ寄つた。富士屋は彼がその村に移つて以來、唯だ一軒だけ往來してゐる家で、その店から彼は米も味噌も酒も其他の雜貨などまで取つてゐるのである。

『どうも困りました、何しろ突然だし、それに此間の友人の時で他においそれと移る所の無いのをよく知つてますからね、全く途方に暮れました、無理なお願ひだが、またひとつこちらの周旋で何處か無理にも見附けて頂くことは出来ないでせうか』

其處の主婦は東京から來た女で、物言ひも様子もすつかり土地の者とは異つてゐた。主人は郡會議員などしてゐて、村唯一の利者きげものである。多くは店にゐるなかつた。

『困りましたネ、恰度また奥様もお留守の時で……、それはまア、ほんとにお困りでせう』
考へる様な様子をして、

『左様ですねエ、ほんとに此處等の人たちは悪い癖で廣い座敷が空いて、も他に貸したりなんかすること嫌ひますからねエ、……、左様ですねエ、彼處は如何でしたアノ岡の松中の家は？』

「エ、此間の時、友人と一緒に見て来ました。どうもまるで妖怪屋敷おほじやしきですよ、廣いには廣いが、眞つ暗でしてネ、壁なんてばらばらに破れて、月の晩なんかい、でせうが、雨降りには、傘でもさして寝なくちアなりますまいよ」

「ハツハ、それでねエ、何ぼ何でも……………、アノ、役場の裏の婆さん一人の家は？」

「あれも見ました、静かでない、場所ですけれど畳が半分きり敷いてないんです、イエ、上げてあるのでなくて頭から無いんです」

主婦の心當りの家といふのは全て此間、友人の時に彼等の見て廻つた所ばかりであつた。其處へ主人の末の弟で、店の手代やら御用聞きやらの様なことをしてゐる若い男がのつそり歸つて来た。

「ア、い、所だつた……………、ねエ、新ちゃん、また一つお前さんのお骨折を願はなくちアならない事が起つたんだよ、吉田さんが今日岡の家から追つ拂はれなすつたんだとサ」

「へ、エ、どうもそんな事になりアせんかと思つてましたよ、へエ、さうですか、それアお困りでせう」

「困るも困らないも、三界家無しだ、どうしてもまた君を間違つかせなきアならないことになつて来た、何卒よろしく」

彼は若者の肩を軽く打つた。

「困りましたねエ、何しろ此間の谷口さんの時でさへあんな風でしたからねエ」

印裨纏の裾を捲くるやうにして店さきへ腰を下して柱へ背を凭したが、帽子を掴んだま、彼のまだ立つてゐるのを見ると、

「まアお掛けなさい」

と火鉢をつきやつておいて、

「さうですかねエ、それぢやア何ですか、岡の家の圓三さんも駕籠で歸つて来るやうになつたんですか、……………危あぶないもんだ、一昨年だつたかも、もう少しだつたんですからねエ、若しものことがあるとすると、第一、あの家は如何なるだらう」

「ネ、新ちゃん、圓三さんは自宅うちの保険を續けてるかい」

富士屋では何とか生命保險會社の取次をもやつてゐた。

「い、エ、昨年の五月に懸つたきりで、あとはもう切れてますよ」と言つて突然驚いたやうに、

「オ、さうだ、自宅うちの保険を途中で止した人はどうしたものか、そのあとで皆死んでる、エ、ト、……………」

三四人の例を數へ立てた。嫂も、心から驚いたらしく聲さへ細めて半ば立膝の身體を火鉢の側に寄せた。

續いて産婦の話が出た。婆さんの話も出た。彼もせうこと無しに火鉢の近くに腰を下した。

「ねエ嫂さん、彼處はどうだらう、お米婆さんの家は？」

「だつて狭いぢアないか、それこそ二間借りられたら婆さんのゐる所は無くなつてしまふ」

「なアに、婆さんをば追おん出しちまうのさ、そして五十錢も餘計にやると婆さんはまたそれで何處にでも首を突つ込む所を見つけるだらう」

「左様さネ、婆さんが聞くか如何だか、まア當つて見な、物は試しだ」

「何處なの、それは？」

彼は漸く口を入れた。

「ソラ、野比の橋の方に行く途中の左側に石地藏があるでせう、あの直ぐ横手に曲る小さな路があつてその角に小さな家があるぢアありませんか、あれでサ」

「ア、ある〜、月見草が澤山咲いてる所でせう、成程、彼處なら佳いなア、海も見えるし！」

彼の心には月見草の中の石地藏ばかりではなくその家の戸口に錢葵の花が眞赤に咲いてる光景も浮んで來た。

「どうです、ひとつ直ぐ懸かけ合つてみて呉れませんか、屋賃なんか少し張り込んでもよう御ざんす、此際だから」

「さうですネ、行つて見ませう、婆さんが聞いて呉れりアい、が」

「成るだけ聞くやうにして下さい、駄目だつたらまた他を探さなくちアならない、忙しい所を濟まな

いが直ぐひとつ當つてみて下さい」
彼は先づ立ち上つた。そして若者がぶら〜とそちらへ出懸けて行くのと店さきで別れて煎餅屋に居る友人の方へ急いだ。

それは困つたな、随分亂暴な婆さんだな、と言ふきり他に友人にも策の出やうは無かつた。細君は細君で、ではいゝ宿の見附かるまで私共の方に來て被居おつしやい、それがいゝわ、と言つて勸めて呉れるけれど、常から病身の彼女や同じく餘り壯健でない二人の子供、何も書けないと言つて苦しんでゐる友人、それにこの狭い部屋、その中へ無理に入り込む氣には如何してもなれなかつた。そして二三日中に歸つて來るといふ妻子の事が彼の頭から去らなかつた。どうしても今日中に何處でもいゝから移らなくてはならぬと思ひ詰められた。

其處へ富士屋の新ちやんが例の通りのつそりと入つて來た。はち切れさうな大きな半づぼんの膝をきちんと合せて坐つた。二十八歳だといふけれど、四五にしか見えぬ。

「如何？」

『どうでした、またお世話様ですネ』
彼も友人も言葉を揃へて訊ねた。

『まア、まア』

大きな緒ら顔を他愛なくにこ／＼させながら、

『まア、そんなに急いたつて駄目ですよ、兎に角話は有望です』

『エ、出来ましたか』

『まだ確りとは定りませんがネ、まア定つたも同じですよ、婆さんは却つて大喜びで……、婆さんなかく／＼これが好きなんですからネ』

盃を口に運ぶ眞似をして笑ひながら、唯だ自分一個の意見にもなり兼ねるので、先づ相談をするため、いまその弟の方へ出て行つた。多分弟も承知するだらうと、告げて、

『それに私の方から口を利いたとなると、少し位るは我慢をしても承知せねばならぬ事情もあるので』と言ひ足した。

『難有い、奥さん！』

彼は早や既に聲を逸ませた。

『前祝ひに一杯奢つて呉れませんか、今朝からのくさ／＼で頭が少し變になつた、何しろ突然でした

からねエ』

『エ、／＼、奢りますとも……、でもほんとに結構でしたネ、直ぐ見つかつて』

細君は子供を抱いて立ち上りながら、

『ソラ、彼處でせう、門口に錢葵やら松葉菊やら澤山咲いてゐる、……まア吉田さんは狻のネ、あんない、所を占領しちゃつて』

『なアに、餘り好くもありませんよ、それに私も考へましたが、机を置くに恰好な所が無いやうです』

『新ちやんは此間の部屋探しの時に彼と彼の友人との間に先づ問題になるのは机の置場所であつたことを記憶してゐた。』

『なアに机なんか何處だつてい、サ、雨露が凌げたらそれで澤山だ、贅澤は言はないや、ねエ谷口君』
『左様とも、此際だからネ、ハ、』

此際だから、とは此頃中彼等の間に流行つてゐる言葉であつた。三人は聲を合せて笑つた。笑ひながら彼はいつの間にか自分の眼の潤んでゐるのに氣がついた。そして人知れず手早くそれを拭き取つた。

『さア召し上れ、その代り何もお肴はありませんよ』

『結構です、頂戴します』

彼は真先きに大きな盃を取つた。酒は彼の希望で冷たいま、のものであつた。

道路一つを距てた浪の音が障子の向うで断えず碎けてゐる。

『ねエ谷口君、僕は今度つくづくさう思つた、どんなのでもい、から自分の籠^{かご}るだけの巢^ねは是非造つて置き度いもんだねエ』

『うん、夙^{もと}うから僕は思つてゐるのだが……』

友人は瘦^{くちもと}せた唇^{くちもと}元^{もと}を引き締めて微笑しながら、

『それではないと、どうも僕はおちついて筆が執れない氣がするよ、眞^{まこと}實^{じつ}今のところ僕等の生活は今日明日を知らない様な危険なものだからねエ、せめて自分の居る部屋だけなり固定してゐると少しは安心して仕事が出来るのだが……、それでも可笑しいね、君までそんな事を考へ始めたのか』
彼も苦笑せざるを得なかつた。

『……、此村に移つて來てからをり、獨りで考へてゐたがね、今日といふ今日、心底からさう思つた、……、いつまで「漂泊を愛し」てもゐられまいし、それに斯ういつも心がおちつかなくちやア、まじくしてゐるうちに自分の一生も極めて怪しいものになりさうだ、此儘ぢア何ほ何でも餘りみぢめだからねエ』

『二百圓お出しなさい、私が明日にも建て、上げます』

新ちやんはもう眞赤になつた顔に兩眼を細くしてゐた。

『二百圓で建ちますかね』

友は眞面目であつた。

『建ちますとも、二百圓は入りませんよ、玄關が二疊、四疊半、六疊、……』

新ちやんから夙つくにきいてゐた二百圓足らずで出來た一二の例證が新しくまた彼の心に思ひ起されてゐた。そして子供を連れて散歩する時など、海岸の松林や高臺あたりにそれとなくさうした眼を向けてゐたことも思ひ浮べられた。二百圓、二百圓、と心の中で繰返してゐると、何とも云へぬ心細さが萌^もして來た。

一足先きに歸つた若者のあとから彼が再び富士屋に赴いたのはもう正午近かつた。貸す貸さぬの婆さんの返事が其處に齎^あらされてゐる筈である。

居ると思つた若者はるずに、彼の聲を聞いて主婦が溢々奥から出て來た。

『どうもネ、話が面白くないんですよ、婆さんはネ、貸し度さが一杯なんです、そりア何處にだつて行つてゐられる暢氣な一人者ですからネ、お貸しすれば好きな酒もそれだけ餘計に飲めるといふわけ

で……、ですけど弟つての、方ぢアまたそれを心配してゐるでサ、以前も酒ぢア随分失策の多かつた婆さんでしてネ、今度またそんな事があつちア世間に對しても僅かな金にア代へられないつて腹があるでサ、それに夏になると東京から親類の子供とかが弟の方に来る事になつてゐるさうで、それを婆さんの方に廻したい氣もあるのだとさう言つて、婆さんは大分不平な様子でしたつけ』

早呑込の新ちやんの言葉を信じ切つてゐた彼はもうそれに返事をする勇氣もなかつた。主婦も手持無沙汰に煙草を吸つてゐたが、

『どうせ末は弟の厄介にならなキアならないと解つてゐるもんだから婆さんも此頃ぢア弟に頭が上らないんですよ、昔ならなか／＼如何して！』

彼は矢張り立つたまゝ、黙つてゐた。落膽すると同時に、また何とか他に法を講ぜねばならなかつた。

『如何ですか、一時おいやでもその妖怪屋敷で我慢すつちア、またそのうちには新二も何とか心配するでせうから……』

『エ、僕も今それを考へてゐた所なんです』

投げるやうに言ひ捨て、彼は其處にどしんと腰を下した。

『とう／＼妖怪の仲間入りかなア！』

『ハ、ハ、ハ、仕方ありませんよ、また其中にア何とかなるでせうから一時さつぱりとお諦めなさい、ほんとに此處いらは仕様の無い所なんですからねエ』

その妖怪屋敷に行くには又一つ不愉快な思ひが先き立つた。此前友人が其處を借りようとした時、仲に立つたのが、彼の宿の隣の者で、近所で有名な意地悪の鼻であつた。そして話が壊れてから彼は後の崇りの恐しさに友人の細君をして若干の金を包ませた。其時その鼻は、東京あたりは如何だか知らないが、此土地ぢア顔のつぶされ賃は受取らない事になつてゐますよといふ意味のことを悪たれながら仰々しくその金包みを突き返したのであつた。今度また其家に話を持ち込むとなると、順序から云つても、あとの便利を思ふ點から見ても如何しても再びこの鼻の手を経ねばならぬと彼は思つた。彼女とその妖怪屋敷の主婦とは極めて親しい間柄であることを彼は知つてゐたのである。

思ひ切りわるく腰を上げかねてゐると、折よく富士屋の前をその鼻が通り懸つた。機會を逸すまいと彼は直ぐ立ち上つた。そしてわざと事もなげに、今一度その家へ一緒に行つて呉れと頼んだ。無論、今度こそは斷じて小母さんの顔をつぶさないと附け加へた。

得意氣に笑つた彼女は、彼の顔や足元をじろ／＼見てゐたが、突然

『偉エ役者になると、はア、忙しいこつぢア！』

と富士屋の主婦を振り返りながら大きな聲で笑つた。主婦も解はわからぬながらそれに調子を合せ

た。

彼等に妖怪屋敷と呼ばれてゐる家は街道から引き込んだ小高い所で、周圍に松の老木を圍らした、大きな一廓であつた。もと附近第一の豪家で、奉行や代官の定宿であつたといふほどあつて、廣い庭の前には半ば壊れた長屋門があり、土地に見られぬ大きな玄關も附いてゐた。漁師の鼻のあとからその門を潜つた彼はその廣々した庭を眺めながら先づ子供の遊び場のことを思つた。

森閑とした庭の隅の方で主婦は一人で麥を扱いでゐた。彼等の這入つて來るのを見て異様に顔を輝してゐたが、漁師の鼻が如何にも愁傷げに間借りの事を話し出すと、その言葉の終るのを待たずに半ばでそれを引き取つた。

『折角ですけれどネ、もう自宅などお客様にお貸し申すなんてことア思ひも寄らないんですよ、この通り壊れ方題にしてあるもんですからネ、疊も床もぼろ／＼でとても足踏みも出來アしませんよ、折角ですけれどネ、何處か他をお探しなすつて下さいましな』

小柄な、見るからに神経質らしい五十歳あまりの婆さんのこの突慳貪な言葉を聞いて彼は強かに驚いたが、直ぐこれは先回の破約を憤つてゐるのだナ、と思ひ當つて苦笑した。

『此間のお客の時はネ、どういふ理由だつたか、お前さんにもえれえ濟まねえことになりましたつたが、この旦那はネ、どうでも此方さんに御厄介になり度えつて……』

『い、えネ、折角だけけれどネ、何處か他をお探しなすつて下さいましな』

流石雄辯の女房も唯だ茫然とその麥扱きの手許を眺めてゐるよりほか無かつた。

彼も苦笑ばかりして居られなかつた。そして此の前の時富士屋の新ちやんから聞いた、今では僅かな村税すら納め兼ねて居ること、獨り息子が怠惰者で二人の子供をお袋になすりつけておいて横濱だとか東京だとかに稼ぎに行つてゐるといふのは名ばかりで殆んど音信すら無いこと、その女房は女房で實家に逃げ歸つて居ることなど次第に思ひ出されて來た。半ば白くなつた髪に頬かむりをして、何處か華奢に見ゆる身體に麥の毬の黄いろく降り懸つてゐるのを見詰めてゐると、彼は永い間忘るゝともなく忘れてゐた遠い故郷の母の事まで心に浮んで來た。そして、風の渡つてゐる四邊の老松も、青い草の伸びてゐる古寺の様な屋根も、無花果の茂つてゐる井戸端も、物音ひとつせぬ座敷の奥も、皆すべて自分にとつて親しいもののやうに眺められて來た。

如何かしてこの老婆の心を宥めてこの家に住むやうにしたいものだとか次第に落ち着いて來た彼の心にはもう部屋の暗いことも壁の破れてゐることも大した問題ではなくなつた。そして今度は自分自身口を入れて此前の時の不始末を詫びたり、今度の自分の事情を述べたりして、折入つて頼み込んだ。老婆も漸く麥扱きの手を止めて頼冠まで取つたが、それでも言ひ出したことをば思ひ返さなかつた。

そして、其處の木の蔭に蹲踞みながら、

『それに私もネ、此頃ではから、意氣地がなくなつて、別に何處が如何といふではありませんがネ、寝たり起きたりで、座敷のめぐりでも掃除ひとつするではありませんし、間があつたら何處へでもごろり／＼してゐるもんですから座敷の襖を締め切つておいたり、他さまに氣兼ねをしたりすることはもう到底出来なくなりましたよ、此間の時もネ、貴下の方からあ、して斷られてまアよかつたと思つたりした位でしたよ』

半ばは愚痴のやうに初めとはずつと變つた口調で斯う付け加へた。

彼もその調子に乗じて更に一二度押し返して頼んでみたが、どうでも諦めねばならなかつた。

兩人はまた長屋門を潜つて通りへ出た。女房もあれほどまでとは思つてゐなかつたらしく、呆れたやうに悄氣てゐた。そして、黙つて先に立つてゆく彼の後から、

『あの人もネ、あ、いふ變人で無えとい、人だけれど………、ねエ旦那、忠兵衛んとこの婆さまは今の主婦さんの姉さまだ、婆さまからも一度話さしてみたら如何だネ』

彼は厚く女房に禮を言ひながら途中で別れて忠兵衛の家に行つた。

其處も廣庭一杯に麥を散らして多勢して賑かに扱いでゐた。彼の頼みを聞くと世話好きの婆さんは歡んで出かけて行つたが、二十分も経つとぷり／＼怒りながら歸つて來た。

『あ、いふ馬鹿も無えもんだ、だからもうこそ口を利くめエ／＼と思ふけんど………、如何だろ、ひ

とが親切に言ふてやれば泣きわめエて、零落したをい、事にして皆で寄つてたかつて馬鹿にするつてこきやがる………』

忠兵衛の家から富士屋へ行くには彼の舊の宿の庭を通るのが近道であつた。けれど彼はどうしてもいま其處を通り度くなかつたので、廻り道をして街道へ出た。永く照り續いてゐるので砂地の道は不氣味なほどぼく／＼と乾いてゐた。兩側に穗を垂れてゐた麥も大方刈られて、それらの畑も眩しく乾き輝いてゐる。

軽い眩暈の氣味で、ふら／＼その街道へ出ると彼は靜かな一群の行列に出會つた。それは横須賀から病人を昇いで來た附近の漁師や百姓であつた。彼ははつとして、唯だ默禮してやり過ぎたのであつたが、狭苦しい駕籠の中に眼を瞑つてゐる病人をそれとなく注目すると話に聞いているた通りの大きな男で、氣味悪く蒼彫れに膨れて生きた様にもなくぐつたりと背を曲げて凭れてゐた。

それから一二時間を経て彼は富士屋の新ちゃんと共に其處から二十町も離れた、同じ街道沿ひの小さな空家の前に立つてゐた。街道の片側は狭い西瓜畑で、畑の畔には曲り廻つた小松がばら／＼に立つて、それからは廣い砂濱となつてゐた。松原の中には煮干小屋らしいものとその煙突から出る烟が

見え、濱には一杯に鯛の煮干が乾してあつた。蒸す様な腥さが、生温かな濱の風につれて彼等を襲うて來た。

もと鹽煎餅などを賣つてゐたとかで、店の様になつた所が道路に向いて三疊、その奥が六疊、それと鍵なりになつた部屋が四疊半で、三疊は明るいが、その奥には窓一つ無い。四疊半の方には後から切り開いた様な、變挺な小窓がついてゐるが、その向うは直ぐ崖になつて、木や草が茂つてゐて薄暗い。

『先づ此處に机を据ゑるのですネ』

『左様だネ』

と答へながら、彼は眼前に近づいてゐる梅雨の頃を頭に描いてゐた。

『此處が勝手か、生意氣に廣いや』

積り積つた塵埃に下駄のさきを爪立てながら新ちやんは先に立つて一渡り家の内を見終つて、また道路に出たが、疲れた様に苦笑しながら彼を顧みた。

『如何します、此處にしておきますか』

既にさう諦めてゐたので彼はたゞ黙つて點頭いた。

その家を預つてゐるといふ、むつつりした爺さんの家はそこから六七十間離れてゐた。其處で新ち

やんは家を借りたことを言ひ込んで、そして明日正午頃移つて來ること、それまでに掃除をして貰ふこと等を取りきめた。

『サテ、月お幾らで貸してお呉んなさるでせう』

新ちやんは訊ねた。

『お前さんの口入れぢア、お前さんの胸一つで幾らにでもきめておいてお呉んなせえ』

眞黒な顔に三角の目のみ光つてゐる爺さんはさう繰返して答へるのみで終に幾らとも言はなかつた。爺さんとも別れて一二丁歩き出してから急に彼は立ち留つた。

『ア、新ちやん、井戸は何處だつたらう』

新ちやんはたうとう見つかつたといふ風に苦笑しながら、

『それがどうも少し不便なんですよ、今の爺さんの家のを一緒に使ふんです』

『すると、アノ道路傍の？』

彼はツイ道路に沿うて青木一本、屋根すら無い野晒しの井戸を思ひ出して思はず眉を動かした。

けれど、もうその時の彼には苦情を言ひ出す元氣も失くなつてゐたので、たゞさう言つてみたばかりで、次第に暗くなつてゆく心に氣つきながらそのまゝ歩み續けた。

今朝出たまゝでそれから一度も顔出しをせぬ舊の宿に、明日の朝引越す旨を傳へて貰ふ事を頼んで

おいて、煎餅屋の友人の前で彼は新ちやんと別れた。
もう彼は夕暮に近かった。

今朝彼等が酒を飲んで居るうちから何だか急に気分が悪くなつたと云つて床についてゐた細君の枕許に友人は子供を抱いて坐つてゐた。

いつもの元氣もなくしよんぼりと這入つて行く彼を見ると、

『如何だ、見つかつたか』

と低い聲で訊ねて、

『さうか、とに角、それアよかつた。斯んな風で一緒に探しにも行かずに濟まなかつた』
矢張り低聲で詫びを言ひながら、寢てゐる人に眼を落した。

『どうも濟みません！』

睡つてゐると思つた細君が、夜着から少し顔を出した。

『う、ん、……………どうです、少しは快くなりましたか』

『え、もう起きようと思つてた所でした』

『まア、そのまゝにしてらつしやい、そして、今夜御厄介になりますよ』

『え、くよう御座んすとも……………、でもまア好う御座んしたねエ、そんな家でもあつて。幾間ですつて……………、そして井戸は』

次第に聲もはつきりして來た。

『さア、それがねエ、困るんですよ……………』

と詳しく話して、

『仕方がないから水だけは私が汲んでやりませう、人通りの少い時を選んでネ、……………とても女仕事ぢア出來さうにありません』

『それア吉田さん駄目だ』

細君は半身を起した。

『貴郎がお汲みになるにしても、赤ちやんのお襦袢をどうなさいます。それアね、炊事用の水なんて幾らも入りませんけれど、お襦袢となるとそれこそ大變ですよ！』

彼も思はず友人と顔を見合せた。

それからよく考へて見れば、洗つたものを乾す場所もなかつた様な事を思ひ附いた。

彼はたゞ苦笑ひをして二人の顔を眺むるよりほか、答ふる力も無かつた。

『如何にかなるだらう、……………如何にかなるもんだよ』

友人も笑ひながら慰めるやうに言つて立ち上つた。そして、

『まア、此方に來給へ、茶を入れよう』

と火鉢の方に座布団を直した。

『それもさうネ、いよくさうなつてしまへば、またいろく方法のあるものだから……』

細君も起きて來た。

が、取り返しのつかぬ失策を仕出かした様な氣持は疲れ切つた彼を次第に不安に導いた。

取り敢へず彼は自身出懸けて酒を提げて來た。そして成るだけ病氣の人を動かすまいとして、直ぐまた近所のよろづ屋に行つた。海苔やとろ、昆布など買つてゐると、夙うから馴染の其店の婆さんは、彼の借りてゐる家に病人の歸つて來たことを既に知つてゐて、嘸ぞ迷惑だらうと彼に言つた。

『實はネ、今朝彼處を追ひ出されて、いま宿無しで困つてゐる所なんです』

と彼は笑ひながら愚痴を言つた。

『それはお困りですネ、そして、只今はどちらに?』

簡單ながら今朝來の始末を話してゐる彼の聲は自然老婆の同情を喚んだ。

『ねえ』

彼女は店に坐りながら奥の間に聲をかけた。

『前の家は如何だらう、蜜柑屋の座敷は?』

『借すだらうよ』

先刻からの話を聞いてゐると見えて、直ぐさう答へながら婆さんの息子が出て來て立ちながら彼に挨拶した。四十歳前後の背の高い男である。

『所がネ、二間欲しいんですよ、僕の商賣が讀み書きをする商賣なんだから女房や子供なんかと別になつて、靜かな部屋が一つ是非欲しいんです。もつとも僕の居る方は三疊でも四疊でもいい、んですが
ネ』

『恰度い、や、物置の二階が空いてるだらう』

主人は事もなげに母に向つて言つた。

彼の胸はときめいた。

『空いてるにア空いてるだらうが、暑からうよ、是から』

『え、もう暑い位は我慢します、如何でせう、貸して呉れませうか』

『貸しませうよ、此間まで物置の方に齒醫者が入つてましたがネ、……奥の座敷には永いこと誰も入らなかつた様ですから汚れてませう』

『僕自身直接に行つてみてい、でせうか』

『よう御座んせうとも』

彼は買物をば其處に置いて、小走りにその店から眞向うに入り込んだ蜜柑屋といふのに入つて行つた。道路から折れ込んだ徑は双方から蜜柑の木に掩はれて、もう薄暗くなつてゐた。

眞直ぐに立ち寄つて門口から覗き込むと土間の奥の竈らしい所に火は燃えてゐるが、其處には誰も居なかつた。見廻すと庭の隅にある木蔭の井戸端に二人の女が立つて此方を見てゐた。

『濟みませんネ、御病氣のところへ斯う朝も晩も徳利を持込んで』

彼は漸く幾らか静まつた氣分で徐ろに杯を取り上げながら、寢衣ねまきのまゝで唯だ一人粥を喰べてゐる友人の細君を顧みた。

釣洋燈が二つの部屋の間に點つて、向うの間には二人の子供が、小さい頭を並べて寝てゐる。

『い、え、飛んでもない、病氣つても私のは別なんですから……、それにもう何ともないんですよ』眞實、晝間から比べるとさうらしい明るい顔になつてゐた。

友人もほつかりした様な様子でちびく飲んで居る。

『ほんとに大變でしたわねエ、お獨りで……谷口もそれを非常に氣にしましたけれど、運悪

く今日に限つて私がひどかつたもんですから』

『で、如何なんだつて、大概出来さうなのかい、その蜜柑屋つてのは』

『出来るだらうと思ふんだがネ、兎に角今日は主人が留守なんだ、歸つて來たら相談をして富士屋まで返事するつて事になつてゐるんだ、都合のい、事に其家の主婦が僕を知つてたんだよ』

『君を?』

『うん、行つて話をしかけると、向うからそれでは貴郎が吉田先生で被居つしやいますかつて譯なんだよ、聞いてるうちに思ひ出したがその娘つてのが何でも東京あたりで看護婦か何かしてたらしいんだ、そしてそれが横濱の、何だか大變お金のとれるマッサージのお内儀さんになつてゐるんだ相だ、そしてつまりそれが和歌愛好者の一人だつてわけなんだらう……、昨年の丁度今頃だつたらう、一日何處かへ遊びに行つて歸つてみると横文字入りの女の名刺が置いてあるんだ、先生の様な方が自分の郷里において下さつたのは非常な名譽だといふ様な事が書きそへてネ、それがその娘なんだよ、實家とに歸つたついでに訪ねて來たんだらう』

『へえ、面白い事があるんですネ、それなら吉田さんもう大丈夫だ、屹度出来る、御安心なさいましな』

『餘り貧弱な吉田先生だつたんで、ハイカラのお袋さん、大いに悲哀を感じたでせうがネ、兎に角其

處が出来ると大分仕合せの様です、井戸も庭に在りますし、物置の二階に立て籠るなんかも風流ぢアありませんか』

よく鬱ふさぎよくはしやぐ友人の細君は、その夜非常に元氣がよかつた。昨年あたり、一時危ない位肺が病わづるかつたのであつたが、次第に快くなつて今では殆んどラッセルも無くなつたと言つて居る。けれど、今度突然職業を止して此方へ移つて來たのは、友人自身言つてる様に靜かに筆が執り度くなつたからといふ外に、矢張り細君や子供の健康の事が氣遣はれたからに相違なかつた。土地が極端にその患者を嫌つてる事を彼の注意で知つてゐるので、宿にも誰にもそれらしい素振を見せまいと力めてはるたが、急の移轉ひっこしや何かで疲労の結果か、土地の變つた、めか、どうもこの數日容態がよくなかつた。そして、土地の醫者に診せるのを嫌つて、前から服ふくみ續けの持藥風もちやくふうのものをひそかにのんでゐた。そして、衰へた顔には絶えず濃く白粉を塗つてゐた。

『だつて、何ていやなところでせうねエ、此の村は。私はまた吉田さんたちが永い事動かずに被居つしやるから餘つ程い、所だと思つて……………、谷口は谷口で、遮さ二無に此處で無くてはならぬ様に言ひ張るんですもの……………、それにどうでせう、ろくな部屋も無いし、いやにじろ／＼他ひとの顔をば見るし、此處の宿の婆さんなんかの因業いんごうと來たら……………』

細い煙管を取り出しながら、

『斯んなことなら矢つ張り大島へ行けばよかつた!』

と心から後悔してゐる風に、ぢいつと眼を落してゐる。

伊豆の大島は彼等夫婦にとつて切つても切れぬ縁故の所であつた。初め彼等の識り合つたのも其處なれば結婚して直ぐ手を携へて渡つた島も其處であつた。

『そんなにいゝんですか、大島は』

『えゝゝ、それアもう此處なんかと比較にはなりませんわ、それに……………』

と淋しく笑つて、

『吉田さんにいゝ事には非常にお酒が安いんです』

『それア何よりだ、行きませうか一緒に』

『行きませうよ、本當に。わたし、斯んな所に居る位なら一人だつていゝから東京に歸るわ、ほんとうに歸るわ、身體なんか如何なつたつて構やしない』

彼女の癖で、直ぐ本氣になつて激昂して來る有様が彼にも能く解るので、先刻からたゞ黙つて杯を取つてゐる友人の顔をちらと見てわざと話を外らした。

『それとも君は二百圓の組か、恐しく考へ込んでる様だが』

實際何か考へてゐたらしい友人は、斯う言はれて急ににやりとしたが、

『まアその方だネ、彼方だ此方だと動き廻つてるのは眞實もう耐へられない』

『ぢア、速くさうすればいい、ぢアありませんか、わたしだつて何も動き度くは無いですよ』
捨てるやうに言つて、

『どうしても動かなくちアならないのなら斯んな所より大島の方がいい、つてあれほどわたしが言つたんだけれど……』

『馬鹿、前後の事も考へないでさうふら／＼出て行かれるか！』

この人にしては珍しく強い調子で叱つて置いて、彼の方に向ひながら、

『何しろ、大島は不便だからネ、いざといふ時に困るんだ』

『左様だらうネ、何か定つた収入でもある様にしてからでないかと心細いことが多いだらう』

先刻から胸の納らなかつた細君は二人に關はず言ひ續けた。

『何處に居るにしたつてその日／＼のこと位るには困らないやうにやつて行けさうなものだ、それが男の役目ぢアありませんか！』

二人はそれ／＼苦笑したきり、何とも言はなかつた。友人夫婦が移る早々から金のことと苦しんでゐるのをば彼も知つてゐた。細君の不平も一つは其處から出てゐた。

暫くてん／＼に黙り込んだが、それでも酒の残り少なくなつた頃にはまた大島の話で座は賑かになつ

てゐた。酒の安いことが再び持ち出されて、牛乳の安いこと、人情の醇朴なこと、景色のいいこと、または其處で出會つた種々の人のことなど夫婦は興に乗つてそれからそれへと交る／＼熱心に語り合つた。夫等は幾度か彼等によつて語り聞かされてゐた事だが、今朝來の彼の耳にはこの土地と比べて如何にも其處が靜寂な醇朴な、といふより好く碎けた住み心地のよい所らしく思はれて來た。

そして暫く黙つてゐた末、彼は眞面目になつて言ひ出した。

『ぢア、君、本氣になつて其處に移る計畫を立てようぢアないか、どう考へても僕はいま東京に歸る氣にならんし、それかと云つて斯んな味も素氣もない所に永く居る氣もせん、今まではそんなでもなかつたが今朝からのこととてつく／＼此處がいやになつた、それアどうせ大島だつて永く居るうちにはまたいやになるに相違ないが、その時はまたその時サ、兎に角出かけることにしようぢアないか、……、君等は直ぐその準備に懸れるだらう、僕は先づ此處の借金を片附けなくちアならぬが、なアに幾らも無いんだからその積りで稼げば直ぐ濟むよ、それからまたそれからの事だ！』

夫婦も彼のこの様子に目を見張つたが、やがて今度は何れも前より聲を細めてそれに關する具體的の相談が語り交はされた。

はては紙や鉛筆まで持ち出された。

彼は翌朝まだ薄暗いうちに眼を覺ました。

隣室に友人たちの眠つてゐるのを覺まさない様にこつそり部屋を出て、富士尾に出懸けた。顔を洗つてゐた新ちゃんは彼を見るなり、ぶつきらぼうに、

「蜜柑屋からは何とも云つて來ませんよ」と言つた。

元來新ちゃんには折角あゝして約束して來た所を棄て、彼自身無斷でまた他の新しい話を取りきめようとしてゐるのが甚だ氣に入らなかつた。彼もそれを知つてゐた。

返事が來てゐないとすればあまり結果は香ばしくないと見ねばならぬが、今一應こちらから出懸けて見ようと彼は覺悟をきめた。それには新ちゃんを同伴して行く方が都合がい、と思つて切りに頼みだけけれど、何の彼のと言つて如何しても腰を立てなかつた。

止むを得ず獨りしてまた蜜柑屋の庭へ入つて行つた時、夥しい惡臭が彼の鼻を襲うた。其家の主人親子だらうと思はれるのが、庭隅の大きな二つの溜桶しよこぶから下肥しもこを汲み出してゐる所であつた。昨夕井戸端で逢つた主婦と嫁らしい女とは、束ねた麥を解いて庭一杯に乾してゐた。

案の如く話は不調であつた。今までは困るといふ人に奥の座敷をもちよいく、貸してゐたけれど、子供は多くなるし、私たちとしよ老人夫婦は今年あたりから物置の方へ隠居しようと思つてゐる折なので、

折角だがお断りするといふ事であつた。

其朝の彼は妙に一種の勇氣を持つてゐた。従つて平常より餘程雄辯になつてゐたので、その断りを聞きながら、今まで程に氣も落さず、更に押し返して一層丁寧に頼み込んだ。

主婦は終に返事に困つて主人をも其處へ呼んで來て今一度相談を始めたのであつたが、その結果漸く次の様な條件づきで承諾を得たのであつた。兎に角一時い、宿の見附かるまでお貸しする、その間でも若し宿に止むを得ぬ様な場合が出來たら直ぐ空けて貰ふことといふ様な。

考へて見れば随分慘めな條件だが、彼はその場合それをも歡ばねばならなかつた。主婦が汲んで出した番茶を一口飲むなり、數多度び禮を述べてそゝくさと彼は其處を出た。そして昨日の夕方借りる事にしておいた空家の方へ急いだ。

朝も早いし、まだ掃除には着手してゐないと思ひく、行つて見ると、二三人の人が既にその家を集つてゐた。庭の草さへ抜かれてあつた。

彼は茫然としてその前に佇んだのであつたが、急には何ともよう言ひ出せなかつた。その様子を見い見い昨夕の爺さんは彼の前に立つた。

『もう直きにお出でなさるかね、荒方掃除は濟みやしたが』

彼は終に思ひ切つて破約を申し出た。そして何とかお詫びのしるしをしたいからと言ひながら、中

には幾らも残つてゐない財布を取り出した。

爺さんはそれを聞くと、そのまゝ、ぢいつと其處に蹲踞んで煙管を取り出した。その家族らしい三人の女はみなその手を止めて此方を凝視してゐた。

永い沈黙に耐へ兼ねて彼は繰返し詫を言ひながら幾らかの小さな銀貨を紙に包んで彼の前にさし出した。それに目も呉れないで尙ほ暫く煙の出る煙管を額のところ^にに當て、ゐた爺さんは、やがて徐ろに立ち上りながら頭を振つて、

『富士屋の口入れで起つた話ぢアから、何とか富士屋から話がありやせう、』

そして女たちに同じく眼顔で仕事をやめる事を知らして、のろりと道路の方へ出た。途方に暮れた彼もそれに續いたが、いづれ後に富士屋からも人をよこさせるからと言ひ置いて眞黒な背のひよる長い爺と別れ去る外はなかつた。

兎に角これで暫くでも自分のものとして眠るべき巢が出来たと思ふと急に疲れと安心とが感ぜられた。そして昨日の朝宿を断られて以來の自分の狼狽へ様を思ふと何とも云へぬ佻しい笑ひが彼の心の底から湧いて來るのであつた。東京なら斯んなにまで狼狽へもしなかつたらう、とも思はれた。今まで随分苦しい生活をば續けて來てゐるが、今度ほど頼りない、いかにもう居る所のないやうな氣の

したことは記憶に無かつた。ひとつは年齢のせる、境遇のせるもあるだらうなどと考へながら夢の刈られたあとの徑を通つてもとの宿へ入つて行つた。

流石にまだ八疊の間はそのまゝにしてあつて、病人は六疊の方に寢てゐた。彼は簡単な挨拶をしておいて、なるたけ靜かに八疊の間で荷作りを始めた。宿の婆さんの言つた通り、當座必要のものだけ持つて行つて、あとはまた細君でも歸つて來てから運ぶやうにしよう^とと心がけて始めたのだが、机のめぐり、夜具、行李、食器、炊事道具など、それでもなか／＼男手一つには大變な仕事であつた。次の間には近所の人や見知らぬ人や、幾人も見舞の人がやつて來てゐた。聞くともなく聞いてゐると横濱から病人が歸つて來ると急に産婦が逆上せて容態がわるくなつたのださうだ。そんな事にならねばいゝがと思つてゐたんだと彼も心に思ひながら、一枚々々皿や鉢を新聞紙に包んでゐた。

三時間もかゝつて漸く如何にか一纏めに纏めて縁側に持ち出しながら、ほつかりして煙草を吸つてゐると、婆さんが何を思つたか、大きな丸盆に銚子と小魚の煮たのを載せて持つて來た。この一二日にこの人もげつそりとやつれて、自身にも言つてゐる通り耳まで一層遠くなつてゐた。一言二言、病人の事から産婦のことなど話して、それとない氣休めを言つてやると、他愛なく涙を零してゐた。そして、急に斯ういふ移轉などをさせて眞實濟ま^まない、忤からも吐られましたといふことを繰返し／＼言つてゐた。

富士屋から荷車を借りて、近所の女房たち二人に頼んで荷物を蜜柑屋へ運び終つた時はもう夕方であつた。疲労がまた際だつて感ぜられ、もうその荷造りを解く勇氣もなく繩で括つたまゝ、座敷へ投り込んで置いて、今夜もう一晩泊めて貰ふつもりで煎餅屋へ行つた。

子供の聲を揃へて泣いてゐるのが、遠くから聞えてゐた。障子を開けてみると、赤ん坊の方は座敷の真中に轉がされたまゝ、でその姉の三歳になるのは裏の縁側の七輪（その縁側で自炊してゐるのだ）の側で、火のつくやうに泣いてゐる。友人もその細君も其處らに見えない。赤ん坊の方を抱き上げながら姉の側に行つてあやしてゐると、平常肌抜きすらせぬ友人が襦衣一つで水を汲んで來た。

『大變だね、細君は如何した？』

『醫者に行つた』

『醫者へ！』

と言ふなりあれほど醫者を嫌つてゐたのを知つてゐるので、彼は驚いて友人の顔を見た。そして自づと聲も低くなつた。

『餘つ程悪いのか』

『うん、まアよくないんだネ』

と言ひながら此方も聲を低めて、

『この頃悪阻だつたんだがネ……………』

『エ、これか？』

思はず自分の腹に手を當てた。その事も彼には意外であつたのだ。それを見て友人は苦笑しながら、

『うん、さうなんだ……………、先刻二度ほど續けて嘔吐した時に二度とも五勺位るづつ血が混つただ相だ。それで奴さん驚いて出懸けて行つたんだが……………』

何時の間にか泣き止んだ子供を抱いてぼんやり立つたまゝ、友人の顔を見詰めて彼は何ともよう言はなかつた。咯血、と聞くともう取り返しのつかぬ事のように此場合思はれたのである。

『もつともそれが此處の……………』

と胸を軽く叩いて、

『せるだとはかりは思へないんだ、何しろ嘔吐すのも烈しいから胃からとか、また咽喉あたり

の關係かも知れないんだ』

言つておいて思ひ出したやうにざぶ／＼と洗ひ物を始めたが、その側にくつ着いて姉の方は一層烈しく泣き出した。赤ん坊を抱いたまゝ、彼は姉をも無理に引張つてぶら／＼濱の方へ歩いて行つた。流石に照り續いた梅雨前の天も幾らか雨氣ついて、海はとろりと澱んで居る。引き汐と見えて沖の方にはいつもの二つの岩が表れて、そこにだけ微かに白い波が立つて居る。沖合に突き出た岬の端で

は、薬を探るのだといふ海藻を焼く煙が、低くく海面へ流れて遠くまで靡いて居る。

抱かれた子供はすぐ眠つた。砂の上に坐つて自分の膝許に引き寄せて途中で買つて来た菓子を食べさせてゐるうちに姉の方もうとくとしだした。二人の子供の重みを手と足に感じながら、彼は今にも何か起つて来さうな不安と、疲れた身體から浸み出て来る哀愁とに、ぢいつと眼を瞑つて耐へてゐた。

連れ歸つた子供二人を座敷に寝せて置いてまだ細君の歸つて来ぬうちに彼は友人に一寸言葉をかけておいて自分の新しい宿に歸つた。そして座敷にある荷造りの中から夜具と洋燈とその他二三のものだけ引き抜いて物置の二階へ上つて行つた。なるだけ静かな所へ其夜眠りたかつたからである。

上つて先づ彼は驚いた。庭から見上げた所では物置とはいへ、いかにも普通の二階らしく見えたのであつたが、来て見れば二階とは名ばかりで、全くの屋根裏である。疊は敷かれてあるが、彼のやうな背の低い者でも立つては歩かれぬ位の低さに、棟木などが露出して、隅から隅に種々な道具が積み重ねてある。

泣き出したいやうな氣持を耐へて彼は先づ洋燈をつけた。そして手近の窓の障子をあけた。窓の直ぐ側から鬱蒼たる蜜柑の木立が續いて居る。可なり廣いその蜜柑畑の外れには松の並木が聳えて、そこから浪の音が響いて来るのを聞いた。ぢいつと窓に凭れて居ると頭は鉛の様に重くなつて支へ難

く臍の上に落ちて行く。

彼はやがて立ち上つて更に机を運んで来た。そして洋燈をもその上に載せて、いま煎餅屋の歸りに買つて来た鶏卵と一本の麥酒とで、變つた夕飯を濟ませて、直ぐ筆を取つて遠國の實家に在る妻へ宛て、手紙を書き出した。二三日うちに歸る筈であつた彼女から如何もまた身體の具合が變つて来たやうなので今暫く遊んで行き度いが差支へなからうかといふ手紙を、先刻彼はもとの宿で受取つて来たのであつた。

昨日からの出来事を認めて、斯ういふ際であるから少し位私の我慢をしても早く歸つて来て貰ひ度いとなるだけ優しく書きながら、彼は近來に覺えないほど彼女戀しさの情に燃えた。そして、終には書きをへたその手紙の上へ熱つてゐる自分の顔をしっかりと押しあてたりした。

翌日、荷物を大よそに片附けて、是非いま必要で忘れて来た二三のものを取るためにもとの宿へ出かけた。そして、道路を折れてその庭へ近づくと直ぐはつと思つて彼は立ち止つた。

烈しい、取り亂した聲で病人を呼び生けてゐるのを聞いた。二三の人が、その戸口から飛ぶやうにして這入るのを見た。ぼんやりして立つてゐる彼の側を突き抜けて馳けて行く人もあつた。

餘程そのまゝ、引き返さうかとも思つたが、われともなく彼もそわ／＼とその家へ入つて行つた。

今はもう醫者も隅の方へ引き込んでゐた。そして病人の上へは幾人となく種々の人がのし懸つて泣くやら喚くやら、または紫だつた唇へ水を塗つたりしてゐる所であつた。

『いまわれに死なれて俺どもは如何するだ！』

と叫ぶ聲も聞えた。ひとに助けられて死人の胸にしがみついてゐる産婦も見えた。

彼もそろそろに嚴しい氣持になつて、その一群の背後から黙つて頭を下げた。そして見るともなく其處の人たちの背を見てゐると、いづれも仕事半ばで飛んで來たものと見えて、襤褸仕立の着物の上にはみな黄いろい麥の毬が一杯に着いてゐた。

若き日

朝は一層目立つてきたない古びた遊廓のはづれに停車場がある。垢や脂肪や夜露やが重々しく垂れ下つてゐるその黒暖簾の一つをくぐり出た彼は、殆んど豫定してゐたかの如くその停車場へ急いだ。連日の、しかも昨夜の泥酔からまだ覺めきらないで、足も胴もふらくして、唯だ頭ばかりが重かつた。頭ばかりの動物が蠢いて行くやうな氣持であつた。

其處の大時計はちやうど午前五時をさしてゐた。明け早い頃なのでもう構内は全く朝になつてゐたが、まだ電燈は薄く残つてゐた。打水の鮮かな上を往來する人も疎らで、静かであつた。彼はいきなり其處の小さな賣店の前に行つた。そして今漸く折つて並べたばかりの匂ひの高い新聞紙を二三種類買ひとつた。人氣の少い一二等待合室に入つて、四邊を見廻したが、無論誰も知つた人はゐなかつた。で、やゝ安心して椅子のずつと隅の方に身を置いた。そして惶しく新聞を繰りひろげた。最も信用のあるものから次へくと、いらだつ心を押し静めつゝ、三面記事に眼を走らした。初めは大きな活字の見出しにのみ氣を注げ、はては隅から隅の小さな活字で埋められた雜報にまで悉く眼を通した。一

度で慄らず、二度も三度も読みかへした。そして愈々心あての記事に行き當らないのを確かめると、彼は急に安心したやうに、がっかりと椅子の上に身を投げた。

とにかく今日はこれで助かった。と思ふと急にゆるみをおぼえた双方の眼から眼脂のやうな涙が浸み出た。思ひ切つて踏み延した手足も急に自分のもの、やうに思はれて、そしてその節々の離れぐになつてゆくやうなを感じた。永い間新聞で顔を掩つたま、瞑ぢてゐた眼を開くと、すぐ上は開け放たれた大きな窓で、今日もよく晴れるらしい朝空が水々しい光線を宿して涯もなくうち仰がれた。徐かに目を移すと、向ふ側の窓には房々と咲き盛つた桐の花の薄むらさきがさし出てるた。

けれど、その安心も永くは續かなかつた。ぢいつと見入つてゐる朝空の静かな底に、例の蒼白い女の顔がおのづから描き出されて、また惶しく眼はとぢられた。

次第に變りゆく身體の様子を遂に家族から發見せられて、あらゆる憤怒と罵詈と絶望とに包まれながら、彼女が或る親戚に預けられたのは數ヶ月以前であつた。それ以來、兩人の間には手紙の往復すら絶対に不可能であつたのである。それが突然、今より四日前、彼は自分の下宿の玄関に平常とは打つて變つた様子の彼女の姿を見出したのであつた。彼の部屋に通るや否や、提げて來た藥壘の包をそこに投り出すと共に泣き倒れて永い間、顔を上げ得なかつた。無論話も何も出來なかつた。思ふさま

泣いて、やがて起き直つた彼女の顔を、彼は恐いものを見る心地で眺めた。眼だけは落ち窪んで、いつも櫻色を失はぬ双頬には殆んど血の氣が無かつた。一語々々、きれぐにいふ言葉の尻は悉く瘻變的にふるへてゐた。最初はどうかして、………しまはうと二度も二階から落ちたりした。一度は階子段の下の板さへ割れ破けたほど烈しく落ちたけれど、甲斐がなかつた、それがこのごろになつては、何ものにも代へがたいほど可哀相でなくなつた。おなかの中で靜かに動くのを感じるやうになつてから、益々可愛くて耐らない。このまゝ、生み落せば必ず目鼻も開かぬうちに他に遠ざけられて、恐らくは一生涯逢ふことも出來ぬやうにされるは知れてゐる、既にそれぐその準備も整つてゐるらしい。それと同時に自身の運命もまた大抵推察することが出来る。それこれのこと、みな自分には想像するにも耐へ難い。今日醫者からの歸りに僅かの隙を得て逃げて來た。いま直ぐ自分と一緒にどこにか姿をかくしてくれ。よしまた見付かるとしても、いまは自分にも相當の決心がついてゐる、何しろ自分一人では心細くて耐らない、たとへどうなるにしても一緒にゐて呉れ、と言つて四邊を見廻すやうにしながら、今にも人が追つて來るに相違ない。兎角の事は言つてゐられないから、直ぐ自分のいふことに同意して呉れ、それとも厭か、と彼を見詰めた其時の腫の光を、まざぐと彼はいま思ひ浮べてゐるのであつた。

彼は寧ろ呆氣にとられた。そして、よしあしの返事をする前に少しでも彼女の心を落ち着かせよう

と思つた。曾て見たこともないほど取り亂した姿に全く別人のやうにも驚きながら、彼は唯だ狼狽するのみであつた。おどろししながら二言三言云ひなだめようと始めた彼をぢいつと鋭く見守つてゐた彼女は、やがてまた其處に突きふして泣き出した。永い間嚙みしむるやうに泣いてゐる彼女を途方に暮れて眺めてゐる間に彼は漸くわれに返つたやうに自分の心のうちに愛憐の情の萌して來るのを感じた。そして、それと同時にその後からく々と湧いて來る憎惡の念をも、どうしても拂ひ除けることが出来なかつた。斯うした身體になつて以來、急に以前の従順な處女のやうな態度を棄て、しまつた女を、彼は夙うから意外にも感じ、醜くも面憎くも思つてゐたのであるが、斯うして取り亂した姿を見ると一層その感が強くなつた。

然し、女の現在を想ひやると何を措いても氣の毒さ憐れさが先き立たざるを得なかつた。とり分けて複雑つた彼女の家庭の事情を知つてゐるだけ——それに同情を寄せたのが兩人の斯うなる初めであつた、と彼は襲はれたやうに思ひ出して長椅子の上で寢返りした——一層憐れに思はれた。手紙の往復も叶はぬやうになつてから實際彼は夜も晝も、歩く時も飯を喰う時も、常にさうした女の事を思ひやつてゐたのであつた。そして、意外にも今日思ひがけぬその姿を眼の前に見て、驚き訝りながらも直ぐにも抱き寄せたいやうに思ひ昂つてゐる矢先に、全然それを突き除けるやうにして女は彼に逃走を迫つたのであつた。

逃げてもわるくはない。曾つては自分自身それを思つたことさへあつたのだが、果してよく何處まで隠れ得らるゝものであらう。その結果はますく、耻を明るみに出して、自分の方はとにかく、あなたの家の人たちの憤怒を招くのみではないか。それよりも今暫くなるまゝになつてゐて、どうせ斯うなつた身體をあなたの家でも如何し得るものではない、いづれは折るゝに相違ないから、その日を待つてまたこちらにも手段の取りやうがある、と彼は自身の膝の前に俯伏してゐる女の亂れた髪や瘦せの表れた頸などを痛いものに觸れるやうな氣持で折々眼を注ぎながら、訥りく低聲で話しかけたのであつた。自分ながら耻しくも思ひ、胸の底にとすれば起りかけて來る厭惡を抑へながら、それでも一生懸命になつて斯う言つたのであつた。

いつの間にか泣く事をやめてゐた彼女はやがて顔を上げた。そしてはつきりと彼を見た。その瞳には恨むといふより何だか氣味の悪い冷たさが宿つてゐるやうに彼には感ぜられた。よく解りました、と一言云ひながら、急に彼女は立ち仕度を始めたので、彼は惶て、それを留めた。その態度を見て軽く笑ひながら、でも、斯うしてゐて若し見付かつたらあなたの折角のその計畫も無駄になるぢアありませんか、と言ひすて、藥壘を取り上げた。彼も何ともよう言はなかつたが、それでもこのまゝ、接吻ひとつ無しに別れるのが何とも云へず淋しかつた。黙つて自身も立ち上つて手を取らうとすると、彼女は軽く頭を振つて急いで部屋を出た。車を呼ばうか、其處等まで送らうかと言ひかくる彼をすべ

て退けて、癖ではあるが別しても小股の急ぎ足ですらりとしたうしろ影を残しながら門口を出て行つた。廣い下宿屋の玄關口に冷たくなつたやうにして立つてゐた彼は、取り卷いた女中どもの戯談口すゝ耳に入らないやうな氣がしたのであつた。

あの時追つかけて行つたところで、あの女のことだ、到底あとには引返さなかつたらう、と今更のやうに思ひ返しながら待合室の汚い長椅子の上に彼は起き直つた。

彼女が下宿屋を出て行つた日の夕方、彼女の家から使の者が事た。後には巡査も來た。そして彼は警察に呼ばれもした。彼女はそれ限り自分の家にも親戚の家にも病院にも歸らなかつたのである。

一體自分は終りまで彼女を愛してゐたのであらうか……。

彼はいつか長椅子を離れて、足音をも立てぬやうにして室内を歩きながら斯う考へ始めた。

眞實愛してゐたならば、あゝして必死の覺悟で出て來たものを、如何に將來のためとは云へ、あゝいふ風に追ひ歸す事が出來たであらうか。また、眞實自分はあの時將來のことを考へてゐたのであらうか。それより先づ、女の素振が變つてとげとげしくなつたのを咎める前に、女に對する自分自身の心の状態を考へて見る必要は無かつたらうか、豫期せぬでもなく、したでもない女のあゝした身體の變化をいよゝゝ眼の前に見た時と、否、それよりもつと以前、女とあゝいふ仲になつて僅か半年あまり

經つた頃と、初めて彼女と熱い握手を交はした當時と自分の心に少しも變りは無かつたであらうか。

段々と考へて行けば行くほど彼は息のつまるやうな苦しさを覺えずには居られなくなつた。顔も唸も急に熱つて來るのを感じた。

『いゝや、それは自分ばかりの事ぢアない。彼女だつて終りまで自分を愛してゐたか如何か知れたものぢアない。』

彼は斯う心の中で呟きながら、或る事を思ひ起した。それはまだ彼女が親戚に預けられぬ前、僅かの隙を盗んで自分に逢ひに來た時、さんぐ苦しさを訴へて、どうかして自分はいま死に度いものだ、死ぬより外に道は無い、けれど、自分一人で死ぬのはいやだ、と言ひ切つた彼女の聲であつた。さう言つて上目づかひに自分を見上げた鋭い、寧ろ氷のやうな彼女の眸であつた。あの時、自分はどんなに彼女を氣味悪く、面憎く思つたらう。

とすれば、最後に逃亡を誘ひに來た時も、或はまたどういふ下心であつたも知れぬ、と思ひ出すと彼はわれ知らぬ寒さに唖を暝ぢた。そしてものごころがつくとから他人の間に生長して、常に周圍を冷たく暗くのみ過して來た彼女の、寂しい、絶望的な性質をまじくと思ひ浮べた。

『然し……』

彼は、はたと立ち上つた。

『それらは要するに過ぎ去つた問題だ。唯だ、眼の前に在るのは、自分も知らぬ、他も知らぬ所に横はつてゐる筈の彼女の蒼醒めはてた顔だ。それと共に光を知らずに亡びて行つた小さな生物のしかも自分自身の血の通つてゐた生物の冷たい影だ！』

唯だ新聞を買ふために入つて行つた停車場から彼は三十分間汽車に揺られて平野の間を走つた。その事があつてから彼はどうしても自分の部屋に歸り得なかつた。恐る可き兇報が彼を待ち受けてゐるに相違ないと信じ込まれてゐたからである。歸り得ぬのみか、知つてゐる人の顔を見るのも恐ろしかった。が、今朝停車場に入つてから、其處から少し離れた郊外に極く親しい友人の畫家の住んでゐるのを思ひ起すと、急に遇ひ度くなつて汽車に乗つたのであつた。思ひ出すと、その友人の家には二度ほど彼女を伴つて行つた事もあつた。一つは知人に逢ふ機會の少い郊外を便としたのと、一つは多少見せつけたい氣もあつたのであつた。

開け放つた窓に頭を載せて眼を瞑つてゐると、いかにも平野の間を走つて行く汽車に相應しい種々な植物の匂ひが、爽かな風と共に彼の顔を包んで來た。雲雀の啼く聲も聞えて來た。靜かに揺れてゐる汽車そのものも疲れ果てた彼の身體を次第に安らかにした。彼は泣くやうな、睡るやうな心地で今まで化石してゐたやうに固くなつてゐた自分の身體が次第に溶けて行くのを感じた。涙らしい涙が、初めて彼の頬を傳ひ始めた。

友人の家は停車場を出て色づき切つた麥の畑の間を少し行くと直ぐであつた。が、まだ門も雨戸も締めてあつた。彼は痲癩を起した様に作つて間もない其處の生籬を乗り越えて、庭の中に飛び込んだけれど、雨戸を叩くのをば流石に躊躇した。氣拔けた様に茫然と突立つて居ると、郊外の事で家の割に廣く取つた庭には庭だか畑だか解らぬやうに和洋種々な草花が植ゑてあるのが眼についた。若い癖に夫婦とも庭いぢりが好きで、そのためわざと、斯んな郊外に引込んで來たのではあつたが、僅かの間に斯う整頓して作り込んで居やうとは思はなかつた。名は知らぬが大輪の眞紅の花が露を帯びて血のやうに咲いてゐるのなどもあつた。

朝とは云へ、終りかたの五月の日はもう可なり暑かつた。餘程叩かうかと雨戸の方を見やるのだが、いいんと締め込んである眞新しいそれを叩くのは今朝の自分として如何にも深い罪惡を犯すやうで、容易に手がつけられなかつた。庭の隅まで歩いて、しつとりと垂れた葉櫻の蔭に躊躇んでゐると、疎らな青苔と眞黒い地との匂ひが鮮かに鼻を突いて來た。好い心地でそれを嗅ぎながら凭れるともなく櫻の大きな幹に背を凭せると、酒の酔と疲勞とのために力を失つてゐる五體はすぐぐつたりと地の上に頽れてしまつた。起き上ることもせず、彼はそのまゝ、其處につき坐つて睡つてしまつた。

笑ひながら赤ん坊を抱いた友人と、呆れ果てた友人の妻とが自分の前に立つてゐるのを振り仰いだ彼は、流石に顔を赤くしてよろ／＼と立ち上つた。が、如何なる場合にも微笑を失はぬこの友人の顔をはつきりと認めると、もう解の知れぬ可憐しさと悲しさが胸の底からこみ上げて來た。

その日の夕方、彼と友人とは友人の家から程近い小さな岡の上に坐つてゐた。全ての事情を打ち明けた彼を、友人夫婦はさまざまに慰めて酒を勧め飯を勧め、そして床を延べて呉れた。そして、朝から今しがたまで幾時間といふ事なく睡り通してゐたのを友人に起され、餘りに好い夕方だからと云つて氣乗りせぬながらに散歩に誘はれて來たのであつた。

酒を飲み、都合のいゝ方の話のみ聞かされてゐる間は何といふことなく慰められてもゐたが、斯うして起き上つて見ると、不安は實に彼の身から去つてゐなかつた。何彼と話しかける友人に時々返事をせぬ事などもあつた。

『また、考へてるのかい。』

見て見ぬふりをしてゐた友人も終には憐れむやうに斯う言つて笑つた。

『大丈夫だよ、人間一個の生命はなかく／＼さう簡単に棄てられるものぢアないよ、特に妊娠中ぢアな

いか。』

『だからサ……………』

『だから餘計死ぬと言ふのかい。さうなれば君、人間二個の生命となつてゐるのだよ、死なうと云つたつて神さまがなかく／＼殺さない、それにそら君にも言つたといふぢアないか、今となつちア可愛くてなかく／＼死ねないと。』

『だつて君、それも人に因るよ。』

『……、君はあの人をいゝやにヒステリーのやうに考へてるやうだが、決してさうぢアないよ、僕は幾度も逢つてはゐるないが、なかく／＼さばけた、而かも勝氣な人だと思つてゐるよ。』

『如何して、』

『如何してつて、さうでなくてそんな陰氣な女がどうして君のやうな男に密着くかい。』

『……………』

『ハ、、、、冗談は抜きにしても、女の觀察はやはり女の方が細かいものだが、僕の妻などもさう言つてゐた。さうだ、今度の事だつて矢張り女の證明を信じ給へ、妻などはもうそんな事に寸毫の懸念を抱いてゐないからネ。實はうちの奴なども目下仕上げ中なのだ。』

『またか？』

『またかは御挨拶だね。年々連發の意氣込だよ。ハ、ハ、ハ。』

呆れたやうに彼は友人の顔を打ち目守つた。夕陽は恰度いま國境の連山の嶺に近く眞圓に懸つてゐる。麥を刈る農夫どもがずつと打ち續いた畑に、遠く近く幾つもの動くいてゐる。友人は何か寫生の構圖でも考へてゐるらしい風であつた。

『それに……』

他所事のやうにして友人は續けた。

『生れつきの性質は別としてそんな家の中で揉まれてゐる間に幾らか陰氣に黷んだか知れないが、君といふものを得て漸く本來の性に歸ることが出來たのだよ。さうでなくつて幾らラブが楽しいものだからつてあんなに君の言ふなりに、と云ふより君を拉してか、自由に跳び歩けるものかい、まるでそれこそ放たれた鳥同様ぢアなかつたか。』

友人は案の如く寫生帖を懷中から取り出した。太陽は次第に黄いろくならうとして居る。

『さうではあるが、ソラ、永い間の鍛鍊で性根が練れてゐるから、今度の事だつて決して輕はずみなことは爲はしないよ、頼んだつて爲はしない。萬一何かしてゐたのなら夙うにそれ君が楽しんでゐる新聞ものになつてゐる筈だよ。』

『さうか知ら……』

『さうだとも、怪しむなら下宿に歸つて見給へ。いよ／＼もう度胸をきめて君の部屋に鎮座かも知れないよ。なんなら、僕が行つて佳人の家を調べて來てやらうか。』

『……』

『何とか云つたな、ソラ、君等がよく楽しみに出かけた多摩川べりの爺さん婆さんの宿屋よ。彼處なら佳人の家でも警察でも知つてはゐるない。』

『お、彼處がある！』

『あるとも、彼處に行つた方が近道かも知れない。』

彼は黙つて考へ込んだ。

友人はまた續けた。

『佳人、少し人が悪いもんだからこの坊ちゃんを驚かしてやらう位に考へたかも知れない。つまり犬も食はない種類のや、大なるものだネ。』

『でも君、萬一僕の想像が當つてゐたら……？』

『當つてゐたらそれまでさ。仕方はない。まさかそのためにお巡りさんが君を引つ立てる法もあるまい。』

『でも良心が……』

『良心は君、君等が第一の接吻をやる以前に起きて、呉れなくちア駄目だよ、今になつて眼を覺してそんな御託を並べるやうなら良心寧ろ監禁ものだ。』

彼は黙つた。ぢいつと友人の横顔を見詰めてゐると、友人も黙つて忙しく鉛筆を動かして初めた。そして斷々な口笛が折々その唇から漏れた。

『まだ居らしたの？』

不意に細君の聲がした。細い徑を下から上つて來たのだ。

『坊主は？』

『よく自宅でねんねしてます。……オヤ、また同じネ、いつだつて同じ雲ばかりぢアないか。』

斯う言つて良人の側に近寄つて畫帖を覗き込む廿歳を漸う越したばかりの細君を注意して見ると、なるほどもう六月か七月のお腹であると思つた。

何とも言へぬ淋しさがまた襲うて來た。泣き出したいのを耐へてすつと立ち上ると彼は彼等に背後を向けて五六歩あるいた。

其處の下には濁つた小川が流れてゐた。音をも立てず流れてゐる木蔭の澱みをぢいつと見てゐると冷たい燐銀の色をした水の面に、また例の顔がまざくと見えて來た。

或る死んだ男

底寒く曇つた日で、身體に少し熱のあるのを感じると直ぐ、悪い感冒の流行る時であつたし、岡見落葉は晝間から床を取つて寢込んでゐた。うとくとしかけては隣室の子供達の騒ぎに眼を覺して、次第に心持の重くなりかけてゐた夕方に、突然、

『電報！』

といふ聲を玄關に聞いた。電報といふものを餘り受取り馴れてゐぬ彼は、この鋭い聲を聞くごとに何といふことなく胸をときめかせて先づ何等かの凶事を豫感するが常であつた。うとくとしてゐた時だけに、一層驚いてゐると、やがて彼の妻が出て行つてそれを受取つた。黙つて彼女の言葉を待つてゐると、果して頓狂な聲を擧げた。

『マア、山崎さんが轢死したんですつて、山崎昌道さんが！』

『ナニ！』

『太田さんが知らしてよこしたんですよ、ヤマサキマサミチサクヤレキシス、つて！』

『どれ、寄越せ！』

彼は寝ながらその電報を手を取った。まさしく妻の言つた通りに認めてある。發信局も太田や山崎たちの郷里のS——町局である。今朝早く打つたのが、餘程遅れて届いたものらしい。

彼は二三度読み返すとそれを枕許に投げ出しておいて初めの通りに蒲團を被つて眼を瞑じた。妻は其處に膝をつきながら電報を取り上げて今一度丁寧に文字を拾つた。

『どうも斯んな事になりさうな気がしてゐた、ソラ、いつかも妾がさう言つたぢやアありませんか！』
彼は返事もせず、眼もあけなかつた。

『どうしませうネ』

『どうもしないよ、其處にそれを置いといたら可い！』

不興氣な聲を聞くと妻は電報を其處に置いたまゝ、次の間へ立つて行つた。

たうとう行つたか、と電報を一目見るとから彼も思つてゐた。恰も當然な結果が其處に現はれたのを見る様な氣持で、普通謂ふ人の自殺、しかも知人の自殺に對するといふ驚愕も——それは驚くには驚いたが——哀愁も、憐憫の情といふ様なものも一向に岡見の心に動かなかつた。動かなかつたどころか、何となく不潔な、醜汚なものを眼の前に突きつけられた不快すら起きてゐた。彼は蒲團の中でも顔をしかめては思はず唾を飲み込んだのであつた。

それと共に僅か半年ほど前に別れた最後の時の事が直ぐ心に浮んで來た。夜ふけの十二時近くに矢張り一通の電報を持つて山崎は岡見の宅を訪ねて來た。そして、危篤と云つて郷里の父からこれが來ました、如何しませうかと云ふのである。君はどうする積りだ、と岡見はその泣き張らした様な赤い眼を見ながら訊いた。斯う云つて來ますと矢張り歸らないわけに參りませんから歸らうかと思つてゐます、と常に似ず明瞭に答へた。さうか、では歸り給へ、然し大變だねえと言ひながら、で、何時立つ、と訊くと明朝の八時の汽車で立たうと思ひますと答へた。汽車賃は、と追ひかけて訊くと、主人が都合して呉れるさうですと言ふ。岡見はその時自分だけ起きて寢衣のまゝ、玄關の二疊で逢つてゐたのであるが、改めて妻をも起した。そして斯うくだと告げた。岡見の妻を見ると、そしてその手短かな見舞の言葉を聞くと山崎はしくしくと泣き出した。思ひ切つた様に遠慮なく泣き出した。それに誘はれさうになつてゐる妻を岡見は次の室へ呼んで、金はあるかと訊いた。何でもいゝからある丈け出して御覽と言ひながら彼自身の財布や妻のや、はては火鉢の抽斗まで探して一圓と八十二錢を集め得た。もう二十錢あるといゝんですがねエと言つてゐる妻の手からそれを受取つて、傍にあつた新聞紙を裂いてくるくと包みながら玄關へ持つて出た。ゆつくり話せるといゝが、愚圖々々してると電車が失くなるだらうから、今夜はこれで歸り給へ、明日も見送るといゝんだが早いから失禮する、これは汽車の中で果物でも喰べて呉れ給へと言ひながら、その小さな新聞包みを渡した。辭退するや

ら泣くやらしてゐるのを追ひ立てるやうにして、電車まで彼も送つて出た。どうも僕には阿父さんの病氣といふのは嘘としか思はれないが、さうして電報などが来て見ると君としては歸らずにもゐられまい、歸るのはいい、が矢張り君自身餘程しつかりしてゐなくてはいけないよ、周圍に負けない様にしてゐないと是迄の折角の苦心も水の泡になるし、双方共倒れになるに定つてゐるのだから、と電車までの路を急ぎながら彼はこの憐れな男にいひかけた。例の通りの仕事着の小倉服に下駄を履いて、兩手をズボンの隠しに突き込んで前くゞみになつて歩いてゐるのを見ると平常より一層瘦せてゐる様で、そゞろに岡見も憐れを覺えずにはゐられなかつた。え、え、もうそれは覺悟して居ります、とは言ひながらその聲は上の空であつた。今度逢ふのはS——町だか東京だか知らないが、兎に角立派な一軒の主人になつてゐるで大いに僕に御馳走して呉れ給へ、と子供らしいとは思ひながら斯う言つてわざと笑ひかけると、え、もうそれは充分御馳走します、と案外にもその夜初めて力のある聲を出して彼は笑つた。

案の如く電車はもう無くなつてゐた。五分ほど前に赤が出ました、とその電車の終點に在る交番の巡査は言つた。

『どうするネ、もう一度僕の宅へ引返して明日の五時のに乘るやうにするか』
と岡見が言ふと、

『イエ歩きます、まだ何の用意もしてゐなかつたものですからこれからそれを爲ねばなりません』

と言ふ。彼の主人の宅は本所外手町であつた。

『だつて、大變だらう』

『イエ、わけはありません、急ぐと直ぐです』

と言つて帽子を取つた。

『さうか、では』

と岡見も帽子を取つた。彼は、山崎はまた泣き出してゐた。岡見も流石に迫つた氣にはなつたが、側に立つてゐる巡査の手前もあるので、

『では、歸つて來給へ、歸つたら事情を詳しく知らする事と、それから太田君にも宜しく言つてくれ給へ、では、左様なら！』

と、わざと軽く言つて別れた。

それから彼は五六ヶ月の間、山崎からは葉書一本來なかつた。太田の葉書で無事に彼の歸つたこととその父の偽病氣であつたことだけは知つてゐた。其後は太田からも久しく音信が途絶えてゐるので、折々思ひ出してはゐるが、こちらからも改めてどうしてゐるかを問ひ合するだけの氣もなかつた。その山崎が昨夜轢死したといふ。

53

『どうも、そんな事つきり出来なかつた男かも知れない』

岡見は斯う思ひながら最後に別れたそのうしろ影を見送つてゐる様に天井を見詰めてゐた。驚かぬとは言ひながら流石には、つとしたものか、彼は急に自分の頭の痛み出ししてゐるのに気がついた。

山崎が岡見を東京に尋ねて來たのは三年餘り前になる。同國とは云つても岡見の生れたR——町と山崎のS——町とでは二十里から離れてゐたが岡見の幼な友達の太田俊一がS——町の方に移り住む様になつてそれを仲に兩人は相知つた。三人とも文學好きで、中でも岡見は東京に出ていつの間にかその道で一身を立つる様なことになつてゐた。太田と岡見落葉とは齡も同じだし、小學も中學も同じに經て來たのであつたが、山崎は五歳ばかりも年下で、家も貧しく、小學をも出たか出ぬかであつた。そしてその文學の方面から云ふと山崎は太田に兄事し、太田は岡見を尊敬してゐるといふ地位に在つた。山崎は殆んど毎日太田を訪ねて、その話を聴いたり、書籍や雑誌を貸して貰ふのを喜んでゐた。岡見が父の葬式を濟ませて上京の途中久しぶりに太田を訪ねて、かねて手紙などではよく知つてゐた山崎と公然に初めて逢つた時、その慇懃なのに驚いた。名乗はしなかつたが、實はその少し前に岡見はこの青年を或る所で見た事があつたのだ。山崎の父はR——藩に仕へた漢學者で、特に書を能くした。そしてそのために縣廳の文書課といふ風のところへ出て、辭令などを書かせられてゐた。それも昔の

友達で今は相當の位地になつてゐる同じ役所の者のお情の仕事で、位地も報酬も極めて軽いものであつた。そして山崎もそれ等の緣故で父と共に同じ役所に勤めてゐたが、父よりも一層低い地位であつた。それが或時、縣の教育會の催しか何かで、或る上役の人に隨いて幻燈を持ちながら縣下の各小學校を廻つて歩いた事がある。岡見の郷里の小學校にも廻つて來た。その頃丁度岡見は父の病氣のために東京から歸省してゐたので、太田から斯うくといふ男がいつか行く相だから行つたら逢つて呉れ、といふ手紙を貰つてゐた。幻燈會は開かれたが、その男は訪ねて來なかつた。その二日目の夜、岡見は小さな姪を連れて幻燈を見に行つた。すると、何處とかの小學校からこちら、その上役の人が病氣で休んでゐるとかで、色の生白い、小柄な、瘦せた青年が一人で萬事を切り廻してゐた。

『コラ〜、近くに寄つてはいかん』

と大きな聲で子供ばかりでもない見物人を叱つたり、

『君々、それを如何して呉れ給へ』

と自分より十歳も年上のその學校の教師にわざとらしい高聲でものを言ひつけたり、幻燈の前半の説明をば學校の教師がやり、後半はその青年自身がやるのであつたが、説明といふよりいかにも目下の者に教へてやると云つた風の横柄な氣取つた態度でやつてゐた。

『これがその男だな』

斯う思ふと、岡見は自分から名乗つてこの猪口才な小僧に逢ふ必要はないと思ひ込んでしまつた。翌日もわざと早朝から家を外してゐた。それが斯うした太田を仲にして逢つて見るとまるで打つて變つた懇勤な、青年といふよりは子供とでも云ひ度い程で、三度も五度も聲をかけねば彼は廊下に坐つたまゝ、岡見達の居る座敷には入つて來なかつた。そしていかなる時でもさも面白相に莞爾々と笑つてゐた。馴れない間は、岡見はそれを氣味悪く思つた。

『少し變ぢアないか』

山崎が席を外した一寸の間に岡見は太田に言つた。

『うゝん』

と太田は笑つて、

『自宅がひどい貧乏をしたりなんかしてるもんだから自然あんなになつたらうよ、性格にもよるだらうがネ』

と言ひ足した。太田の家は土地で有數な財産と名望とを持つてゐた。

そんな風で逢つて來た翌春、まつたく突然に山崎は岡見を訪ねて來たのであつた。そして顔を合はせる早々、私はこれから理髪師になりたいからその弟子入の御周旋を願ひ度いと言ひ出した。

『理髪師ですつて?』

岡見は訊き直した。

『エ、さうです、床屋です。實は私は郷里で月給を十一圓貰つてゐました。父の月給と云つても似たものです。そして家には母と弟が二人と妹が一人ゐます。それでどうして家が立て、行けませう。そのうち父は程なく老朽でやられます。夙くに一度その云ひ渡しがあつたのですけれど泣き着いて漸く置いて貰つてゐるのです。私にしたところが、いつまであんな役所になるたつて先きの知れた事です。で、いつその事いまの間に其處から出て、何か手に職でも覺えて置いたらさきくゝ安心だらうと、さう思ひ立つたのです』

さう言ひながら何時か彼は涙ぐんでゐた。岡見はその時彼の涙を初めて見た。幻燈會の時の彼、太田の家での彼、そしていま其處に泣いてゐる彼、何だか不思議なものを見る様な氣で、唯だ空しくそれを眺めてゐた。役所の給仕あたりによく見る小倉服を着て、汽車から降りて來たばかりの脚をきちんと坐らせて、正しく兩手を膝についてゐた。四百里近い道中で考へ／＼でもやつて來たか、彼の言ふ事は誠に理路整然としてゐた。そして、話してゐるうちに自づから熱を持つて來た。

『それに段々耻を、お話せねば解りませんが、私の父は——今は飲めないから止めてますが——舊は恐しい酒飲みでした。その爲でもありませんか、私は幸ひに何ともありませんが弟や妹がみな普通の身體ではありません。白痴とまでは行きませんが、ものもろく／＼言へないやうな者ばかりです。そし

て妹はもうい、年頃ですのにまだ毎晩の様に疎忽をします。弟は弟で——末の弟はまだやつと九歳になつたばかりですけど——盜癖を持つてゐて、何處に奉公に出しても直ぐに歸されてしまひます。』

ともすれば泣聲になりさうなので彼は暫く言葉を切つた。そして手布で兩眼をしつかと押へた。岡見も今は好奇心から離れて漸く本氣になつて耳を傾けて來た。茶を代へに來た妻をば目顔で直ぐ階下に降ろした。

『父は父で唯だ威張つてばかりゐて、そして時にはまるで半狂氣の様になつて母を毆つたり、妹や弟を毆つたりします。私をばよくくの時でないといふやうに毆りませんが、然し、それらを見てゐますと私自身が何だか氣が變になりさうで、どうかすると父を毆らうとする事なんか度々あります。そしてそんな事に氣がつくと私自身氣味が悪くてたまらないのです。で、どうかして先づそんな不愉快な事の見えない所へ行き度いと思ひまして、……………その上役所の方の仕事も私の氣性に合ひませんし、先きの見こみありませんし、それで……………』

骨は折れても氣の樂な、金の取れる仕事をと考へた末、理髪を選んだのだといふのであつた。それには何も斯んな所まで來なくとも近くの鹿兒島なり、福岡なり、神戸大阪なりで修業してもい、のであるが、なるだけ家から父から遠ざかり度く、それに何を云つても東京だと思つて出て來ましたといふ。

『よく阿父さんが許しましたネ』

『無論許しません、こちらでい、職に就くやうに言つて欺して來たのです』

『毎月金を送れとか云ふ様な事になりはしませんか』

『さうですけど、それは仕方ありません、その代り私も精々早く修業して歸つて安心させます、幸ひに私は手さきは割に器用な方ですから案外に仕事は速く覚えられるかと思ひます』

『それまで家の方は大丈夫ですか』

『どうにかならうと思ひます、眼を瞑りさへすれば妹でも弟でも何處にか奉公口があらうと思はれます、母も少しは内職をしてゐますし……………』

それから岡見は自身行きつけの床屋から知人達の馴染まで出來るだけ手を盡して奉公口を探したが、悲しい事に山崎はもう齡が齡であつた。いくら器用だと云つても、この指さきの藝は十三四歳からたか／＼二十歳どまりでなくてはなかく、覚えられぬものだといふのである。山崎はその時廿六歳であつた。小柄で、子供々々しい所から後には廿二歳だと言つたりして頼んだけれど、そんな事情では手に藝が出來早々郷里へ歸らなくてはなるまい、さうすれば禮奉公といふものもして貰へまいから、と云つてなかく、何處でも引き受けて呉れなかつた。まア仕方がない、氣長く探すのだと言つてゐる岡見をさしおいてまだ西東すら解らない市内の床屋を今度は一軒々々と自分に訪ねて歩き始めた。當時の彼の意氣込は實際見てゐて苦しくなる位のものであつた。

たうとう彼は目的を達した。その床屋は神田のとある大通りに在つた。主人は何とか教の凝屋で、丁度彼の行つた時、朝の祈禱をすました所であつたが、よろしい、それでは自分が天なる神さまに代つて貴公を救つて上げるから、と云つて引き受けて呉れたのださうである。喜び勇んで岡見の宅に歸つて来た彼はすぐその足で引き越して行つた。そして直ちに彼もその日から何とか教の信者となつて天なる神さまと朝夕祈禱を上げるやうになつた。

月の十七日が彼等職業者の休日であつた。その日には毎月缺かさず山崎は岡見の家を訪ねて来た。どんな男なのだらうと内々不氣味に彼を見守つてゐた岡見も次第に彼を了解して来た様な氣がした。それは極めて平凡な好人物な、もつと適當した言葉で云へば、へ、な、ち、よ、こ、な人間であつた。來るとか歸るまでに、た、く、笑ひ通して、起つたり坐つたりするのにも如何にも落ちつきのない、輕卒な、その性格が現れてゐる様に思はれた。岡見の宅の五歳になる男の兒が先づ彼を馬鹿にし始めた。

『やア、山崎の馬鹿野郎、なんだつてそんなに笑つてばかり居やがるんだい、やア、い！』

『これ、太郎さん、何を貴郎は言ふの、山崎さん御免なさいよ！』
と赤くなりながら取りなすその母の聲も半分は包みかねた笑ひ聲であつた。山崎は無論多々益々笑ふばかりであつた。

それでも子供とはよく遊んだ。一日子供の言ふまゝになつて遊んでゐた。子供たちもその日の來るのを待つやうであつた。岡見の妻も亦たさうで、その日には晝とか夕方とかに必ず何か變つた食物を拵へて彼を待つた。たゞ困つたのは彼の遠慮深いことで、四品つけた料理ならば必ずその二つか一つには決して箸をつけなかつた。

『オイ君困るよ、君の残したものをさう誰も喜んで喰べんから喰べて行つて呉れ給い、無駄になるぢアないか』

などとぞんざいな口をきく様にいつの間にか岡見もなつてゐた。

『へ、へ、あまり勿體ないですから』

とお辭儀をしいく、矢張り喰べ荒すことをしなかつた。で、いつとなくその十七日の御馳走も影を消すやうになつた。

彼が岡見の家に着くのはいつも晝少し前か、どうかすると晝少しすぎに決つてゐた。それは毎度主人に伴れられて午前中を其「天なる神様」にお詣りして來るためであつた。「天なる神様」の本社とか奉祭場とかいふべきものは麴町の富士見町に在つた。其處でただ「天なる神さま、天なる神様」と呼んで手を高く合掌して拜んでゐると、いつとなく心が淨められて、その天なる神様が來てその心へ宿るのだといふ。初め岡見はその床屋の主人の弱點につけ込む山崎の一つの手段だとのみそれを睨ん

でゐた。が、次第にそれは彼の本心から行つてゐることだと解つて來た。初め山崎がその床屋に奉公を許さるる時、床屋の主人はその朝豫め彼の來ることを知つてゐたのださうだ。神の前に祈禱をしてゐると神さまが現れて今朝斯うくした憐れな孝行者がお前を訪ねて來るからお前が私に代つて引き取つてやれといふお告があつたのだといふ。

『その事を話す時、主人の眼からは眞實ほんとうに光が發する様で、思はず私は慄おそへました』

と山崎は敬虔な眼を擧げて岡見に語つた。

『だつて君、その前の晩その近くの床屋まで君はめぐつて行つて置いたんだらう』

と言ひかけたが、その眞面目な顔を見ると口には出さなかつた。そして代りに、

『それは然しい、事だ、何にせよ信仰といふものは人の心を統一する力を持つてゐるらしいから……』
と言ひかけて、

『そして何かネ、君はその神さまの前で拜んでゐるといふ氣持かネ』
と訊ねた。

『え、もうそれは、まるで極樂に行つてゐる様です！』

と言下に答へた。

或時は斯ういふ事も言つた。

『此方に來ます前、毎朝神さまの前で拜んでゐますと、もうちやんと岡見先生のお留守だかどうだかといふことが解つてゐます』

すると、次の日、門の前に例の山崎の笑ひ顔を見出すや否や、岡見の妻は頓狂な聲を出して玄關の窓から首を出した。

『いけないく、山崎さんいまその門をあけてはいけませんよ、そして如何どう、けふ宅たくは居て、居なくつて？』

長火鉢の側で新聞を讀んでゐた岡見はその妻の言葉に驚くと同時に直ぐ例のへらく聲を聞いた。

『へ、へ、無論今日は御在宅です！』

『オヤー、ほんとに變なものですねエ！』

岡見はたうとう其處に倒れて笑ひ轉げた。

一年か一年餘りも経つた頃、山崎はバリカンや剃刀を持つて來る様になつた。子供は一度で懲りて逃げ廻つたが岡見夫婦は進んで彼に頭や顔を任せた。唯だそれよりも迷惑だつたのはその度ごとに彼が何かしら手土産を持つて來ることであつた。それも煎餅や菓子などならばまだしもだが、時にはやや高價らしく見ゆるクリーム類だとか、ふけ取香水、石鹼、タオルなどを澤山持ち込むことであつた。

遠慮でなくそれを謝絶してもなか／＼聽かなかつた。そして折りふし「恩を忘る、様では人間でありませんか」と彼の言つてゐる事を岡見は妻から聞いてゐた。

『一體君はどうしてそんな金を持つてゐる？』

岡見は或る時、斯う訊いた。しきせは勿論知らない、小遣も普通の三分一か五分一で澤山だからといふ約束で初め住み込んだのであつたが、それでは神さまに對しても濟まないと言ひながら其處の主人は先づ普通の待遇をば山崎にしてゐる様であつた。それだけまた山崎は他の幼い弟子共と違つてよく働いてゐるらしかつた。夜などは大抵三時間か四時間しか眠らない、とよく彼自身言つてゐた。思ひ込むとすぐ夢中になりさうな彼としてそれもさうだらうと岡見もそれを信じてゐた。が、まだ一人前にも半人前にもなり得ない彼として與へられてゐる金額は大抵知れたものであつた。

『あ、いふ所にはみな特約店があつてそれこそ嘘の様な値で買へますよ、それに東京の商人は商賣が巧いから私等見た様なものにも何か知らよく呉れて行きます』

と山崎は平氣で答へた。それもさうかとは思ひながら、以前に彼の弟の性癖などを聞いた事のある岡見は矢張り何か氣がとがめてならなかつた。暢氣な彼の妻も、

『山崎さんから貰ふのはい、けど、何だか氣味が悪くて爲様がない』
などと言ふ様になつた。

君も折角の休みを神さまの前と此處とだけでつぶしてゐたのではまだ何處も知るまいから、これから段々と僕が案内してあげよう、と親切や義理のほかに自身遊びに出かけたのが混つて岡見は頗りと淺草や銀座へ彼を引き出さうとしたが、山崎はなか／＼應じなかつた。私のやうな意志の弱いものは直ぐ誘惑に負けるから成効するまでそんな所へは一切出ないことにしてゐる、といふのである。これには岡見の妻も全然同意を表してゐた。

が、或る日たうとう彼を淺草へ連れ出した。初めの約束であつたので、先づ活動寫眞館に入つたが――その時岡見は曾ての幻燈會の事を思ひ出してひそかに側にゐる羨びた山崎の横顔を盗み見た――餘り面白くないと云ふので早々に其處を出た。そしてそれが岡見の初めからの計畫であつた或る料理店へ寄つて一杯飲み始めた。

酒は嫌ひだといふ山崎の言葉の偽であることを人一倍酒好の岡見は夙うから見抜いてゐた。そして酒好によくある惡戯氣を出して、いつかこの男にうんと飲まして見よう、さうしたら如何になるだらうとかねてから楽しみにしてゐたのであつた。臆してゐる山崎を促して二階に通りながら一つの室に向ひ合ひになつて座を占めると、愈々その時が來たと岡見は子供のやうになつて心の中で手を拍つた。そして巧みに盃を強ひた。察してゐた通り彼は酒は嫌ひでなかつた。二三杯は辭してゐたが、やがて自身で徳利に手を出すやうになつた。一二度はハツとした様にその手を引き込めてもゐたが、終には

公然とさし出して来た。見るともう全身真赤になつて、どうにも身體の中心が取れぬらしく、右に左にふら／＼しながら兩眼は眠つたやうに細く眼尻が垂れて、例のへらく／＼笑ひのみ一層冴えて来た。可哀相に、飲み馴れぬからもう參つたナ、と思ふ頃には岡見自身もかねての願望を達した安心と共に彼に劣らず酔つて来た。

話はいつとなく「をんな」の話で持ち切るやうな事になつた。そんな馬鹿話に興味を持たぬ岡見ではなかつたが、その日は特に一方の氣を引いて見る興味が手傳つたので、一層面白さうにげらく／＼と笑ひながらうまく調子を合せた。そして内心驚いたのは山崎がその道にかけて明るい事であつた。かなり詳しいと自任してゐる岡見すら知らぬ種々の事を彼は知つてゐた。これは驚いた、これは如何して、などと誇張でなく驚いてゐる先輩の前でその夜も例の小倉服一着の彼は思ひも寄らぬ精力を出して火の玉のやうになつて饒舌りたてた。はては銚子を持つて来た女中どもまで其處に笑ひ轉げて、涙を流しながら、

「まア、この人は！」

などと泣く様な聲を出して彼の背を撲つた。その度ごとに彼は恰度小野道風の繪に描いてある蛙の様な恰好でびよん／＼と座蒲團の上に坐りながら躍り上つた。

それを見てゐた岡見はまた一つ新しい悪戯を心に企てた。そして、急に、

「オイ、歸らう、もう遅いぞ！」

と立ち上つた。

呆氣に取られた様に岡見の顔を見上げてゐた山崎は、それでも溢々立ち上つた。そして店を出離れるとすぐ岡見の肩に兩手でつかまりながら、急に改つたやうな感謝やら、愚痴やらを述べてゐたが、それでも電車の遠いには氣がついたらしい。頻りにまだか／＼と訊いてゐた。直ぐだよ／＼と答へながら鼻唄か何か唄つて行く岡見の足もとも少しも定らなかつた。そのうち急に明るい賑かな街路へ出た。すると、岡見はその時までも肩にもたれて眠つてでもゐた様な相手を起して、

「オイ、斯んな所へ出たぞ、此處は一體何處だ!？」

山崎は起された身體を真直ぐにして急に四邊をきよ／＼と見廻してゐたが、其處は狭い街路を挟んで洋風まがひの大きな建物が押し並んでゐた。そしてその建物の店さきへは幾枚となく女の寫眞の大きな額が懸けられてあつた。それに眼をとめると、矢庭に竦む様に五體を固めた。

「此處は、此處は、吉原ですナ！」

と言ふや否や、まるで木の倒れる様にその竦んだ身體を岡見に向けて一本立に倒して来た。と同時に、彼は岡見の胸に兩手で掩うた顔を磨りつけてオイ／＼と泣き出した。

「あんまり酷い、あんまり酷い、先生は、先生は！」

『如何したんだい、これは！』

笑ひたさをこらへて、好奇心の塊みたやうになつてゐた岡見は膽を潰した。餘りに豫期しないこの光景だつたからである。

『あんまり酷い、あんまり酷い！』

そのうちにも山崎は立て續けに悲鳴を擧げた。

そのうち三四人の野次馬が寄つて来て二人の顔を覗き始めた。宵の口の丁度人の出さかりである。途方に暮れた岡見は矢庭に顔を掩うてゐる山崎の両手を掴むと共に、それを肩に引懸けて大門口の方へ急いだ。五十間から見返柳の側を過ぎて其儘真直ぐに電車の方へ出ようとする時、その時までもしくくと泣いてゐた山崎が、突然、

『下駄が、下駄が、………』

と七八つの子供の様な鼻聲で言ひ出した。小倉服に下駄を履いてゐた事に氣のついた岡見が尙ほ引擔いだまゝの山崎の足もとを振返ると、成程一方だけをからんと引きずりながら一方が失くなつてゐる。

『チエツ！』

舌打をすると共に肩から両手を外すと山崎は其儘其處にクニヤクニと坐つてしまつた。それを捨て

て置いて馳け戻つて見ると五十間の中程の所を職工らしい二三人連が面白がつて互にそれを蹴合つて行く所であつた。前に廻つて岡見がそれを拾ひ上げて見ると按摩の履く様な高い足駄で、爪皮抜きに握り太の小倉緒がすげてあつた。腹が立つやら可笑しいやら、片手に高くそれを指し上げて馳け返つて來ると倒れもせず立ちもせず、舊のまゝに潰れてゐた。

『ソラ、ソラ、しつかりしろ！』

下駄を前に投り出して引起すと辛うじてそれに足を突き入れた。見ればもう泣いてゐない。前の様に手を肩にかけ様とすると、

『イエ、もう大丈夫です』

と低い、つぶされた様な聲で言ふ。その泣く様な寢呆けた様な小さな顔を見ると、岡見は耐らなくなつて失笑した。

『正氣づいたか、どうだ、もう一度引返さうか』

『イエ、もう私は、………』

『それぢアもう一杯何處かで飲まう、馬鹿々々しくつて電車にも乗れはしない』

『イエ、もう私は、………』

『生意氣言ふな！』

折よく眼の前にあつた酒場へ幾らか反抗してゐる彼を無理に岡見は引入れた。

『どうしたネ、疎葉先生、まつたく驚いたよ、随分大きな聲だつたからねエ、アノ前の家の華魁たちがみな出て来て大騒ぎだつたよ』

酒を三四杯引きかけると岡見はまた元氣ついて山崎に斯う言ひかけた。

『……………』

山崎は唯だ手を振つてゐるきり、顔をばテーブルに伏せてゐた。

『眞實に君は嫌なのかネ、何しろ淺草での勢ひが獯猛だつたからてつきり君をその道の勇將猛者ヒーローだと僕は信じちやつたんだよ』

『……………』

『まア一つ飲み給へ、悉く閉塞してしまつたぢアないか、さア、熱いのを、どうだ』

山崎は何と言はれても酒も飲まず、返事も出来なかつた。岡見だけは一時消えてゐた酔がまた急に出て来て獨りで面白くなつて來た。

『引返さうよ、折角此處まで来て空しく歸るんぢア、全く爲様が無いぢアないか』

實は岡見はもうその時は山崎は相手に無かつた。たゞ解もなく先刻からの事が可笑しくなつて獨りで悦に入つてゐるのであつた。すると、急に山崎が顔をあげた。眼は血走つてゐるが、顔は氣味悪く

蒼靨めて見えた。

『では先生だけ御いで下さい、大變失禮ですが私は此處から歸して頂きます』

『へ、え、それはまた如何いふ解だネ』

急に斯う眞面目に出られては面喰つたが、岡見の心はまだ面白さ可笑しさで一杯であつた。

『どういふ解といふではありませんが、……………』

と言ひかけると、急に彼の聲の調子が變つて來た。また泣くナ、と岡見は上目でその顔を見た。

『私は一生あゝいふ處へは足を入れないつもりなのです、あゝいふ處ばかりでなく私は一生童貞を守り度いと思ふのです、私は……………』

たうとうしくしく泣き出した。

『童貞を、ネ?』

『私は世の中の一切の男女關係を呪ふ者ですから、……………』

オヤ／＼また大變な事になつたと思ひながら椅子に身を反らすと正面が大きな鏡の壁となつてゐた。其處にはエプロンをかけた二人の少女が顔を差し寄せながらさゞめいてゐる顔が寫つてゐた。さうして鏡の上で岡見の笑つてゐる眼と彼等の眼と合ふと、急に彼等は顔を反けて笑ひ出した。それを呼んで勘定を拂ひながら、岡見は立ち上つた。

『サテ、童貞居士、歸らう、安心し給へ、今度こそ電車だよ』

山崎はまだ造作なく椅子を離れかぬる位に身體の自由が利かなかつた。岡見が側へ寄つて先刻の様に手を肩にかけようとする。危く逃げながら、

『イエ、もう大丈夫です』

と言つて、まだ泣きじやくりを止めかねてゐた。

『ほんとに大丈夫かネ、そして、下駄は！』

その次の月の十七日には来るかどうかと岡見が危ぶんでゐると、相變らずにこくししながら書過ぎにやつて來た。その日は小倉服でなく主人のを仕立て直した様な縞袴を着て來た。そして平常のバリカンと剃刀との代りに自作の小説一篇と和歌數首とを持つて來た。小説には此頃目をきめた様にして一人の少女が自分の店に顔を剃りに來る、神さまが運命づけてゐる事か、その少女の番にはいつも自分が當る様になつて來てゐる、そしてすべての運命を神の前に捧げてゐる人のやうに安らかに眼を瞑ちてその幾十分かの生命を自分の手に委ねてゐる姿を見ると自づと自分も神の様な心にならざるを得なくなる、然し、どうかした拍子にその豊かな薔薇色の頬や、しなやかな首筋を見ると、ぐさとばかりに手にした剃刀の鋭い刃先を突き立てずには置かれぬ様な心にもなる、此頃自分はこの二つの

異つた心のために次第に精神と肉體との衰弱を感じつゝある、といふ風のものであつた。歌は、斯うした夜更にあなたの家の前に來て立つてゐると何處に寝ておるるか知らないがあなたの寢息がたしかに自分の頬に觸れるのを覺ゆるといふものや、ふところ手をしてゐる自分の指さきがいつとなくあなたの乳の動悸に觸れてゐる様な感じに變つてゆくといふものなどであつた。苦笑しながら讀んでゐる岡見の顔には氣もつかぬ様子で、自分は久しく怠つてゐるが、これから少しは仕事の方も際になるしするから熱心にまた文學をやつて見るつもりだ、何と云つても自分の一生の眞實の仕事は其處に在る様だ、などと語り出した。そしてその日から今までは固辭してゐた岡見の晩酌の盃を受けてゆく様になつた。自然と口數も多く、歸つてゆくのも夜が更けてからになつた。

岡見は内心淺草に連れ出した事を後悔せずにはゐられなかつた。その日以来、山崎の岡見に對する態度が急變してしまつたのである。今までは迷惑な位に自分を先輩扱ひにしてゐた彼が急に友達扱ひにする様になつた。それも多くは自分の店にでも居る朋輩づきあひといふ風の態度であつた。話題も急に變つて多くは下卑た、それも女の噂が多くなつた。女の話と云つても彼の持つてゐる材料は縣廳時代の惚氣に、東京に來てからのものでは彼の店に顔を剃りに來る二三の女と、店の細君との二つしか無かつた。それらを聞いても彼が縣の教育會から派遣されて幻燈を持つて廻つた事はよく、彼にとつて得意の時代であつたらしい。何村小學校の女教員がどうしたとか、何々校の校長の細君がい

い年増の癖に斯うしたとか、それを話し出すと相手の聞く聞かぬに係らず彼は獨りで夢中になつた。馬鹿々々しいとは聞きながら、蓮葉な女などには可愛がられさうな色白の小柄な小ましやくれたその顔を見てゐるとまんざらの作り事でも無かつたらうと岡見もツイ釣られて微笑む事などあつた。

そのうち山崎が岡見を訪ねてから三度目の春が廻つて來た。殆んど毎月缺かさずに訪問して來たものが、次第に間を置く様になつた。岡見の宅ばかりでなく、麴町の神さまの方へも段々疎遠になつた様子である。或日、三月目で夕方かけて例の通りにや／＼しながらやつて來た。

『どうした、大分足が遠退いた様だネ』

『どうも濟みません、いつとなしに店のお馴染が殖えて、この十七日には待つてる、家内中のを一寸やつて呉れなどと仰有る方が出来るものですから、ツイどうも……………』

『それは結構だ、それで、彼處は如何だネ、富士見町の神さまは？』

『あちらへも隔月位るになりました、どうも忙しいものですから……………』

『他に増す神が出來たつて云ふわけだネ』

『へ、へ、』

と笑つてゐた。その日、平常の通り酒を持ち出して勧めたが、にや／＼しながら彼は盃を取らなかつた。岡見は皮肉な眼でその顔を見てゐたが、

『山崎君、君顔色が悪いネ、病氣か？』

『へ、へ、實は少しばかり』

『さうだらう、眼がどんよりしてる、どつちだ、「うめ」か「さびしきか」か？』

『え？』

『わからないネ、スベかゴノか』

『アノ……………』

『梅毒か淋病か？』

『へ、へ、ソノ、後者です』

『後者ですか』

ハ、と兩人とも笑つた。そして笑ひついでに、

『到頭破つたネ、例の一生の童貞を！』

と岡見は何氣なく言つた。すると、急に眞面目になつた山崎は岡見の顔を氣味悪く見詰めて、

『い、え、それは決して破りません、それは破りませんが……………』

岡見が嘲笑ひながら何か言はうとすると、掩ひかける様にして早口に、

『破らなくともこの病氣に罹る者は澤山あるさうです、醫者がさう言ひました』

といかにも訴へる様な顔をして言ひ足した。岡見もそんな話を聞いてゐないでも無かつた。

『と、すると、君のは自己流の結果か』

『マ、さうですナ、へ、へ、』

岡見はその卑しい笑ひを見ると、胸の悪くなる様な不快を感じた。そして手痛い罵倒をしてやらうとその文句まで頭に浮んだが、口に出すのも汚なかつた。

今まで自宅で原稿を書いたのみ暮して来た岡見は終にその貧乏に耐へかねて或る新聞社に勤むる様になつた。朝は十一時頃に家を出て、夜歸るのは十一時十二時若しくは一時二時であつた。従つて山崎と顔を合せる事も殆んどなくなつた。そして妻から彼の噂を折々聞いた。其頃彼は主人と共に神田から本所の方に移つてゐた。主人が變人であるために段々得意が減つて神田の店をば持ち切れなくなつたのださうだ。本所の店は前の半分もなく、三人居た職人も彼一人となり、居間も二階一間、階下一間しか無い家と變つた。それは兎に角、彼自身の更に弱つた事は此頃頻りに郷里の父から彼の歸郷を強請して來ることであつた。初め上京して來た時、まる三年だけ見逃して置いて呉れる様にといふ願ひを彼からも、また彼の頼みで岡見からも、その二人から頼んで太田からも口をきかせて、辛うじて頑迷な老爺を納得させたのであつた。その三年にはあとまだ一年あるのであるが、待ち切れなくなつたと見えて、山崎自身にも、稀には岡見に宛て、も催促や愚痴の手紙を寄越すやうになつた。弟や妹

達をば他へ出してあるし、家も太田の持家を——もつともそれは小さな物置であつたのだ——貸してあるし、さう困るわけは無いのだが、と言ひながら山崎は流石にその手紙を見るごとに臆病な胸を痛めてゐた。唯だ打ち捨て、置くが、い、といふ岡見の勧めをも用ゐかねて、その度ごとに何彼と返事を出してゐた。そのため、父の方ではいい氣になつたと見えて、一層頻々と手紙を寄越す様になつた。それも殆んど郵税先拂のものであるのださうだ。岡見にも一度それが來た。

『けふ弱りましたよ、山崎さんに一時間ばかりも泣かれて』

或夜歸つてゆくと岡見の妻は言ひ出した。その日山崎はいつもに似ず浮かぬ顔をしてやつて來て、やがて懷中から取り出したのは二十通餘の封書であつた。それは悉く郷里の父から來たもので、山崎は岡見の妻を相手に一々それを讀み出したのださうだ。

『そしてその間すつかり泣き通しなのですよ。初め可哀想だと思つてゐたけれど後では氣味が悪くて困つた』

その手紙には今日で幾日絶食してゐるとか、そのため役所で書く字を誤つて課長から蹴られたとかいふ事を書いたのもあるし、孝行の道を盡さずば何々といふ風のものもあるし、どうしても歸らないなら寧ろ餓死して永遠にお前を恨むに如かずとかいふ事を書いたのもあつたさうだ。因循で貪慾な、頑固で我利一天張のさうした漢學者のなれのはてを心に描いて、岡見は苦笑した。け、妻のいろ／＼

言ひかくるのに返事もせず、その夜は寝てしまった。

その次の月、都合よく岡見と山崎との休日と一緒に来た。岡見はそれに気がついて、特に前日山崎へ葉書を出して、心待ちに待つてゐると、書過ぎになつてやつて来た。この頃持つて来なくなつてゐた手土産を持ち、剃刀をも持つて来た。縁側で鬚を剃らせてゐると、今迄になくその調子がいゝ。岡見も嬉しく思つた。

『もう大丈夫だ、一軒持てるネ』

と世辭でなく言ふと、

『へゝゝ、まだくゞ駄目です』

とは言ひながら山崎も心から嬉しさうに笑つた。

岡見の妻も氣を利かせて夕食の膳を賑かにした。病氣も癒つたと云つて山崎も久しぶりに酒を飲んだ。が、矢張り何處となく沈んでゐた。そして耐へてゐた様にして袂から四五通の手紙を取り出した。そして、それを手に持つて何か言ひかけやうとするのを岡見も待つてゐた様に直ぐ手を振つて止めた。『もういゝ。見なくとも僕には解つてゐる。若し君が郷里に歸つていま習つてゐる藝で親爺さんを立派に救ふ見込があるなら歸り給へ。でなくして若しまた昔の通りの腰辨にでもなる氣なら全然僕は反對する、今までの君の苦心が水の泡になるぢアないか。白髪三千丈の亞流だけに君の親爺さんの確

かに誇張だよ。よし誇張でないにしろ、今の場合その位ゐるの苦痛を忍ぶのは親として當然の義務ぢアないか！』

岡見は心から激してさう言つた。例によつて俯向いてゐる山崎の顔からはまた涙が落ちて来た。苦々しくそれを見ながら尙ほ岡見は、

『況して自分の子の奉公してゐるさきへ毎日そんな先拂郵便を寄越す様な親なら僕だつたら態とも酷めてやるよ』

とも言つた。そして、

『第一、君のそのめそくゝがいけない、それをやめないから親からさへ馬鹿にされてゐるのだ！』とも言つた。

山崎はたうとう両手で顔を抑へた。たまりかねた様に次の室から岡見の妻が出て来た。岡見もそれと氣がつくと獨りで苦笑した。そして急に調子を變へて、

『まア止さうネ、それは君としては無理もないだらう、でも僕には以前からさうした……』

と言ひかけて、

『サ、一つ乾し給い、少し言ひ過ぎて悪かつた、あやまるよ！』

さう言はれると山崎は一層強く顔を掩うたが、漸く涙を拭いて盃を受取つた。そして、こちらにお

伺ひしてゐる間は自分もその氣であるが、店に歸つて棚に載せてある手紙を見るとまた急に心細くなる、と切れ／＼に言つた。

『僕の意見は要するにそれだけなんだから、親爺さんの問題は今後君ひとりの考へにして置いて呉れ給へ、そして兎に角いまだ少し確固するのだ』

と言ひながら、相手の何か言ひかけるのを遮つて、急に岡見は笑顔になつた。

『どうだネ、本所は。剃りに來る新しいのが出來たかネ』

山崎も仕方なしに笑ひ出した。

岡見の妻は暫く側にゐて彼に酒を強ひた。量の深くない彼は間もなくころ／＼と酔つてしまつた。そしてやがて持ち出されたのは例の「女」の話である。

『どうも困りますよ、自宅の内儀さんにも！』

『どうしてネ』

『どうしてつて貴下、店を閉つてから私だけは大抵毎晩一時間か二時間位起きてゐて何か書いたり讀んだりするんですが、サテ寢ようと思つて二階から便所へ降りて行くと、内儀さんだけ眠つた風をしながらこれ見よがしに……』

酔つてはゐるても妻の手前、淺草で知つてゐるので岡見も彼の斯うした話に當惑した。さうして如何にもわざとらしく團扇を使つて、眼顔でそれと注意したが、涎でも垂らしさうな相手には一向通じなかつた。

『それかと思ふとまた不行儀千萬にも私が其處を通るのを知つてゐて枕もとに汚ならしい……』

『オイ／＼、大抵にしないか、もう解つたよ』

と言ひながら、岡見は山崎の顔を突いた團扇で次の室を指した。

『ハッ！』

と言ふと首を縮めて彼は自分の頭を両手で抑へた。

程なく彼の歸つたあと、耐へてゐた様に岡見の妻は笑ひ出して、やがて食卓を片附けながら、

『山崎さんはその内儀さんと如何かしてゐるのではないでせうか』

『馬鹿な、その勇氣があつたら先日からの病氣なんか爲やしないよ、馬鹿奴が！』

と投げ棄てる様に言つて岡見も笑つた。

それは近年になかつた暑さが過ぎて、漸く涼しくならうとする頃で、それからまた暫く姿を見せなかつた。そしてその次に來たのがその歸國の暇乞の時であつた。

子供たちをば戸外に追ひやつたが、枕許に落ちてゐる電報が氣になつて、幾ら力めても矢張り岡見

は眠れなかつた。そして頭が次第に痛んでゐた。いつその事散歩でもして見よう、と思ひ切つて彼は起き上つた。そして妻の留めるのも聞かずに、ぶらりと戸外へ出た。

歩きながらも頭にあるのは、轢死した男の事であつた。郷里に歸つたところで費用からまた技倆から一軒の店を持つといふ事も急には出来まいし、持てばまた喜んで通知してよこすだらうが、その來ない所を見ると何處か他處の理髪店に職人に入り込んだとか、まごまごすればまた昔のまゝの役所通ひを始めたとか、いづれそんな所に落ちてゐたに相違ない、と彼は歸國以來一度の葉書すら寄越さなかつた故人の事を考へた。そして例の父や家族、または昔の同僚たちからはソラ見ろ、さまア見ろ、と罵られ、それかと云つて例の小心からそれ等を振切つて上京して來る勇氣もなく、せつば迫つて線路に飛び込んだのだ、と眼の前に見る様にさうした彼を心に描いた。と同時に眼に浮んだのは彼の死し態であつた。

岡見の住んでゐるのは東京の郊外で、家のツイ傍には伐り残された小さな櫟林があり、その林の蔭をば山の手線の鐵道が通つてゐた。汽車はいま貨物列車だけしか通らないが、電車は間斷なく走つてゐた。そして其處で丁度線路が曲つてゐる上に林の蔭の暗みがあつたりするためか、よく人が飛び込んだ。岡見がその家に越して來て以來、まだまる二年と経たぬのに、もう其附近僅か一丁足らずの間で男女五人からの轢死があつた。一度はいままたあつたといふ話を聞いて、岡見も急いでその場へ行

つて見たが、屍體は既に片附けられて跡掃除の砂利をならしてゐる所であつた。カンテラの灯が動いて、がらく、ざらくと掻き均らされる小石の音ばかり起つてゐた。その次の時はまだ夕闇のさう深くない頃であつた。自分の室で食後のたるい身體を休ませてゐると、走つて來た一つの電車が、急にギイイといふ響を立て、停つたのを聞いた。何か起つた、と思ふと同時に彼は家を飛び出して一丁と距つてゐないその場所へ馳けて行つた。櫟林を馳け抜けて、一間ばかり小高くなつてゐる線路へ飛び上ると、丁度車掌と運轉手が身體を屈めて何物かを抱き起してゐる所であつた。何の氣なしにその前まで走り寄ると、一個の人間が——その場では男女の見わけすらよう爲なかつた——抱き起された。そして首から上と肩の一部とがだらりと胴から離れて眞赤に染りながら、岡見の前にむき出しに轉けて來た。思はず後へ引かうとして彼は小石につまづいて横向きに這つてしまつたのであつた。その時に見たその慘らしい、汚い屍體、その記憶が「山崎轢死す」の電報を見るとまた鮮かに彼の胸裡に蘇つて來てゐたのである。歩きながら靜かに種々の事を考へて居ると、一層それが明瞭になつて來た。そして眼の前にさうして死んでゐる見も知らぬ死人の面影が何だか山崎その者でもあつたかの様にさへ思はれて來た。そしてその醜汚な幻影を見まいとして彼は歩みを停めて身ぶるひをしたりした。そして、

『馬鹿奴、到頭あんなになつたナ！』

と心の中で幾度か呟いた。

翌日の新聞で、主人の金十七圓ながしを遺失した、めに自から轢かれたのだと知つたその夜の轢死者——丁度二十歳の若者であつたさうだ——に對してすら彼は一片の同情をも憐憫をも感ずる事は出來ずにたゞ侮蔑と苦笑とを覺えたのみであつたが、それと同じ様な自殺法をとつた自分の親しく知つてゐる男の死に對しては、更に一層の嫌惡を感じずには居られなかつた。その下劣な家族共と共に『さまア見ろ!』と言ひ度い心をすら覺えたのであつた。何といふ理由があるわけではなかつたが、女の腐つた様な、牛甲斐もない人間の様に見えて平常から侮蔑し切つてゐたその性情、特にその意氣地無しに對して、彼は彼自身の性情から自然とさう感ぜずには居られなかつたのである。

電報が來てから四日目の夜であつた。岡見は勤め先の新聞社から寒さに凍えながら歸つて來て、茶の間の火鉢の側に突つ立つたまゝ、口早に、

『今日來た郵便は?』

と妻に訊いた。妻はツイ側の茶箆筒の上に置いてあつた二三の郵便物を彼に渡した。二度ほどその差出人を調べて見て、

『これだけか?』

とまた訊いた。

『え、……………、何故?』

と不審がる妻には返事もせず、漸く安心したといふ風に初めて其處へ腰を降して、

『やれ〜助かつた、遺書は來なかつたよ!』

と眞實安心したといふ聲で言つた。

『眞實ですなエ、來れば今日來るわけなんですか?』

『さうサ、飛び込んだ晩に出したとすれば遅くとも今日は着くんだ、何しろ助かつた!』

『明日あたり太田さんから詳しく知らして來るでせう』

『なアにが!あの男から何が來るものか、先日の電報が全部よ!』

と言つて岡見は笑つた。太田の筆不精は有名なもので物心がついて二十年餘りも交際つてゐるが岡見はまだ彼から封書一本受取つた記憶がなかつた。大抵は郵便局で書いた様な葉書のみであつた。それすら年に幾度も來るのではなかつた。

その翌夜であつた。彼は遺書の代りに五六枚を一緒に封じ込んだ新聞紙を受取つた。帯封の裏には何も書いてなかつたが、疑ひもなく太田俊一の手蹟であつた。

『來たナ!』

と思ひながら惶しく開いて見ると、書きも書いたり、三面の最上段に初號活字の見出で、

『青年理髮師の自殺!!』

として、それに添へた小見出には、

『屍體滅茶々々の轢死!』

『結婚後三日目の慘事!』

『軟文學の悪感化!』

と書き並べ、更に鋭く彼の眼を惹いたのはその中見出として、

『岡見落葉』

と二號活字で彼自身の姓名の出てる事であつた。

思ひもかけぬ自身の名を其處に見出したので岡見は一層周章へた。而して忙しく眼を走らすと、事ごとに彼は驚くの外は無かつた。

山崎はS——町に歸ると直ぐ町内に彼自身の理髮店を開いたのであつた。そしてそれに自身の雅號である疎葉を冠らせて山崎疎葉軒と命名した。「知人富豪太田俊一氏及び縣廳奉職中の先輩某々氏等の後援になりし事とて店構へも町内有數の美々しさにて、殊には東京型最新流行の理髮振人氣に投じ……」瞬く間に職人二人を置いても間に合はぬ繁盛を呈したのださうだ。そして半年も経たぬうちに

開店當時の借財をも大半返却し、去る××日世話する人があつて彼の父と同藩士なるR——町某氏の女、美人の聞き高き△△子を迎へて華燭の典を擧げた、とも書いてあつた。更に「斯く人生の黄金時代とも謂ふべき最得意の時に於て何が故に斯る悲惨極る自殺を遂ぐるに到りしか死人口無うして探るに由なしと雖も……」と書き進み、「同人は數年前縣廳奉職中より文學を愛好し、殊に上京後はデカダン詩人岡見落葉の家に出入して一層その趣味癖に耽溺したる形跡あれば不知不識岡見等の悪感化を蒙り、現代流行の厭世思想の毒汁に刺され……」斯る思ひもよらぬ悲惨事を生むに至つたのだらうと推定してあつた。そしてその證據として慘事のあつた附近には一丁の西洋剃刀と一冊の書籍、それは伊國大文豪ダンヌンチオ著「死の勝利」とが發見せられたのでも解ると書いてあつた。「決行は一昨夜××時終列車通過に於て爲されしらしく、終列車が轢死人ありしを氣づかで過ぎし跡を昨曉××時發一番列車が更に轢き直したるらしく……」頭も胸も手も足も殆んど原形を留めぬまでに散々に轢き散らされてあつた、とも書いてあつた。さうして終りの方の家人談といふ中には自殺した日の朝、新婚後三日目の妻△△子は急用があると云つて郷里へ向け出立し、先程電報を打つた所だといふ事が書いてあつた。S——町で發行せらるゝ新聞は二種あつた。一方は平常から同縣下出身の岡見に故のない反感を持ち、一方は文學種を多く載するだけ好意を寄せてゐた。その後者の方には山崎の歸つた事を土地の文學好の青年たちが宛然「洋行から歸つた博士を迎ふる様に歓迎し、疎葉軒は一

面彼等の俱樂部然たる觀を呈したり」と書いてあつた。

歸つて來れば餓ゑたる者の様にして飲み始める酒にも手をつけず、夢中になつて見馴れぬ新聞に讀み入つてゐる岡見の顔を不思議さうにその妻は見てゐるが、やがて彼の背後に立つて行つて自身もその新聞を覗き込んだ。そして、

『オヤ！』

と言つたまゝ、同じく息を飲んで讀み始めた。岡見が二三度讀み返して、漸くそれを投げる様にして下に置くと待ち兼ねた様に彼女は言つた。

『い、迷惑ですネ、悪感化だなんて！』

その聲には憤怒が燃えてゐた。

『……………』

『御郷里おぐらの阿母さんたちだつて大迷惑だわ！』

『ウン、町中の評判になつてゐるだらうよ』

とは言つたが、他に何かを考へてゐるらしく、その聲には何の力も無かつた。そして初めて氣がついた様にして眼の前の盃を手にとると、ぐつぐつと一息づつに飲み乾して行つた。

夫婦の間にはこの意外な上に意外な出來事、山崎が開店してゐた事、それが盛つてゐた事、結婚し

てゐた事、結婚後三日目であつた事、ダンヌンチオを持つて死んだ事、等に就いてそれから永い間ひそひそと談話が交はされた。何もひそくとするには及ばない事だが、何しろ事が事であつた。それに夜が更けてゐた。彼等の頭上の柱時計は夙うにもう二時を打つてゐた。

『だつて、なぜ死んだのでせうネ、何もそんなだつたら死ぬには及ばないぢアありませんか？』

『サ、俺もいまそれを考へてゐる！』

いつもなら夙うに上機嫌になつてゐるねばならぬ筈の岡見にはまだ少しも酔が見えなかつた。平常二日分づつ取つて置く酒はもう残り少なになつてゐたのだ。實際、彼はいま何とも名狀しがたい一種の衝動に似たものを全身に感じてゐる所であつた。

『窮死！』

それならば何の問題でも無かつた。て、つ、き、り、それだとのみ信ずればこそ、彼等は、特に彼はこの知人の死を限りなく侮蔑してゐるた。が、事實はそれとは正反對の、まったく思ひも及ばない事であつた。

『と、すると！』

彼は心の遠方に、ずっと以前に見た幻燈會場に於ける故人の光り輝いた小さな顔の浮んでゐるのを見た。斯うした人間はその得意を極めた時に於て時に特殊な心理状態に陥る、それであらうかと思つ

たのである。店は繁昌する、金は出来る、文學者としては持て囃さるゝ、使はれてゐた身が忽ちに他
 を使ふ、美人は来て添ふ、何として得意にならずに居られやう。況してそれが彼の山崎ではないか！
 『然うしてふらくと線路に行つて立つたのかも知れない！』

さう考へてゆくと岡見は知らずく自分の胸の迫つて来るのを感じた。熱い涙が臉の蔭に一杯に來
 て溜つてゐるのを感じた。と同時に、何といふことなく、『濟まなかつた、濟まなかつた！』といふ
 力が胸の底から押し上つて來た。

『さア、お寢みなさい、今更考へたつて爲様がないぢアありませんか！』
 斯う妻に促されると、

『ウン！』

と言つて岡見は從順に立ち上つた。そして便所に行つた。

長い便所から歸つて來ると敷き並べた床の上にぼんやりと立つたまゝ、帶をも解かうとしなかつた。

『オイ！』

突然彼は妻を呼びかけた。待ち兼ねた妻は彼より先に既に床についてゐた。

『エ？』

といふ彼女の返事は蒲團の蔭であつた。

『奴の死ぬる朝に細君が郷里へ歸つて行つたのをお前は何と思ふ！』

返事は無かつた。岡見のさう言つた聲がいつもの酔つたのとも違つた怪しい調子であつたので、妻
 は多少驚いたのであつた。

『結婚後三日目だけ、里歸りといふにも二十里からの所をさう早々に出かくるわけが無い！』

『だつて、…………』

とは言つたが、彼女には愈々答ふる術が無かつた。

『俺は彼奴を「不能」だつたらうと思ふ！』

『まさか！』

と言ひながら蒲團から全く顔を出した彼女の顔には、やりと笑ひが宿つた。

『でないとすれば烈しすぎたんだが、どうも俺は不能だつたらうと思ふ！』

片手に帶を擱んで、まだそのまゝ立つてゐる彼の姿は酔つた時によく見馴れた形ではあつたが、そ
 れとも確に何處か違つてゐた。

『馬鹿々々しい、どつちだつてい、ぢアありませんか、死んだ人の事を！』

『イヤ、不能だつたとすると……………！』

岡見は今度は妻とは反對の側を向いて床の上へ坐つてしまつた。そして言ひ繼いだ。

『俺は何だか大變悪い事をした様な気がしてならない！』

眞實、さう言ひながら彼の胸には「悪かつた！」とも「濟まなかつた！」とも「いぢらしい！」ともわけの解らぬ感情が一杯にこみ上げて來てゐたのであつた。(天正七年十二月十二日)

老人

殆んど一面が白い小石の原となつた川岸まで出て來て見て、自宅の二階で毎日眺めて想像してゐたより遙かに水の瘦せてゐるのに見海老人は驚いた。淺い水がそれでも清らかに流れてゐる流の底まで一杯に小石が敷き詰つてゐるのだ。以前の滑らかな岩底とは大した違ひだ。

『これでは成程鮎もゐない筈ぢア、第一喰ふ苔が無いわい』

老人は斯う心の中で呟いた。

よし川底が小石の原とならなかつた前としても今は既う十月の末、どんなに遅れた鱧鮎だとして居る解はないと承知してゐながらも、徒然な餘りに毎日二階から眺めてゐると、その日光にきら／＼と輝いた流のなかに、例の滑らかに瘦せた敏捷な魚の友を追うて遊んで居る幻影が眼についてならなかつたのだ。で、どうかして一度その川端まで出かけてこの一二年見ずに過した魚の姿をつくりと見たくて爲様がなかつた。が、三四丁の坂路を降りて其處まで行く事は、二年越床に就いてゐる漸くこの一二ヶ月家の周圍などを歩行する事の出來る様になつた彼にとつてはなかくの冒險であらねばなら

なかつた。

この夏、まだ鮎の釣れる頃わざ／＼二階の窓際に椅子を置いて、

『ア、釣つた／＼、誰かナ、榮ちやらうの』

と誰もゐない廣い座敷で獨言を云ひながら殆んど毎日眺め暮した時から我慢して川までは降りて行かなかつた。病氣の爲ばかりでなく老いて既に白くなつた指頭に微かに釣竿の震へを感じながらも、ぢつと耐へてゐた。それがこの二三日來、誠に穩かな小春日和が續くと共に酒から出た中風病の彼の身體すら近頃珍しい快さを覺えた。久しく忘れてゐた様な痛さ痒さが快く身に感ぜられて來た。言葉少ない彼はひそかに心の中で喜んだ。この分では俺ももう一度はよくなる、さうすると……、といふ様な一度はきれいに諦めてゐた希望が自づとまた心の底に起きて來た。さうした種々な事が急にこの老人を元氣にした。そして今日ツイふらく／＼と來るともなくその川原まで來てしまつたのであつた。

水底の小石は此頃久しく水の出ないためにみな一様に水垢を被つてゐた。それらの上をいだの子や鮎やあぶらめなどの小さな魚が水を透して射して來る麗かな日光を帯びながら徐ろに泳いでゐた。斯う川が石原になつてしまつてはいづれもうこの壺谷川にも鮎の上つて來ぬ時が來るだらう、と見海老人は圓やかな手近な石に腰を下してそれらの小魚の影をぼんやりと見やりながら考へた。近年この川

上の山から山を橋の深いに任せて濫伐した結果、村の人の會て聞いた事もない大洪水が一二度打ち續いて押し出して來たのであつた。今まで到る所苔蒸した岩石ばかりから成り立つてゐた壺谷川の川底が一時に小石原と埋つて了つたのはその時からである。從來荒い瀬と深い淵との連続であつたこの谷川は大きな鮎の多く棲むので聞えてゐた所であつた。

廣い川原には一面に陽炎が立つてゐた。鶺鴒が二羽、川原に飛び水際に移りして遊んでゐる。老人の白臘の様な頬には少女にでも見る様な薄紅がさしてゐた。頭はまる／＼と剃られて、鼻の下の濃い髻も短く刈り込んであるが、それは雪の様に純白であつた。老人の家は代々醫者であつた。見海醫者もこの山の中には惜しい名人として近郷で立てられてゐたのである。彼の上品な目鼻立が語つてゐる様に彼は極めて溫和な謹直な性質を持つてゐた。が、唯だ病的な位るに酒を嗜んだ。「あん醫者どんに、酒ちうもんがなかつたら喃」と村の人の全てがこの何十年か嘆き通して來た程酒の上では彼は怠けもし、失策つてもゐた。そして終にそのために一昨年秋から半身不隨の様な身體になつてゐたのである。

老人は珍しく自分の五體の汗ばんでゐるのを感じた。家に歸るにしても、少し休んで行く日蔭が欲しかつた。杖を取り直すと彼は其處の路續きに架けられてある小さな橋を渡つて行つた。さほど大きくもない木を二本並べて僅かに表面を削り均らしただけの橋を渡る事はかなり不安ではあつたが、

子供の様な勇氣で彼は微笑しながら渡つて行つた。其處は水際から崖になつてゐて、日蔭ではあるが上から滴り落つる雫のために一寸老人の腰掛けさうな所がなかつた。老人は路を歩きながらでも折々する様に杖の上に両手を重ね、その上に軽く自分の脛を置いた。これでも多少の休息は取れるのであつた。

川に向つてさうして居ると、自づと彼の眼には向側の坂上に並んだ自分の家を初め五六軒の百姓家が見渡された。彼自身開けすてて來たままに二階の障子はあいてゐて、強い西日に赤々と照らされてゐる。「今年は梅檀の葉の散るのも例年より遅い様だ」とその門口に黄いろく染つて立つてゐる大きな樹を眺めながら彼は考へた。收穫に忙しい時なので、いづれの百姓家もみな戸が閉して、寂然として居る。自分の家でも今日妻の留守なことを彼は思ひ出した。

其處へ彼の頭の上から牛か馬を叱る様な聲が聞えて來た。彼の佇んで居る崖上の森の中に一軒家があつて、其處には彼の若い時からの飲仲間が居るのであつた。

『八隠居は今日は家に居ると見ゆる。』

見海老人は杖から脛を離しながら見上ぐるともなく崖の方を仰いで、呟いた。そして、此處まで來たのだから一寸寄つて茶の一杯も飲んで行かうかと考へた。暫く考へた後、一歩々々と數へる様にして崖に沿うたや、急な坂路を登り始めた。

『んた、まア！醫者どんなア！』

老人が杖をつき、その森の中の百姓家の廣い庭に辿りついた時、厩の前に立つてゐた其家の老婆は逸速くそれを認めて喫驚しながら斯う叫んだ。そして両手して抱いてゐた枯草の束を其處に投げ出すと老人の方に馳けて行つた。

『お前やまア、如何したとのえエ！』

老人は齒のない口を噛み締めながら、顔中笑つて無言にそれに答へた。そして、杖を両手に持ち直しながら、眼を瞑ぢて腰を伸ばした。

老婆は周章へながらも一番手近な縁側の上を両手で叩いて塵を拂ひ、老人を連れて行つた。そしてなほ呆れたまゝ、一二尺も離れぬ程近く寄つて老人の顔をまじりと見詰めて立つてゐた。老人は言葉少なに、あまり氣色がいゝので川端まで降りて見た事を話して聞かせた。そして、

『今日は、……家か？』

と四邊を見廻した。

『否ネの、矢張り山ばい、そつてむ、今日は早う歸るち言よらしたかる、もう直きぢやろばい、……まア、そつてむ、善うこす喃、此處まぢも來るごつならしたわ喃！』

老婆はさう言ひながら自づと湧いて来る涙を禁むる事が出来なかつた。老人はまだ赤い頬をしながら、老婆の足許の地面を見詰めてゐるが、あてにして来た相手のゐないのに落膽もし、先刻の聲を聞き違へた事を苦笑もした。

老人のいかにも疲れた様に黙つてゐるのを見ると、老婆はまた惶しく涙を拭ひながら家の中に入つて行つた。そして内から老人の腰掛けてゐる背後の障子をあけて、

『マ、こつち上らつしやり、いま、火を焚くわの』

『ウム、まア、構はじ置け、直き歸るわ』

『マ、そつでむ、茶を一杯飲うぢ行かつしやり、隠居ももうぢき歸るわの』

老婆はまだうろ／＼する位の驚きが止まなかつた。それでも板敷の茶の間に産を敷いて、大きな圍爐裡に火を焚きつけた。

『サ、上らつしやいよ、いま直き湯が沸くわの』

老人も茶は欲しかつた。そして、久しいこと坐つて見ぬ其處の正座であつた。身體をねぢ向けて疊一枚敷よりもまだ廣さうな圍爐裡を眺めてゐるが、やがて這ふ様にして縁から上つてその産の上に行つた。そんな場合でも膝一つくづさず、きちんと正座した老人を今更の様に眺めながら、また老婆は眼を拭いてゐた。

『眞實嘯、善うこすさうしち其處に來て坐つて呉れさしたわ嘯、隠居が歸んで來て、どんげまア喫驚するこつか！』

老人は煙草が欲しくなつたのであつたが、家を出る時持つて出なかつた。で、無言のまゝ、兩手を膝に置いて湯の沸くのを待つた。枯枝を一抱へ持つて來て焚きつけられた鑪子の湯は、それでも程なく音を立て始めた。その間に老婆は土間に降りて味噌漬の柔かさうなのを取り出して皿に盛つて來ておきながら、茶を入れた。さも旨さうに老人が首をちぢめて湯氣を吹き／＼飲んでゐるのを見てゐる老婆は、半分立ち上りながら同じく齒のない顔で笑つた。

『如何爲うかい嘯、一杯沸かそかいの』

『ウ……、酒か？』

『一杯ぐれなら可かつどがの、お末さんもさう云うちよらしたが、お前やあそげ病うし寝ちよらした時も毎晩飲ましたげなぢア無エのえ？』

『ウ、少つとつア飲まんと俺が身體は保てんわ……』
と返事をしかけて、

『でむ、今日は止めう、飲むと、歸ねんわ』
笑ひながら言ひ足した。

『何が喃、いまに隠居でむ清八でむ歸んで來たらお前宅まぢ背負しち、やるが喃、まア一杯飲うぢ行かつしやり』

茶で咽喉をうるほすと、さういはれずとも實は老人も飲み度かつた。久しぶりの運動と出歩いて見た満足とで、常にもまして飲みたさが萌してゐたのだ。彼はものも言へない位重態で寝てゐた時でも一二杯の酒をば每晚缺かさなかつた。醫者も家族も、これ程に好きなものを一二杯位るは毒でもあるまいと云つて強ひてそれを禁めもしなかつた。それにはまたとても駄目なものならあれ程に云ふものを飲ませぬのも不憫だといふ意味が含まれてもゐるのであつた。十中八九駄目だらうと同じく醫者で隣村に開業してゐる彼の弟すら見離してゐた彼の病氣は、豫期に反してそれこそ薄紙を剥ぐ様に次第によくなつて來た。それ見ろ、といふ氣で彼は次第に每晚の——さすがに病氣前の様に朝晝晩とは飲まなかつたが——杯の數を増して來て、此頃では一合か一合五勺の酒をば平氣で飲む様になつてゐるのである。

にこ／＼してゐる老人の前にやがて大きな杯が置かれた。

『自宅にや、お前宅んごつ澄んだとは無エトばい』

さう言ひながら藥罐のまゝ、でどく／＼と濁酒を注いで、老婆自身も一杯手に取つた。

濁酒はまた老人にとつて珍しいものであつた。病氣以來、二年越といふものは自宅を離れて飲むの

が今日初めてであると共にこの白い酒も初めてであつた。齒莖で一度噛み締むる様にしてやがて飲み下す味が文句を言ひながら飲む自宅のものともまた別な風味を持つてゐた。彼は一口飲んで口を閉ぢたまま小さく舌打をして、その風味を味つた。

程なく、酔が出て來た。一度褪めた老人の頬の色は再び薄く萌して來た。この土地で入營した若者共が除隊紀念に村に配るを常とする聯隊旗のついた大きな杯で四五杯も重ねて飲むと、その聲も次第に力づいて來た。そして山の事田畑の事などを老婆に訊きながら、ぼつ／＼何彼と話し出した。田舎に生れたに似合はず、若い時は眼立つて色の白い、きめの細かな性質であつたが、七十に近い歳になつてもまだそれが失せずゐた。額の豊かな、下ぶくれのした頬の邊にいかにも福々しい相が現はれてゐて、生來の無口が一層それを上品に見せた。が、酒が廻つて來ると彼の口數も自づと増して來るのが常であつた。高々と聲に出すではなかつたが、笑上戸の方で、思ひもよらぬ戯談などを言つては自ら笑つた。

さういふ姿を見るにつけても老婆には述懐が先に立つた。

『眞實喃、斯んげ快うならしたとを見るにつれちエむお末さんの苦勞は眞實大概のこつちア無かつたわ喃』

と燃えすする枯枝をさしくべながら沁々と言つて、やがて老婆は顔を上げる様に一層聲をひそめて

言つた。

「そつてむ、お前ももう大丈夫ぢアかる、こりかるお末さんにも樂をさせにや、喃、大事ばい」

お末とは老人の妻の名であつた。

老人は一心に鑪子くわんすの下に燃えて居る火先ほさきを見てゐるが、老婆の言ふのに答ふるともなしに、

「來春、すこし暖うなつたら俺はひとつ東京とうけいまで行て來うと思ふちよる……」

と言ひかけたが、何かを考へ出したといふ風に、さきを言ひ繼がないでやめてしまつた。

「東京に、え？」

老婆は耳を疑ふ様に首を傾げた。

「ウム、……」

「秀坊ひでほうの所が解つたとの？」

「……、解るには解つちよるが、……兎に角まア行て見にや解らん、俺が行けば直き解る事よ」

と言ひ捨て、眉をひそめながら笑つた。眉にも白い毛が大分混つてゐるのだ。老婆はその寂しうな笑顔を見ると、返事を爲兼ねてたゞ黙つて俯いてしまつた。

老人は、然し、自分でも不思議な位くらいも少しその話が續け度かつた。今日の彼の氣色のい、故もあつたらうが、漸く此處にその話場を見出した様な近頃きんがらにない安心した氣持で、續けて行き度かつた

のだ。

「彼も頭から馬鹿ぢア無えから、あんげ爲ちよつとにや、何か考えがあつてからの事ぢやと俺は昔から思ふちよる、それも知らんどつて、ヤレ、どうの斯うのと彼が事を頭からくさし居る奴が澤山居るが……」

老人は言ひさして、唾のつまつた様に止めてしまつた。そして急いで盃を取り上げた。眞實まじつこの物靜かな老人が斯う勢せきひ込んでものを言ふなどといふのは近年殆んど見た事のない事なので、老婆はただはらくする様な氣持ばかりで、いよゝ返事も爲難く、たゞ氣を揉むだけであつた。

老人は盃を老婆にさしながら、調子を變へて強ひて笑ふ様に言ひ繼いだ。

「今見ちよれ、汝共が魂消る様な偉え者になつて歸んで來るからの、ハ、ハ、」

老婆も惶て、一緒に笑つたが、それでもたゞ、

「眞實喃……」

といふの外はなかつた。

「彼も俺共が事を思はんぢや無えどが、何か一旗擧げん事にや、ものを言はん腹ぢやと俺は睨にらうちよる、何しろあんげな事があつたものぢやからの……」

酔つたと云つてもまだ僅かな酒である。老人は自分がいつになく口輕くなつてゐるのに氣が付きな

がら、話をやめるのは惜しかった。

『何しろ彼も見懸に似合はん強情者ぢやつたからの、……お末にでも似たもんぢやろ、ハ、、、』
平常の様に濁りのない笑聲になつたのを聞くと、老婆も漸く心から笑ひ出した。

『ハ、、、さうぢや、お前に似た所は何處ぢやろかい』

『是よ』

と老人は盃を取りあげてその笑つた眼をやつた。

『まこち喃、幼時から飲みよらしたの、やんがち父親より立派な飲手にならずど喃、もうなつちよらすかむ知れんばい』

『ウム』

と大きく點頭いて、

『まだ手紙を呉れよつた時に、よう酒の事が書えちあつた、今日は何處其處で何といふ酒を飲うだが速う父上と一緒に其處で飲み度いものぢやと喃、よつほど彼も好きぢやろわい』

それを聞くと、子の無い自分達が子の様にして可愛がつてゐたこの老人の一人息子の面影が酔つた老婆の心にはつきりと浮んで來た。それと共に涙がまた浮んで來た。

『何といつても東京ぢやからの、どんげな酒でも有らうわい、俺共が大阪に修業に行ちよつた時ブラ

ンデンといふ酒をよう飲うだが、恐しい強い酒ぢやつた、……』

永い間、ことに病氣に罹つてから幾つとなく心の裡でこさへあげておいた空想の一つが、いま老人の胸の底で明るい影を作つてゐるのであつた。息子の事とも、世の中の事とも全然懸け離れたただく、甘い味が其處にあつた。老人はいまそれを食りつ、あるのであつた。

そして、半ば夢から覺めた様に身體を揺つては、

『來春は行て見よう』

と呟いた。

二人ともい、加減に酔が廻つてゐた。障子に射してゐる日影が餘程薄くなつて來たのにも氣がつかぬ風で、たゞ向ひ合つてゐた。

其處へ厩の馬が急に大きな聲で嘶くと、何か重いものをどしんと置いた音がした。惶て、立ち上つた老婆は草履をも履くや履かずに土間に降りて行つたが、まだ彼が何も言はぬうちに一人の大柄な老爺がのつそりと裏手の戸口から入つて來た。そして圍爐裡の正面に坐つて居る老人を見附けると、びたりと立ちどまつた。

『おう！』

と唸る様に言つて、窺く様に老人の顔を見詰めながら、

『お前や、マ、どうしたとの!?!』
『ウム、歸んだか』

と見海老人はまだ夢の中の様な聲で言つて薄暗い土間の隅に立つてゐるその大きな聲の主を探す様に首を延ばした。

老婆は急にはしやいだ聲でこの意外な珍客の事を老爺に話して聞せた。老爺は眼を瞞りながらそれを聞いてゐるが、漸く鉢巻を取ると泥だらけの両手を上り框についてお辭儀をした。

『行かう〜と思ちよつてむ、なか〜思ふごつ行けざつたが、……まア、そつでむ、そんげもう快うならしたか喃、それは〜。マ、おめでと御座つた、……、何かの、此處まぢ御座らしてむ、何うも無えかの?』

『ウム、マ、何とも無えごたる』

老人は何だかきまりの悪い様な氣持でこの幼友達の顔を見た。老人よりこの八兵衛隠居の方が二つ年上で、二人は五つ六つの時から可笑しい位る仲が好くて、いつも村の他の仲間から水をさ、れつ、大きくなつて來たものであつた。今年、老人は六十八、隠居は丁度であつた。

隠居は其儘其處に腰かけてしまつた。山装束を着換へるのも、草鞋をとるのも面倒臭かつたのである。そして手も洗はずに老人のさし出した大きな盃を受けた。老婆は急いでそれに酌いだ。急に忙し

く無言のまゝに盃が二三度往復したが、その間にも老人は待ち受けたこの友達の顔を見ると急に何となく氣の落ちつかぬのを感じた。そして、障子の日影の消えかゝつてゐるのにも氣がついた。

『俺は、もう、歸なう』

『……、何言うの、こりかるぢアねえの』

驚いた隠居は不思議さうに立ち上つて、泥だらけの襪帯を解き始めた。

けれど老人も其時既に立ちかけてゐた。そして、埒もなく前によろけて板の間に手をついた。老婆は驚いて抱き起したが、老人は笑ひながら老爺の方を見返つて、

『八爺、送つて行け』

と言つた。八爺も安心した様に口をあけて笑ひながら、また其儘帯を締め直して、

『此處い御座い、此處から背負ち行くわの』

とその岩疊な背を老人の方に向けて背後に両手を延べた。

老人は否みもせず笑ひながら其處まで老婆に手を取られて行つた。

『何か、紐でむ遣ろかい』

老婆は心配相に言つた。

『なアにが!』

と八爺は嘲る様に言ひながら、その時既に彼の背に子供の様に軽々と負はれて居る老人を振返つて
 『久しぶりぢやのう!』

と笑つた。他處で二人で飲んだ後は老人は大抵斯うして負はれながら送らるゝのが近年の習慣になつてゐたのだ。老婆は庭に驅け降りて老人の草履や杖を八爺の手に持たせながら、なほ不安さうに二人のあとに隨いて行つた。

もう全く日暮であつた。森はづれから見ると向岸の村には暮靄が薄く懸つてゐた。がつしつと八爺は崖の路を降りて、程なく橋の所に來た。

その時恰度向岸の川原から一人の小柄な老婆がせか／＼とこちらへ歩いて來たのであつたが、老爺たちが橋にかゝつたのを見出すと、彼女は頓狂な聲をあげて、

『まア、八爺さんぢア無えどかい!』

老爺もそれを知つてゐた。そして、たゞ、

『お末さんの!』

と答へた。

『まア、大概お前の宅と思つちよつたけんどのう。……』
 と言ひながらそわ／＼と近づいて、

『まア／＼忝けのござつた、……、貴郎歩けますどが』

と老爺に負はれてゐる人に手をかけ乍ら言つた。彼が何か答へ様とするのに被せる様にして老爺は

『なアにが!こん儘お前宅まで連れて行こ、そんな方が速え』

『さう喃。そんならそんなげして貰はうかい、』

と言ひ／＼老爺の手から杖と草履を受取つた。

『お末さんかのう!』

此方からは既に薄暗くなつてよくは見わかぬ河岸の崖の蔭から斯うした聲が突然聞えて來た。

『アラマア、お萬かア、汝も其處に來ちよつたつかえー!』

と此方の老婆は驚いて答へながら水際まで小走りに歩いて行つた。

『今日はまア、魂消たわ喃!』

『そうぢやつたるとも、……、いろ／＼また忝けの御座つたよ』

『いんネ喃、そつでむまア斯んげ快うならしち善かつた喃』

『オイ喃、……』

何か言はうとしたが、老爺たちが既うどし／＼と歩み出したのを見ると急に調子を變へて、

『そつぢア、また逢はうの、爺さんをば借いて行くどよ』

と言ひ置いて二人のあとを追つた。

その翌朝、心配してゐた程の疲労も出ず、見海老人は元氣よく床を出た。

『ソラ見よ、俺ももうこれから大丈夫ぢや！』

自慢を言ひく／＼膳についたが、食事は流石に進まなかつた。

その朝は暖いを以て知られた九州南部の其處の村にも秋らしく寒さの感ぜらるゝ日であつた。老人は型ばかりの朝餉の箸を置くと、また暫く床に潜つてゐた。が、次第に戸外の日光の強くなるのを感じると、矢張りぢつとは寝てゐられないで起き上つた。

正午近い頃であつた、彼は庭先にある大きな栴檀の落葉を掃いてゐた。幹の直径三尺に餘つてどつしりと枝を張つたその老木の落葉は、二日も始末をせずに置けば四邊の庭から石段から屋根から、庭に續いた小さな野菜畑を眞黄に染めて了ふのであつた。その日は既う一頃の様にはなかつたが、それでも立ちつ蹲踞みつ病人爲事に専念に掃除をしてゐる老人の前後に折々小枝の様な大きな葉がばさりと音を立て、落ちて來た。

もう少しでその掃除の終らうとする頃、庭から東に當つて日のよくさしてゐる岨路を馬に乗りながら降りて來る人影を彼は見附けた。その路はとろ／＼と三町ばかり坂を降りて來て老人の家の門を過ぎ、ずつと村の方へ續いてゐるのである。暫くそれを見てゐると、箒を持つたまゝ老人はそゝくさと勝手口の方に廻つて行つた。そして、

『水、水』

と呼んで、老いた妻が手洗水を持つて出るのを待ちながら、

『眞卿が來たぞよ』

と囁く様に告げ知らせた。

『……………？』

老婆は脚のついた小さな手水盥を其處に置くと、ちよ／＼と庭先の野菜畑に近寄つて左手の岨路を見上げたが、その時はもう馬と人とは坂を降りつくさうとする所であつた。

『ど、ど、……………、！』

植込の蔭になつた門前に、やがて馬をあやす聲が聞えて、洋服を着けた五十餘りの中老人がいま掃かれたばかりの石段を登つて來た。急いで手を洗つた見海老人はその時室内に廻つて玄關の障子を開けひろげながら莞爾々々と立つてゐた。其處に勝手の庭からは手を前垂で拭きながら小走りに彼の妻が出て來た。

兩人がさうして立つてゐるのを見ると、こつ／＼と登つて來た洋服の老人はやゝ驚いた様子で立ち

上つたが、

『やー!』

と元氣よく言つて、惶て、古びた山高帽をとりながらどちらへともなく頭を下げた。

程なく二人の老人は奥座敷の床を離れた庭に寄つた方に向ひ合つて酒を始めてゐた。蜜柑や柚子や山梔子などの植込を透して白々と流る、溪が其處からは眞下に見下された。南向きの軒から這つた日影が、うす赤く其處の古畳の端を染めてゐた。

二人は二人きりの兄弟であつた。兄は穩和一方、弟はなか／＼霸氣に富んで、それ／＼の容貌もまた正直にそれを表はしてゐた。亡くなつた二人の父は兄よりも弟の霸氣を愛して、熊本から大阪京都と出してやつて醫術の修業にも特に弟には念を入れた。そして免状をとつて歸つて來ると其處よりは三里餘も城下寄りの、附近に有福な村として知られてゐる山田村といふのへ本家よりはずつと大きな邸宅を建て與へて開業させたのであつた。そんな事から村の者共の間には折にふれてはあれこれと事あれがしにこの小田一家に關して評判が立てられてゐるが、當の兄弟同志は可笑しい位仲が好かつた。お互ひが四十、四十五、五十歳と年の進むにつれてその交情は益々濃くなつて行つた。兄は解もなく弟を最眞にし、弟はまた他を屁とも思はぬ性質の癖にこの兄だけをば例外として尊敬してゐた。

どうかして三月か半歳も出逢ふ機會がないとどちらからか、わざ／＼出向いて行つて半日一日、時によると二日ばかりで一緒に時を費す事があつた。兄はもとより寡言、平常は多辯な弟も兄の前に出ると自づと言葉少なになるのが常で、何の話を爲合ふではないが双方とも唯だ酒が好きで、逢ふから別れるまでちび／＼と盃を嘗めて、その間はどんな事があつても殆んど座を立たなかつた。はては「醫者どん兄弟を出逢はしたら二個村の病人な上つたりぢや」と村の者が愚痴をこぼす様にもなつた。それで、先來健康で風邪薬一つ飲んだ事もない様な兄の方が急に一昨年中風症に罹つて倒れた時など、弟の驚きは見ると氣の毒な位であつた。發病當座毎日三里の山道を自身で通つて來るのみならず、遠く城下町の方からも自分の信用してゐる先輩を連れて來て診察させたりしたのであつた。幸にその病氣が最初案じた程でなく、急に如何といふ事の無いのが解ると弟の兄を見舞ふのも一週間越となり半月目となりして、此頃ではかれこれ三月あまりもやつて來なかつたのであつた。そして久瀧ひよしほりに來て見ると人傳ひとつてに聞いて想像してゐるたより遙に兄の元氣なのを見て、弟は涙ぐんだ程に喜んだ。座に上つた挨拶がすむや濟まぬに兄の顔を見詰めながら大きな聲で、

『これなら大丈夫、兄貴、お前ももう一度は人間にならるゝわい!』

と言つた程であつた。そして嫂にも心から祝ひを述べた。「これもみんなお前のお蔭なのだよ」と言つて嫂はまた改つて長い間の禮を言つたりした。

然し今日突然弟の來たのは、單に兄を見舞ふばかりではなかつた。金を五十圓二三日の中に心配して呉れないかといふ頼事を持つて來たのであつた。場所がい、だけ収入は兄の三倍もあるのであるが息子の學資や其他一體が派手好で、山氣に富んだ弟の方は常に少からぬ借金を負つて暮してゐた。兄に無心をしたのも既う數へ切れぬ程あるのであつた。

『フム！』

弟のその話を聞き終ると兄は急に顔を曇らせて目を反した。

『俺も既うこれを送つたら、どんげな事があらうとも二度と金をば送らぬ積りぢや、今度も餘程送らずに置かうかと考へて今迄打棄つて置いたのぢやつたが、昨日の電報の様に若しそれでつまらぬ所へ行くやうになるとのう……』

兄の様子を見ると弟はまた惶で、斯う附け加へた。彼の髪はまだ黒々と艶を持つて、や、角張つた頭の真中から分けられてあつた。髻も眞黒で長さは三寸の餘にも及び、圓く輪を作つた風にその血色のい、唇を圍んでゐた。

『では、何か、その金を送らんと善司は監獄にでも行かんらんと云ふのか？』

『能う解らんが、先日來た手紙と云ひ、昨日の電報で見るとどうも左様いふ事らしいのぢや』
『フム、困つたのう！』

思はず兩膝を揺つて、彼は深い溜息を漏らした。弟も所在なげにガツシリと坐つた身體を動かした。

『また瞞着かも知れんが、さういふ風ならもう一度だけは送つてやらにやなるめえ、送つてやつて兎に角郷里へ一度歸んで來る様に云うてやるが可え、いつまでもさういふ風なら他國へ出しておいてもあかんわい』

『俺もさう思ふちよる、歸んで來れば藥局の手傳位るは出來るぢやらうと思ふからの、その方が兩方の爲ぢやらうばい』

と自づと調子を高めて言つたが、また低聲に兄の顔を見ながら、

『如何ぢやらうの、金は出來うかい？』

『さア、ナ、俺が所には一文も無えが、婆さんにさう言うて川向うの八兵衛隠居の所にでもやつて見うかと思ふちよる』

『姉女には行て貰ひ度う無えがの、……、……、……、餘り度々ぢやからの、どうも姉女には頼まれんわい、……、……、……、兄貴、お前ちよいと行て呉れんかの』

『フーン、俺がか』

見海老人はまたきちんと揃へてゐる膝を揺つた。そして彼はこの近年、殆んど廿年以上自身に金を借りに出かけた事のないの思ひ出してゐた。彼の家も近年では次第に貧しい暮しを續けてゐるが、

彼の妻が並ならぬし、つかり者で、勝手向の事から薬種商との取引、東京に出してあつた息子の學資金の送達など一切彼女一人で引受けてやつてゐた。で、老人自身は自分の家にどれだけの借金があるのか、誰から借りてゐるのか、折々妻からの話をば聞くもの、殆んど知らぬと云つていゝ位であつた。世間の者も亦た好々爺の老人より話のよく解る、遺練の確かな老婆を相手にするのを喜んだ。老婆は斯うして自分の家の事ばかりでなく他の人々の貸借の仲にも立ちまたは村で起さるる無盡の世話人などにもなつたりしてゐた。その老婆は自分の義弟の眞卿醫者を甚しく嫌つてゐた。勝手坊、横着者、威張屋、さうした塊の様に思つてゐたのである。義弟の方でもそれをよく知つてゐた。そして鼻つ張の強いにも似ず、この老いた嫂に對しては一目も二目も置いて對してゐたのである。今日も家を出る時にはよく／＼の思ひでこの苦手の嫂に頭を下ぐる覺悟で出て來たのだが、來て見ると案外にも兄が起き出してゐたので、忽ち腰が折れてこの兄によつてのみ事の成就を計らうとしたのであつた。

『兎に角行つて見う、大概出來ると思ふがの、……………、昨夜も隠居は俺を送つて來て遅うまで飲んで行つたが、近頃木炭や椎茸の値がいゝので大分溜めたらしいからの』

と弟を慰むる様に言ひはしたが、然し此頃ではあの強情だつた隠居も大分婿の手前を兼ねてゐるらしいので話が面倒かも知れぬと心の中で思つた。それに五十圓と云へば大金なのに弟が何の抵當をも持つて來てゐぬらしいのが氣になつた。抵當に入れやうにも早や何一つ無いのに相違ないと思ふと、改めてそれを弟に訊いて見る勇氣もなかつた。兎に角自分が行つてみる、そして若し駄目の様であつたら更に妻に頼んで何とか才覺して貰ふ、どうかして弟のこの依頼をば成就をしてやりたいものと老人は固く心で決めてしまつた。そして八爺には今日の夕方逢ふこと、結果をば明早朝使を立てる事にきめてその話をば終つた。

『秀夫が事は解つたの？』

自分の方の話が片附くと弟はや、安心した風に盃をとつてゐるが、やがて突然斯う兄に問ひかけた。

『ウム、……………、まだ解らん』

兄は呟く様に答へた。

『それも困つたものう、矢つ張り警察の方に頼む方が可うは無えかの』

『ウム』

斯う言つておいて、暫く彼は他處の方を見てゐるが持前の靜かな調子を一層低くして、

『この分では大概俺も大丈夫と思ふから、來春になつたら一つ東京まで行て見うかと思ふちよる』

それを聞くと弟は驚いて兄の顔を見た。そして二人は探り合ふ様な眼を見合せてゐるが、弟の何か言はうとするのを遮る様にして見海老人は言ひついだ。

『俺が東京に行けば先づ大隈伯爵の學校に行て見る、さうして彼の出て居つた學級を受持つて居らし

た教員に逢うて、その人にも訊いて見、またその人から彼の親しうしちよつた友人の名や所を調べて貰うてその友人達にも逢うて見うと思ふちよる、……………」

老人は静かではあつたが、段々熱意をこめて言ひ繼いだ。

『さうすれば同じ學問の道の教員なり友人なりにまで隠して居るとは思はれんから、彼の居所は直き解らうし、それが解つて逢へさへすれば能う彼の心持も聞いてみて、話の筋道が立つちよりさへすれば何も既う彼の云ふ通りに任せて見うと思ふちよる、……………」その女と一緒になつちよるならそれとも逢うち見て、公然の夫婦にしてやつてもいゝからの、……………」どうしても東京でなけりやならんと云ふなら東京で氣儘に精一杯勉強するも可からうぢや無えか、どうせもう田舎に歸んで來ても始末はつくめえからの』

思ひもよらなかつた兄の話に弟はただ驚きながら黙つて聞いて居る外はなかつた。そして

『さうの、然う行けば善い事ぢやが、……………」第一お前やその身體で東京まで行くかの』

『行くと思ふちよるが、の、……………」來春まで待つて見てどうしても行けねエ様ぢやつたら諦むるが、それども手紙で學校、教員それから友人と、段々その様な事を訊いてやるのぢや、さうして此方の心持が能う彼に飲みこめさへすれば彼からまた何とか云ふて來るぢやらうと思ふちよる、……………」一遍話を爲に歸んで來て呉る、と可いとぢやが、のう』

老人は話し終つて暫く何か考へてゐるが、やがて寂しさうに笑ひながら、

『俺が今まで秀夫の事を訊いてやつたのは皆郷里から出た彼の友人ばかりぢやつたとぢやが、その手合と秀夫は何でも喧嘩か何か爲ちよると俺は思ふとるのぢや、その手合は小學校でも中學校でもみな秀夫と學問の上で張り合うて來て大概彼に敗されたとばかりぢやからの、それで東京で秀夫が何か一つ失策ると皆が寄つて集つて彼をこなすとぢやらうと思ふのぢや、先日の新聞に出た秀夫が事ども、その手合の仕事に違ひねエと俺は思ふとる……………」秀夫はまたあんな癩癩持ぢやからさうなれば故意にも怪しな事を爲るぢやらうと思ふのぢや』

さういふ事までこの兄が考へてゐるかと思ふと、弟は笑ふにも笑へず、たゞ「フン、フン」と聞いてゐた。そして心中では或はさういふ事があるかも知れんとは考へてゐた。

其處へ山芋汁を大きな摺鉢に入れたま、老婆が運んで來た。

『如何しなつたとネ、今日は一向に徳利の掬が行かんだるが……………」

とにや／＼笑ひながら、

『また何ちやろネ、上等息子の評判ぢやろネ、……………」善司が如何か爲やせんぞ?』
と意味ありげに義弟の顔を見た。
洋服の老人は惶て、長い髯をしごいて、

『イヤ、ナニ、いま兄貴から秀夫の話聞いてちよつた所ぢやが、……………、お互ひ眞實困つたものう』

『もうあんげな奴が事う何とも思ひなんと始終しよつちゆう云ふちよつとぢやけんど、なか／＼こん人は諦めが出来ん風で困りますとよ』

『馬鹿、汝われどもに何が解るか、……………、秀夫が性根を知つちよるとは俺ばかりぢや！』

老人は突然大きな聲で斯う言つて、顔をあげながら、音のする位る膝を揺つた。

この老人達に一人づつの男の兒があつた。弟の息子が年長で、今年もう三十歳を二つ三つ越えてゐた。幼い時から伶俐者りうれいものと云はれ、父親もそれが大自慢で、二十歳にならぬうちに一人前の醫者にすると吹聴しながら正式な道も踏ませず、大阪の或る塾に入れた。學費などをどし／＼と送つてゐたが息子は其處でいち早く酒を知り女の味を覚えてしまつた。それから京都に行き、岡山に行き、今は次第に郷里くりにに近い熊本まで来て醫術修業を續けてゐるのであるが、いまだに前期の試験をすら通つてゐなかつた。其間彼は實によく金を遣つた。世間の手前意地になつて父親もその金を送つてゐたのであつたが、殆んど全部そのために家邸まで抵當に入れて了つても尙ほ何の効果のないのを見ると、流石ながさかに落膽がつかした。そしてこの上はせめて前期の免狀をとる迄藥局生なり何なりして自分でやつて見るがよい、こちらからはそれ迄一切送金しないからと言ひ渡したのであつた。それから既に三年近くも經つ

て居るのだが、矢張り何かの口實の下に絶えず送らせられてゐた。今度もその一つであつた、そして今迄は病氣とか盜難とかの理由で送金を求めて來たが、今度は或る義理の悪い金を遣ひ込んだといふのであつた。

『お前宅とはそれでも金を送れ／＼言はんだけでもいゝわの、俺がとはもう如何もならん』
嫂あはに盃をさしながら、自づと出る愚痴を漏らして、眞卿老はハツと思つた。

『送れと云ふてもお前宅と違つて鼻血も出ん事を知つとるかの事ぢやわの、そして何かといふと直き喧嘩腰になつて唯だ一人の父親の病氣をも知らん振して歸かへんでも來ん事を考ゆると業が沸いてならんがの』

『それは彼が知らんからぢや、彼には俺の病氣は知れとりやせん！』

『知らんちうのが嘘の始りよ、何本も行た手紙にみんな手前で附箋つけがたをして返し居るとぢや！』

見海老人には早く二人の娘があつて唯だ一人のいま東京に出て居る息子はずつと遅れて彼の四十二歳の時に生れたのであつた。拾ひ物をした様に喜んだ彼は小學校すら村には出さず、十里から離れてゐる城下町の大きな學校へ入れ、やがて其處の中學校へ入れた。小學も中學も息子の成績は頭抜けてよかつた。ほく／＼喜んだ老人は中學から直ぐ正式の醫學校に入れて、天晴れ立派な醫者として自分のあとを繼がせる積りである。村の者もそれを喜んでゐた。さうしてその醫學校の學費は村一帯から

出資する様にして、そのため一つの無盡が起さる、事になつてゐたのである。所がその中學の卒業式の濟んだ日、例年通り祝賀會が開かるる事になり、息子はその會の幹事をする事になつてゐた。その年が恰度日露戰爭の開かれた頃で、中學の校長はその息子呼んで、例年ならば今日大いに酒でも飲んで賑かに祝ふ解だが、斯うした時でそれをば遠慮するがよいと思ふから酒をば止して單にお茶と菓子とで會を開く様にと言ひつけた。承知して校長の前を退いた息子は、その日の會場で校長から言はれた通り、時節柄お茶だけで我慢して頂き度い、その代り腹の破る、迄飲んで呉れと挨拶して大きな番茶の土瓶を各自の前に配つた。その中には冷酒が一杯に湛へられてあつた。さうした事をしておいてその翌日彼は唯だ一人こつそりと附近の港に出て其處から汽船に、神戸から汽車に乗つて三日ほどか、つて東京に来てしまつた。そして郷里へ手紙を出した、私はどうしても醫者をする氣になれないから矢張り豫てからお願ひして居つた通り生來好きであつた文學を以て一身を立て度い、然し父上の意向にない學問をするのに父上から補助を受けては心に濟まぬから今後一切構はないでおいて呉れ、其間ずつと不孝の状態を續けるであらうがさう永い事とも思はぬから許して呉れ、と書いてあつた。それを見た父親は驚きと憤りとに氣絶する程であつた。そのうちに息子を特別に可愛がつてゐた中學の或る教員が、その事を聞き知つて慇々村まで訪ねて来て猛り立つて居る父親を説き一方には東京の息子を諭した。本人の嫌ひな修業を強ひる事は中途でどんな間違ひが起らぬとも限らぬ——これが父

親には烈しく響いた、自分の甥の不始末を見てゐたからである——また苦學して好きな事をやり上げようと云つた所で思ふ様に行くものでないと双方を説いて、終に父から學費を出す様にして息子は早稲田大學の文學科に入學する事になつたのであつた。それには斯ういふ條件がついてゐた、學校を卒業したらば父母在世中だけでも郷里に近い地の中學なり師範學校なりの教師をして父母に仕ふる、その傍ら自分の好きな事を勉強するといふ事であつた。三年ほど無事に過ぎて、後一年すれば卒業するといふ時になつて或る時突然息子から自分は斯ういふ女と結婚したいから承諾して呉れと頼んで來た。その時既に村の或る家の娘を自分の嫁に貰ふ事に下相談が出来て、其家から學資の幾分をも出させてゐた親達はまた驚いた。叱りつ頼みつした手紙を息子に送つてその返事を待つてゐると、矢張り自分が間違つてゐた、卒業しても田舎へ出てゐては自分の一生の事業に狂ひが出て來る懼れがある。何卒兵隊にとられて戰場にでも行つてゐる氣で何も彼も暫くの間自分の事をば見捨て、置いて呉れ、といふ手紙を受つたのであつた。追懸けてこちらから手紙を出すとそれは受信人轉居先不明の付箋がついて戻つて來た。そしてその事があつて程なく父親は中風で倒れたのであつた。

『苟くも郵便局といふものが、そんな不都合を働かせて耐るか!』

老人はまた聲を荒くして妻を叱つた。

『あん子が事ぢやもん、どんけな事でも爲うぢやねの!』

老婆も本氣になつて憤つた。

「まア、まア、俺共は揃ひも揃うて子運が悪いとぢアから何も諦めにやどもならん、い、齡をしての！」
眞卿老人はさう言ひながら膝を直した。そして、

「そつちや兄貴、俺はどしても晩方の立合診察に行かんらんで、これで歸ぬるがの、………」
と目顔で言ひながら、

「ア、何より自身の身體を大事にするが一番ぢや、ちつと快いからと云うて安心は出來ん、齡が齡ぢやからの」

「ウム、ウム」

見海老人も立ち上つた。やがて、

「ど、どう！」と言ひながら馬に乗らうとする弟の側に立ちながら、

「い、か、眞卿、大丈夫か、汝は酔うちよりやせんか、其處の坂だけでも歩いち行かんか」

「フーン、大丈夫よ、ぢや、嫂女、御馳走でがした」

「何ののう、泊つて行かる、とい、とにのう！」

馬は小走りに馳け出した。そしていつの間にか午後の日射になつてゐる坂道を元氣よく登つて行つた。

卷末記

○この巻には前巻に續く大正十三年以後の隨筆小品三十二篇と、小説十篇とを収めた。

○隨筆小品の初めの方は沼津上香貫時代、「木槿の花」以下は大正十三年八月千本濱に移つてからの作、「火を焚く」以下は十四年十月同じく千本松原の蔭なる市道町に移つてからの作である。沼津千本松原」といふのが二篇あるが、これは文中にもある如く千本松原の一部伐採の議のあつた際に、松原擁護運動の一つとして書いたもので、前者は十五年八月の「沼津日々新聞」後者は同九月「東京時事新報」に掲載された。「野蒜の花」は前巻所載のものと同じく「創作」に出したものであるが、これはその後「流るる水」と改題されて同じく「創作」に連載された。この「流るる水」の(その九)は昭和三年九月號に掲載されて、散文としての最後のものとなつたのだつた。

○小説の中では「裾野」と「燈臺守」の二篇だけが散文集『海より山より』に採録されて居り、他は皆一度雑誌に發表されたきりであつた。發表の誌名は次の通りである。

- 一 家(明治四十年十二月「東亞の光」)
 蝙蝠 傘(同 四十一年二月—三月「東亞の光」)
 古い 村(同 四十二年六月「新潮」)

裾野 (大正五年十月「新日本」)
 燈臺守 (同 五年十二月「家庭」)
 狐か人か (同 四年十二月「日本少年」)
 麥の秋 (同 五年十月「早稻田文學」)
 若き日 (同 六年一月「秀才文壇」)
 或る死んだ男 (同 八年一月「短歌雜誌」)
 老人 (同 九年一月「青年改造」)

○「一家」はその附記の中に「次號を以て完了すべし……」とあるが、續編は掲載されなかつた。「裾野」「燈臺守」の執筆は發表よりもよほど前ではなかつたらうかと思はれる。小説に最も熱心だつたのは明治四十年前後早稲田大學在學中で、回覽雜誌「北斗」其他に發表した作品はかなりの數に上る筈であるが、それらが皆散逸してしひ、本卷所載のものだけしか集らなかつたのは實に残念である。なほこの他に中學時代の作が一篇發見されたが、それは少年期の他の作品と共に第十卷に入れることにした。

○口繪寫眞の一は「沼津千木松原」の初めの一冊を書いた當時。「上香貫の家」に見えてをる落葉木は櫻、木の間に見える瓦の屋根が書齋になつてゐた離室で、母屋は二階建だが左方の木の蔭になつてゐて見えない。向うの山は香貫山である。(大悟法利雄記)

(隔角製本)

昭和五年三月一日印刷
 昭和五年三月十三日發行

牧水全集 第七卷

著者 若山 牧水
 發行者 山本 三生
 印刷者 竹内 喜太郎

東京市芝區愛宕下町四丁目四十番地
 東京市牛込區櫻町七番地

發兌

東京市芝區愛宕下町
 四丁目四十番地

改

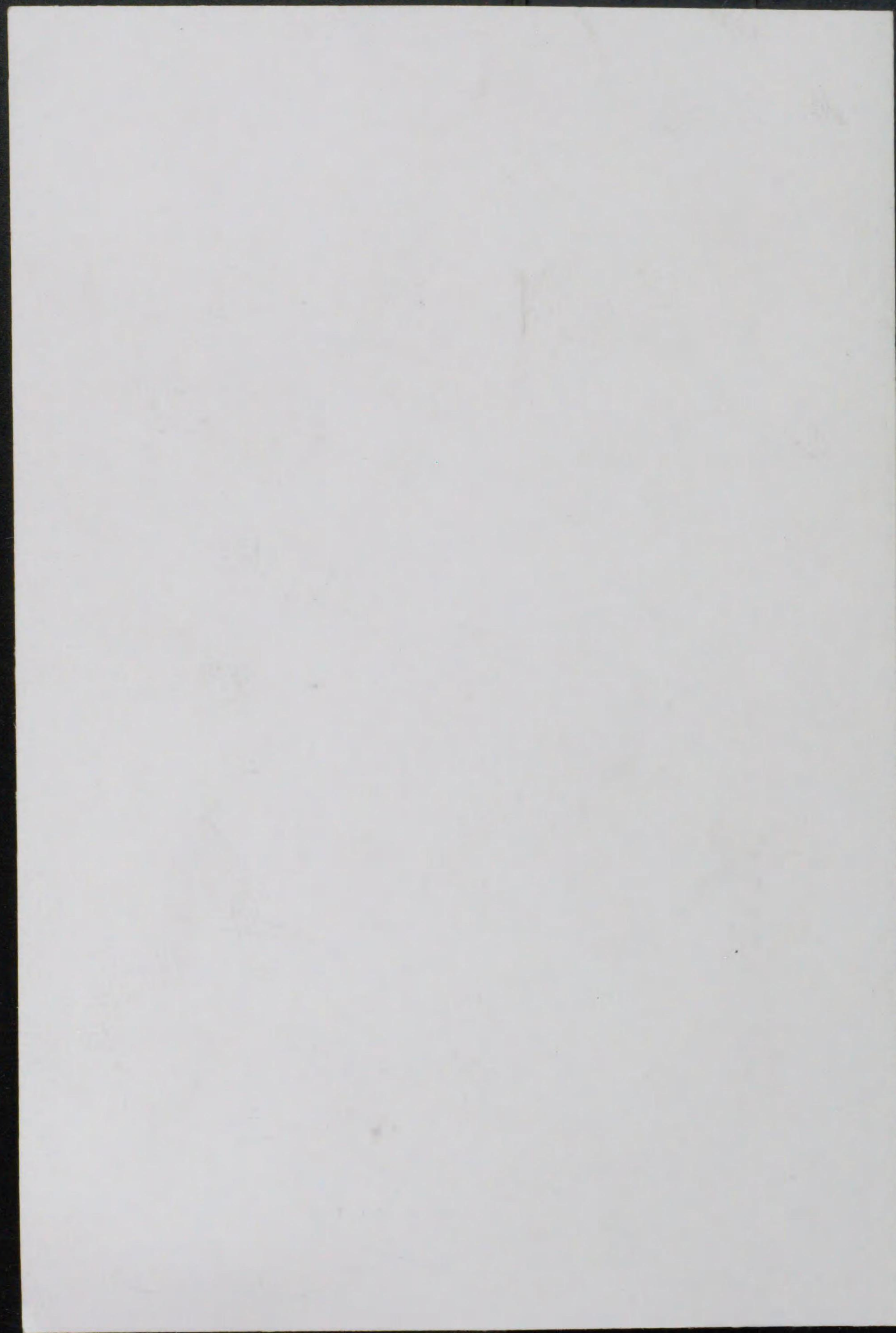
振替口座東京八四〇二二番
 電話芝(43) 四三二二番
 社

598
33

~~598~~ 915.36
~~33~~ MID

598
—
33

823
22

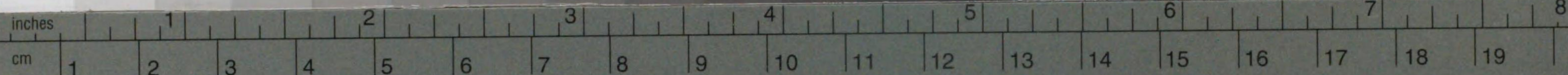


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

